女鑑

第十六年
第十號



女鑑 第十六年 第十號 目次

再版

人類學講義

理學博士坪井正五郎先生講述

菊版洋裝全一冊
定價金壹圓拾錢
郵稅十錢

吾人の祖先は如何にして出現せしか出現せし當初は如何なる狀態なりしか如何にして文明の端緒は開かれしか如何にして今日の複雜なる社會を組織するに至りしか是れ人類學上最も趣味ある研究なるべし本書は我國に於て人類學の泰斗たる坪井博士の極めて平易なる言文一致にて講述せられし者なれば創世紀の人類說、人類一種論と人類多種論、諸種族系統の採り方、人類の大別小別、日本種族、人類の本源地、人猿同祖論、等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたり歷史及人類を研究する人々には座右缺く可らざるの良書たるを信す

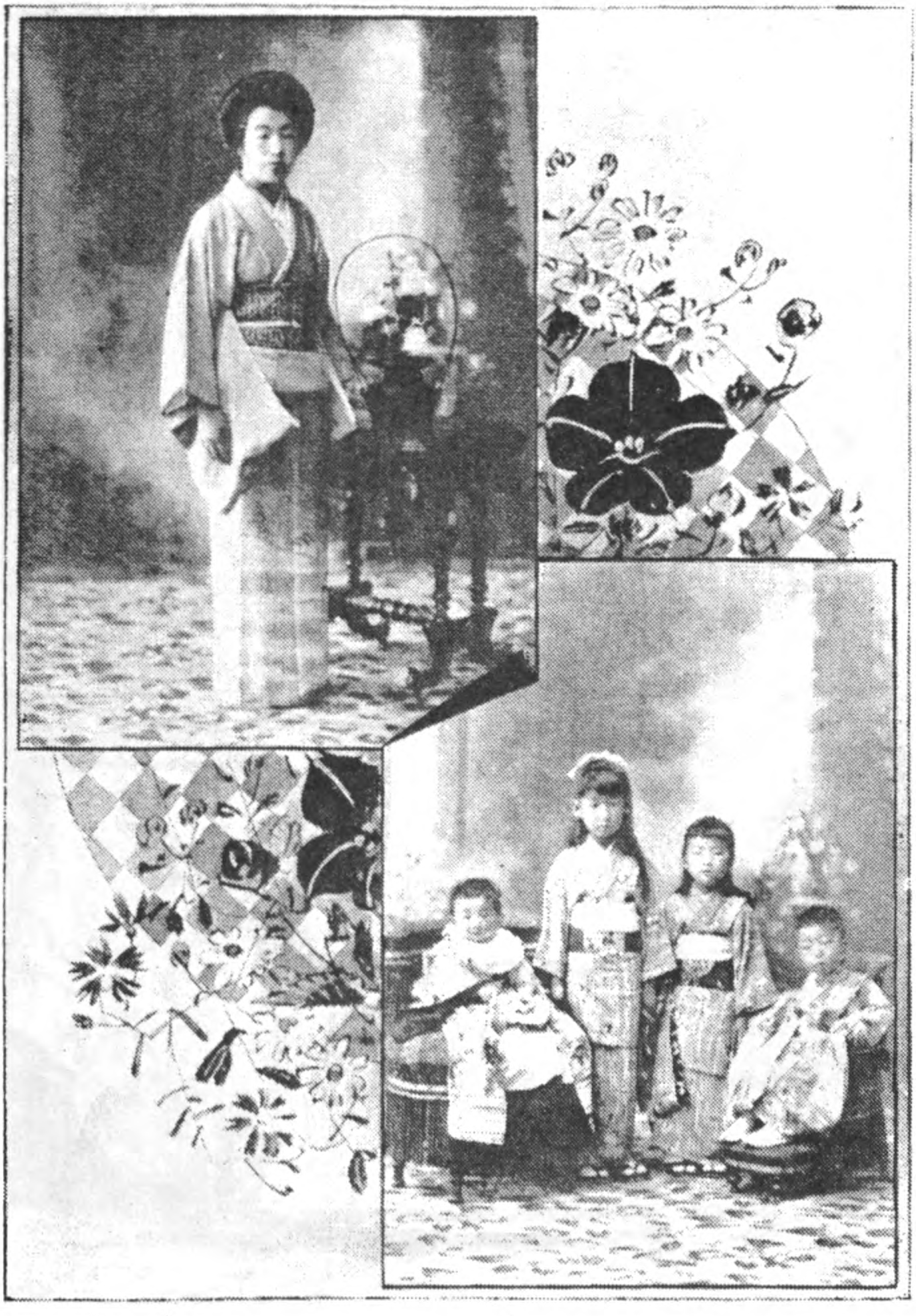
再版

發行所
東京市京橋區築地二丁目
株式會社 國光社
（電話新橋八八•二六九三）

久邇宮妃俔子殿下



東本願寺の家庭



大谷伯爵夫人 章子君

右ヨリ 令息 光暢君 令嬢 楽子君 政子君 忠子君

渡邊男爵の家庭

三女鶴子君（松本法學士令夫人）
四男甕麿君
令嗣夫人留子君（大山侯三女）



令嗣千春君
四女千菊君（中川男爵令夫人）
二女千夏君（鹽川法學士令夫人）

男爵渡邊千秋君　令夫人逸子君

氣のむきやう



幼兒百態（四）

井伊直方君撮影

婦人藥

一週間分　金四拾五錢
三週間分　金壹圓貳拾五錢
五週間分　金貳圓

主治之効能

婦人血の道一切。子宮病。産前産後諸症。月經不順。月經困難。逆上。耳鳴。頭痛。眩暈。氣欝。動氣強き。息切れ　便秘。白帯下。赤帯下。腰腹痛み。腰腹手足の冷へ。消渇。神經諸症其の他貧血及衰弱諸症に强壯藥として無比の奇効を奏すべし。

婦人藥は世にありふれたる一時的の血の道藥と異なり効能顯著なる根治的良藥なれば一日分位の服藥にしては充分の効績を見難けれども少なくも七日分以上服用あれば奏効の確實なるを認めらるべし故に持長して連用あらんことを望む。

東京市日本橋區本石町三丁目十八番地

發賣元　藥種貿易商

合資會社　博愛堂藥店

電話本局二百八十六番　電信略號〇八

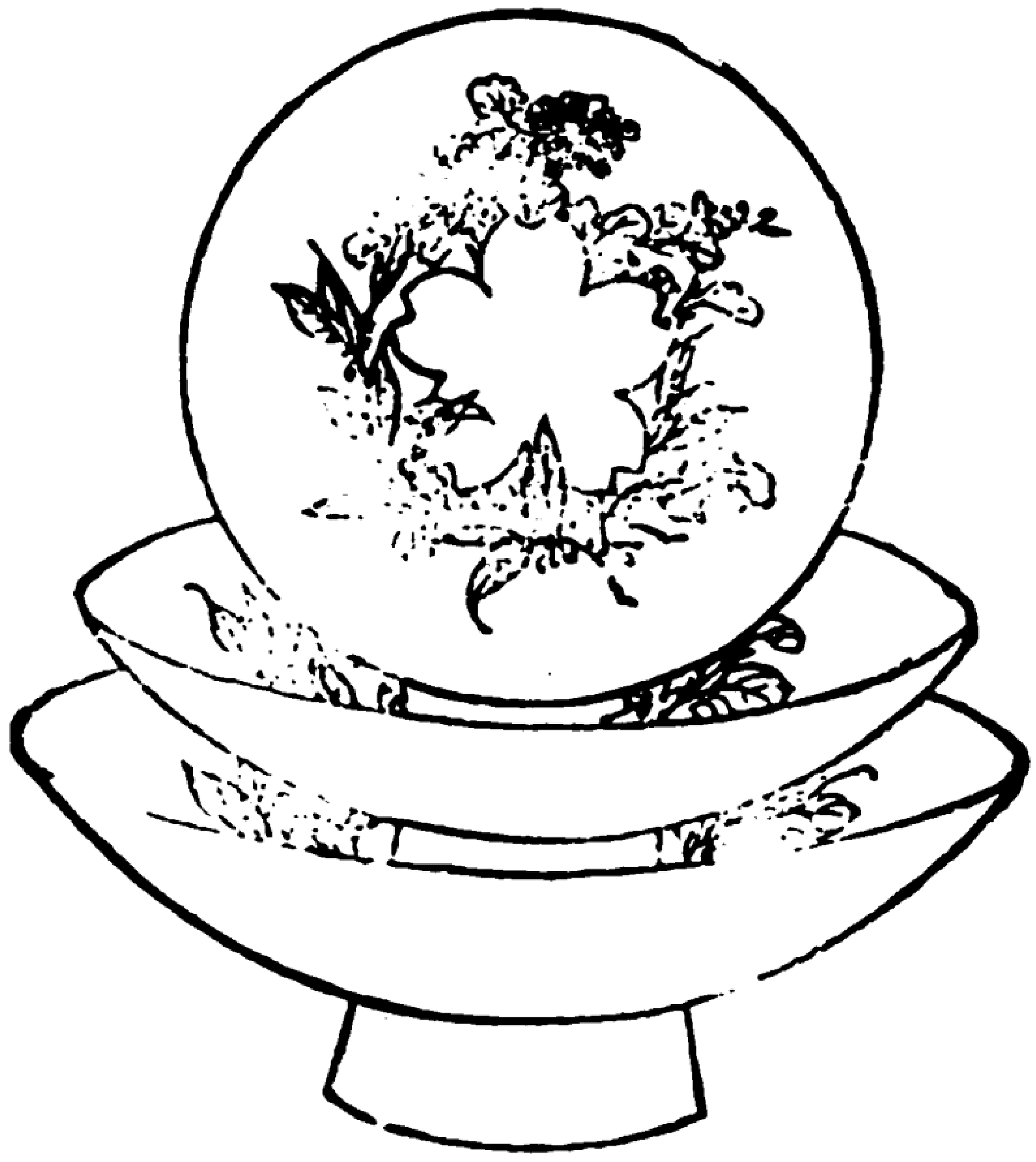
調香ごスミレごばらの香料を含む　色白くきめじまんごなる

登錄商標

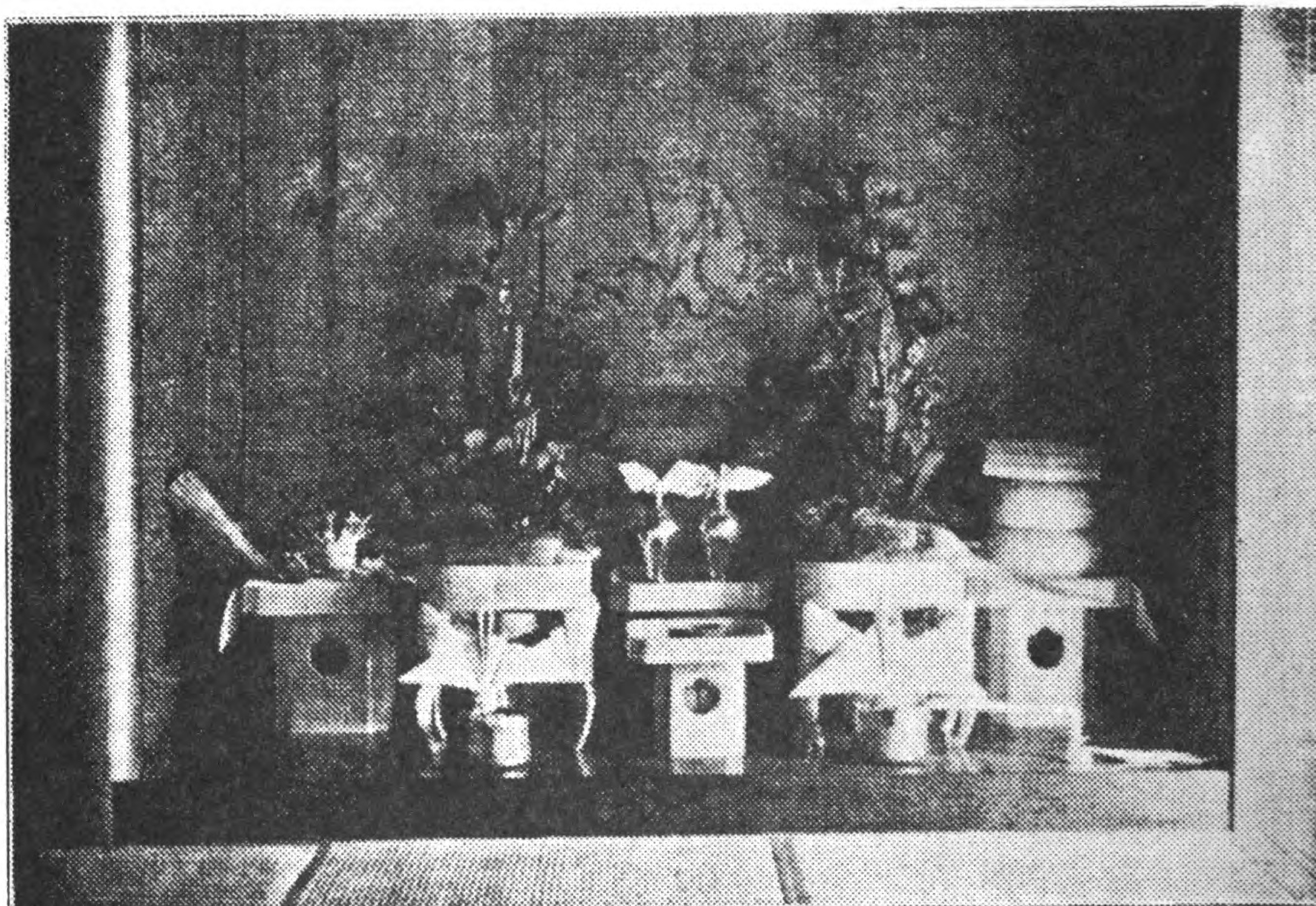
小判石鹸

小一個十二錢　一箱六個入　大一個二十錢　一箱三個入

東京伊勢町藥種問屋平澤重助製　特電本一一三四　東京本町三寶堂發賣



婚禮式の一





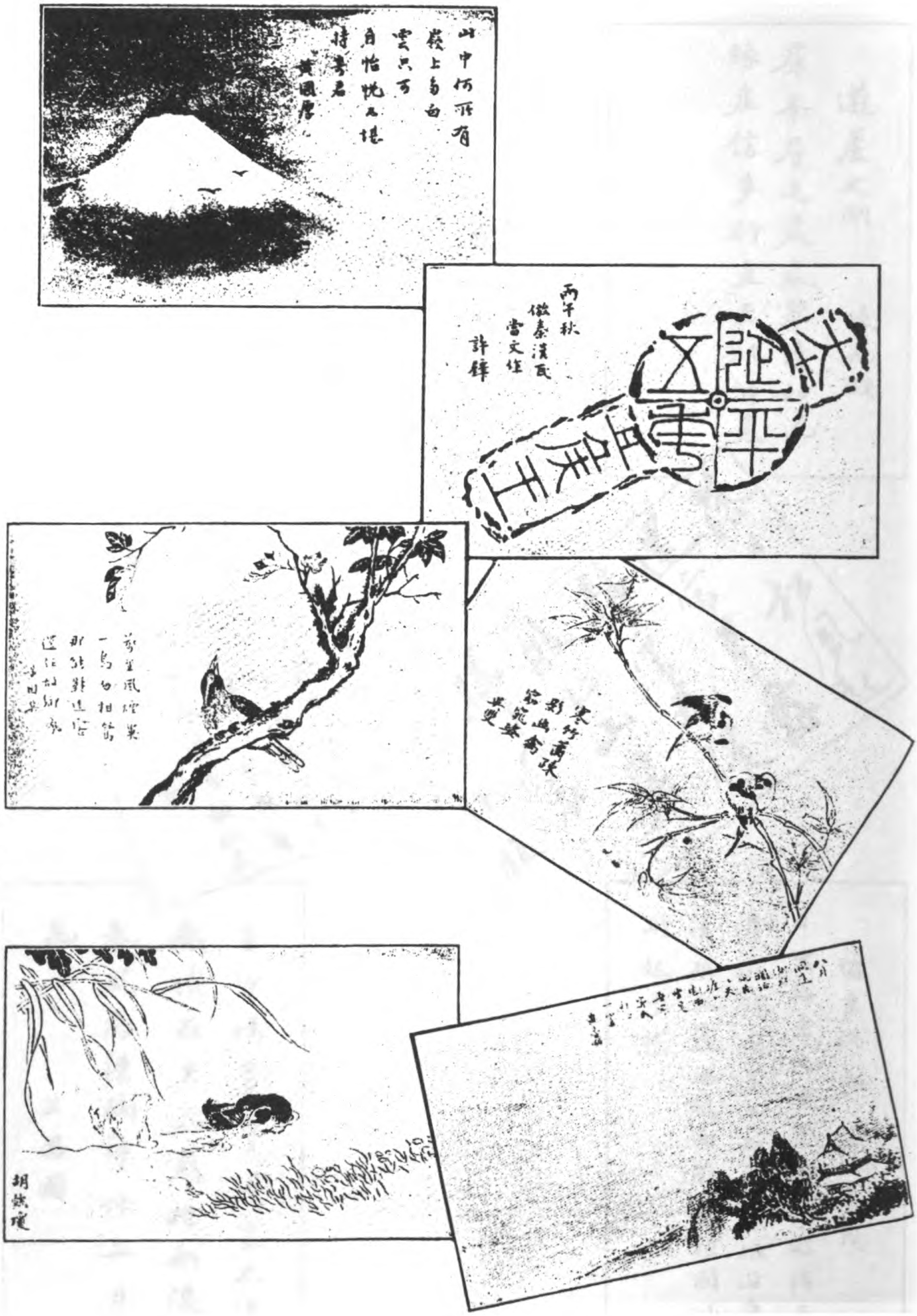
小笠原伯爵家撮影

初秋の田家



子爵S.H氏撮影

繪はがき



實踐女學校卒業清國貴婦人筆蹟

字はがき



實踐女學校卒業清國貴婦人筆蹟

第二回新學期開始

◉**會員大募集** 九月三十日迄の申込に限り入會金全免す、目下入會の好機

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を毎號附錄とします

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です

▲本會講義錄は右に述べし通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都合一ヶ月の遊學費で優に全期を終る事が出來ます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全科程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義は總へて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれは數多き女學雜誌中一領域を拓き得へし

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上揭の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲**規則書**▼

端書にて申込あれば直に郵送すべし

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

富士登山

富士は見るべき山なり、富士は登るべき山にあらず、されど遙かに見てその美觀を賞する以上、登つて壯觀を感ずるものなきにあらず、たま／＼此の高山の靈氣に觸れ、身體を健康にすべく、精神を鍛錬すべく、登山するに差つかへなきなり、而して富士登山熱は今や其の頂上に達し、本年の如きは曾つてなき、幾多の珍登山者をさへ出せり、これ果して喜ぶべきことなるか。堂々たる男子すら、富士登山はなか／＼骨の折れる藝にて、脚下より雲の起れるを見ては、氣先づつかれ、美觀も壯觀もいづれにか失せ、漸く誂へ置きたる日出の景を、わづかに話の材料に見て置く位が關の山也。女子にいたつては遙にそれに辶をかけたるものあり、併しながら此の如きは、初めより富士登山のあまりに無意味なるに起れるにて、此の登山には相當の覺悟を要す、彼の頂上の紀念スタンプを得んが爲に登山する如きは愚の極也

論說

精神修養に就て

三輪田高等女學校校長　三輪田眞佐子

凡そ百の教材も、千の訓言も、歸する所は精神修養の一に止まるものぞかし、果して精神の修養だに全からんか、人はたとひ未だ學びずとせんも、おのれはこれを能く學びたりとこそ言はまほしけれ、古語に、歳寒くして松柏の凋むに後るを知ると、信に大節に臨みて、始めて其の人格の高下を知るに足るべし。即ち義のため、從容として死に就き、貧賤に處して毫も亂れず、富貴に居りて聊も奢らず。其他千種萬別の誘惑に逢はんも、志を變せず、思を改めざるものにあらざれば、決して精神修養の成否を判定するに足らず、故に學校にありて机を並べたる際の外觀は、以て內心の價値を知る標準にあらず、眞に人事棺を掩ひて後定まるものにこそ。

滔々數萬言の教授は、智を穫得する効果なきにあらざれども、無言の間に、行はるゝ以心傳心の德風的感化に及ばざること、頗る遠しと云はざるべからず、今日、學校教育の一大缺點は、教ふるものに、身を以て、これを率ゆる覺悟なく、學ぶものに亦、心教の尊ぶべきを認知することなきにあり、などか精神修養の盛なるを望むべけんや。

思ふに、師として師の道を盡さず、生徒として生徒の目的に達せずば、人生の不幸こよなかるべし、蓋し敎育の物質的進步は、日一日と見るべきあるも訓育の精神的進步に至りては、これに伴ふや否や、戰後に於ける日本國民の注意すべきは、全く玆にあらんか、世に僞善者多く、虛榮者多きは、專ら、形式を重んじて內容を輕んぜし風俗に由ると言はんも不可なからんか、況んや處女として純潔の美なく、婦人として貞操の德なからんか、女子の女子たる魂、全く亡ぶと知るべし、これ精神修養の一日も忽にすべからざる所以にぞある。

敢て問ふ、斯る精神修養の完全なる女子を、如何にして作り得べき。曰く他なし、敎ふる師範に誠の心あり、學ぶ門弟に信ずる念あらば足りぬべし、何を苦みて、精神修養難を說く必要あらん。

抑も師範に誠の心あらば、自ら師範たる責任の大なるを知りて、一言發せんも、これが規を示し、一擧動かんも、これが典を垂れんことを勤むらん、即ち自ら職分を重んじ、時間を守らんか、喋々語らずして正しき生活を營む女子を作り得べし。亦門弟たるもの、師範の言行を信じ之を行に實現せば、期せずして得る所少からざるべし、世の師弟の間を見るに、行路の人も啻ならず、などか以心傳心的感化の妙あらんや。

まことや人生恩愛の最も厚きものは、親子に若くはなし。これを以て師弟の間も、親子の如くにあらまほしけれ。若し眞に師範に誠の心ありて、さながら慈母の赤子に臨むが如く、門弟を訓育せば門人もおのづから、師範を見ること、慈母の如く感ずるに至るべし。從つて師範の訓言は、身を救ふ福音と響くべし由りてこれに心服し、これに歸依すべし。玆に於て始めて、精神修養の端を得らるならん。

學校生活を無我夢中に營むは、生徒の常なり、從ひて、三五年に過ぎ越し方を追想せば、茫然として、如

何の印象をも刻せざるものこそ多かめれ、されど師範にして門弟を思ふ誠の情感あらんか、大は人倫の大綱より、小は日常の心得に至るまで、語々言々、悉く肺肝より出でゝ、門人に深き印象を與ふるは明なり門弟も亦、師範を信ずる念、尋常にあらざれば、毎教授時間中に得らるゝ、眞理の光は异日たどるべき行路の暗を照さんこと疑ふべくもあらず、あはれ精神修養の工夫は、獨り我方寸の中に存す、決して他にな望みそ。

女子教育の心事

麹町女學校監事　小川直子

凡世の人の子を思ふ習ひは、天の下ありとある人、皆同じ心にて、かけまくもかしこけれど、上は尊き御あたりを始め奉り、下はあし火たく屋の煤けたるにすまへる賤が身まで、かはる事なかるべし、されどそが中には、愛する心、程に過ぎて、愛におぼるるあり、これはた中を得る道の難きによりて、過ぎたるは及ばざるが如しといふ理に陷るなめり、あはれ願くは、世の人々よ、老牛犢をなむといふ譏に似たる振舞なし給ひそ、いかにもして、誠の道に導き給へ、おしなべての世を見渡すに、例へば我女をとつがせむとするにも、只ひたすらに今日の安樂をのみ謀りて、貴富の家をえらぶとか、又は舅姑あるをいとひて、否みなどしつゝ、舅姑を恐るゝ事、さながら虎狼の如くに思ふが多きぞかし、これにつけてもおのれ感して聞きし事あり、おのれ素より敷島の道には志す事年久しければ、常に尊びて、したひまゐらするは御歌所の長たる正三位高崎大人なりけり、此大人御女みたりもち給へるに、これをおほしたて給ふ事、至らぬ隈なく、はた此女君達をとつがせ給はむとし給ひける折などにも、願はくば兩親おはする方にゆきさまほし

いかにと云ふに、生めりし親はいかにおごそかにおほしたてむと思ふも、子たる者の心に、我父母は親みの深きより、心ゆるび多くして、守る心のうすきぞかし、されどとつぎて後舅姑がおほしたてらるゝ時などやかなる言もて、なだらかに教へ給ふとも愼しみ深き心にて聞からに、身にしむ事の強ければ、早うよき方に導かるゝ習ひなればとのたまひけるに、其ねぎ事叶ひ給ひて、舅姑おはする方にとつぎ給へり、大人がさる御心なれば女君も舅姑に事へ給ふ事、至り深き眞心もて萬教のまゝに順ひ給へば、舅姑の君も喜びて、萬に教へ給ひけりとぞ、此ほども大人に逢ひ参らせたりし折も、此事のたまひいでゝ、我女どもは不幸にして早く母におくれたれば、萬の藝の何くれとたらはぬ事のみ多くして、家事を治むる道に至りてはさながら知らずともいひつべきさまなりけるを、よき舅姑をもたせたれば、その導きによりて、今は何くれと物なれて、客人のもてなし、あるは召使の男女を遣ふ事迄まづひと渡り出來得る程になりたり、これやがて舅姑の恩による事にしあれば、いとも〳〵嬉しうて逢ひ見るごとに、舅姑の君たちが惠み給へる恩の深さは、わだ海よりも増れり、ゆめ〳〵忘るまじきぞといひ聞かすれば、いと喜ばしげに勵むるものなりとかたり給ひき、おのれこれを聞きて、あはれよき君かな、げに斯くなりいで給ひて、かけまくもかしこけれど、尊き御あたりの御師ともなり給へるは理ぞかしと、深く感じたり、又おのれの友なる安達安子のつま、今はなき人の數に入りけれど、安達幸之助といひて、おのれの古里なる石川あがた金澤のうまれにて、かの國にては名の聞えたる增荒男なりき、はやうより外國ぶりの學に深く志し、國のために心を盡したる事尠からず、其後大村兵部太輔と共に、種々の事を謀りしに、明治二年九月四日京都の木屋町にて大村君と共に、兇刄のもとに斃られたりき、此ひと男子とては只ひとりなれど、娘みたりもたれけるが、常の言ぐさにいひけらく、あはれ我娘共も、幸之助の子なりといひて耻なからんばかゝ

におほしたてん、さるからに、とつがしめむにも、祖父母あり、兩親ありて、兄弟は尠くも十人餘りもある人にて、何にまれ一藝に秀でたる人にゆるさまほしきものなり、斯く數多の人ある家にゆきて、我女愼みよく女の道を守り、萬に行渡りて明暮笑みを含みつゝ、家の中常に睦じくて、和らぎ、はた其家に出入る者共にも、あはれみをかけ、惠みをほどこし、婦たる道聊か違ふことなく、一家をよく治めなば、我子といふとも耻なかるべしと、おのれ此事を常に心にしめて、姪共にもかたり聞かするなり、そも〳〵舅姑を嫌ふ事、蛇蝎のごとく思ふ人世に多きは、如何なる心ぞや、およそ人の世にうまるゝや父母なくてはいかにして生れいでむ、林の木の枝より出たるにもあらじ、草むらよりわきいでたるにもあらじ、若しも我たらちねをよそ人の嫌ふ事、蛇蝎のごとくあしらいなば、いかなる心ちかせん、我たらちねは千代に八千代を重ねつゝ、數多のはらから皆睦まじく、あるひは娶り、あるひはとつぎて兒子なども數多生れいで、年々に賑ひゆきつゝ、榮行末を我たらちねの見給ひて、樂しみ給はむ事を、朝なゆふなに祈るにあらずや、されば世の人、我娘のとつぎたる家も、うからやから廣くて賑はしう睦びあひ、世に榮ゆるを、諸共に樂しまむにも、うからの多ければ多きにそへて、樂しみも亦深からん、さるからに、世の人皆も願はくは、舅姑に親しみ睦まじく、世を樂しみて、暮し給はん事をねぎ渡るなり、今世の中、親子勤めを異にするが多くて譬へば父は鳥が鳴く東の都にかしこき御あたり近う仕へ奉り、子は遠く隔たれるひなの長路あるは、奥山の鑛山を見出て、さる方にかゝつらひて、心を盡しなどすれば、おのづから家居も馴れて住むが多けれど、これはた君の御ため、國の爲にして、睦まじき中を斯くするわざにしあれば心の中には、露ばかりもへだてなく鴈の音信ことゝふわざも、ねもごろに其の所に隨ひて、產物何くれと山にまれ海にまれ、いで來む物の珍らしきを、かたみに、贈り贈られて、喜び樂しみつゝ、月日を送りなばいかに

樂しからざらむや、かへすぐも舅姑に事へて、睦まじく勤め給へとくりかへすになん

家庭教育に就て

文學士　山本誠也

往昔は潜みに潜みし家庭の兩字、今は全盛を極むるの時代となり、良家庭を作らんとするの、及良家庭に息はんと欲するもの丶情、各切にして、皆言を盡し、説を擧て論究し、殆ど餘す所なきに達したり、最早家庭の事に對しては、之を説くも陳腐を繰返すに過ぎざるもの丶如くなれども、世が良家庭を要求する情の切なるに比して、眞に良家庭が世に作り出さる丶事の極めて多からざること、何人も遺憾と爲すところなり。

縱令其説くところ、既に陳腐に屬すると雖も、世が家庭に滿足するに至る迄は、これが陳腐を繰り返すの已むなきを奈何せん。

世は漸次多端に渡り、風師雨伯波浪の高きに從うて、愈よ平安の家庭を望むに至るは、論を要せざる事なれば、如何なる家庭が作り出さる丶も、遂に滿足するの日なかるべきか、然りこれ益す以て良家庭を作らんと欲するもの丶、工夫を凝らすべき點なれば、各其所説を陳る、亦無益の業にあらずと信ずるなり、良家庭を作らん事に汲々たるの間は、未だ眞の良家庭を得たりと謂ふべからず、是れ他なし、尚其自然を失すればなり、然れども、我儘の流れに任せて、毫も意を用ひざるの家庭に比しては、其勝る萬々知るべきなり、良家庭を作るに汲々たる間は、未だ眞の良家庭といふべからずとはいへ、初は之を作るに意を凝らさざるを得ざるなり意を凝らす事幾番の後遂に知らず識らず自然の郷に達す、自然の郷に達しては愁に居て

愁を忘れ、貧に坐して貧を覺えず、菜蔬膳に上りて、八珍の美を羨まず、破窓月を貯へて水昌宮を夢みず樹間の鳥は時々微妙の樂を奏し、地上の花は絶えず、嬋妍たる春を描く、夏夕涼風に臥して舊を談じ、冬夜爐を圍みて新を話す、この快や實に盡るなし、この無盡藏の快樂を作り出すの製造元は、果して何人に歸するかは言はずとも知るべきなり、これによりてこれを思へば、一家妻君たるの器は珠玉を以て充すの寶庫に異なるなけん、何れの時たりとも、この寶庫を開て、人世の樂事を果斷するを得る既にこの寶庫あり、亦何ぞ世の貧賤と憂苦とを知らん、

嗚呼、以て寶庫に比すべき妻君が、平素の苦辛と終世の覺悟とは、實に察すべきなり、又謝すべきなり、近頃余一良妻君の言を聽くに曰く、吾が統轄するの家族は、我儘者の寄合たるを知らざるべからず、而て己れ一人この都ての我儘を、彼等が言ひ値通りに買はざるべからず、之を買ふに無限の忍耐を交易品として彼等に與へざるべからず、玆に己が働きより、湧き來る目出度き事わりとせんか、直におのが働き手たりしを忘却してこれ一家の働きより成立ちしものと爲し、成るべく長く保存し、家人團欒無聊の折は、其當時の談を持出し、往時の歡びを喚起して、將來の勇を養成する等は、侮るべからざるの妙案たり、故に失策話の繰返は、將來の參考の一として効能ある如くなれど、其實何等の効なきのみならず、一座の景況頓かに陰雲日光を掩うて、暗澹風氣寒きの感を呈するを顧みざるべからず、夫婿が第二の失策を爲さんとするに際し、これをせきとめんとするに、直接其事の非なるを擧ぐる如きは。大の禁物たるを知らざるべからず、寧ろ鋒を轉じ、曾て夫婿が得策として、其快腦裡に忘れざるものより說き起し、途を迂廻して稍其焼點に達せんとするの處にて語を止むべし、而して幸に夫婿其非を悟らんとする場合に至れば、最早己が用事結了せしものと悟るべし、其勢に乘じて、念を推し、そうでせう矢張私

がいふ方がいゝでせう杯の愚を學ぶ勿れこの愚を學ぶ時は再びもり返しの恐れなき能はざるものと知れ、夫婿處世の才乏しく、兎角家政緩かなる能はざるも、決して其短所を指斥し、他の多く財を得る者を羨む如き擧あるべからず、この擧ある時は、益貧困に陷るの兆たるを知れ、寧ろ貧富榮辱は世運の然らしむる所、孜々として放棄するなくば必ず好運に際會すべきを說て、慰藉するに如かざるを悟れ、夫婿內を顧みずして、外に遊ぶの癖あるは、此ぞ己れに缺くる所にして、夫婿をして內を樂しましむるに足らざる己が罪たるを省みざるべからず、おのが足らざるを省みずして、只管夫婿が浮游を鳴らすは、益々外遊の惡癖を增長する具と爲るに過ぎず、寧ろ一面には夫が外遊するは無理ならぬ次第なりとの同情を表するなるかの如くなし、一面には徐々に家外の塵俗は、家內の淸雅たるに如かざるを悟らしむるを勉むべきなり、玆に注意周到ならば、外遊の迷夢を打破するを得べき必定なりとす、而も其性よく〳〵不善にして、終に其効なきを知るときは、頓悟一番、餘り執着拘泥するなく、只家務を敏捷に處理し閑あれば書を讀み花を養ひ、或は茶を點じ琴を彈じ、其他何にあれ家居して得らるゝ樂專に、神氣を慰藉する、亦一德ならずや、一日爲す事もなく、只憂鬱其意の如くならざるを嘆ちて、面白からぬ日を送るは無策の極たるを知れ、世の家庭を說くもの只單に妻君に向て、圓滿高潔の愛を求るものゝ如し、固より愛なくては家庭一日も家庭たるを得ざるなり、然れども、愛なるものゝ內、別に機を知るの明なかるべからず、只愛ありて明なきものは、桃花のベタ〲と赤く、春風をしてどことなく賑かならしむるに過ぎず、愛あり明あるものは梅花の淸韻に富み風霜の中、人をして襟を正して仰ぎ賞せしむるの觀あり、

其愛の迸る所、明の發する所、都て之が根據なかるべからず、初は其根據に基きて、養成し終に根據を忘るべきなり、是忘るゝにあらず、根據なるもの既に吾有となりて、最早之を求むるの用なきに至るなり、

其根據たるもの那邊にありて存す、各其擇ぶところに任すも、兎も角宗教的たらざるべからず、宗教空氣に養成せられし女生徒が、俄かに宗教空氣なき家の妻君と爲るや、家族中の觀念作爲、悉くおのれと相反するを見ては、一日も早く其觀念を飜がへし、作爲を改めさせざるべからず、これを飜がへし改めさすは、おのが天職なりと信じ、他事を棄しおき、此邊にのみ着目せざるべからずと思惟する其情緒は實に愛すべきものと雖も、短兵急に其効名を奏せんと欲して、却てます／＼遠かるを顧みざるもの往々これあり、これ機を知るの明に乏しき類なるなからんや、

家人は其妻君が、宗教熱心家なるや如何を知るによしなく、只相和する中、尋常人の及ばざる點現はれ、折々其香りにうたれ、此君なくては夜に燈火を缺くの思をなし來り、吾は愛する如き形容を學ばざるも、彼等は既に其無限の愛に滿足し、吾は吾が說を陳べざるも、彼等は既に不言の說に納得し、吾は手を袖にして傍觀するも、彼等が避くる所は惡にして、行ふ所は善、是に至りて申分なき家庭は作られたるなり、然るを彼等以て學者と思はざるを、强て自ら學者がり、彼等以て智者と感ぜざるを、强て自ら智者ぶり彼等甚だ宗教臭きを忌み嫌ふの鼻尖に、其息きをすりつけ、家人が落語抔して興がる邊りに、顏を顰して宗教語を挿み、お爺さんお婆さんが大の死の字嫌ひに向て、死は此上もなき目出度き事なり抔の悟り顏なし、甚しきに至りては、丸で惡魔の寄合なりとか、其樣な罪を犯してはとか、貴方の樣に威張りたとて矢張僕には違ひないのですから抔、耳障りの語を謹まずして、却て己が說の容られぬ墻壁を作るの愚に陷る勿れ、右に陳る類が、家庭を作る土臺と爲るべき大略にして、これよりは更に少なからぬ小材木なくては、建築出來揚らざるなり、これらの小材木を用ゆるにも、一々其法に適はねばならぬなり、

この妻君の說果して是なるや否を知らずと雖も、只聽きし中の一二を記するのみ、

婚禮創定論

婦人問題の研究は、近時尤も世人意を致すの殷んなるを見る、而して一方には女子判任官の新制を創して、女子獨居主義を鼓吹せん傾向あり、吾人は已むを得ざる境遇事情の外は、女子の獨居を否定せり、竊に思ふに孤棲獨居は人倫に反す、而して其群居交際は室家に始まり、室家は夫妻に成る、故に妻を娶りて始めて家を成すとは云ふなり、西洋にてホームと稱するも、支那にて宜于室家と歌へるも、我が邦上代に於て、素盞嗚尊が出雲八重垣妻籠に殿作りたまひしも、皆此の義にして天理人道の自然なり、一家は一國の基なる以上、國家の發達を期せんとせば、苟も女子の獨居主義を煽す可からず、而して天理の自然人倫の根本たる婚嫁は、國家の發達に關するや大なるを知るべきのみ、而も世の開けゆくに隨ひて奢侈の風盛に、奢侈の風盛にして生活難と爲り、生活難はやがて婚嫁難と爲りて、男女兩性の道德上法律上の罪惡は增長せんとす、是れ女子天分の高き者は獨居主義に傾く所以にして、其の卑き者は社會の暗流に弄ばれつゝ薄倖の嘆あり、嫁衣を作らんが爲に賤業に沈淪する者數ふ可からず、而して野合私生兒等に原因する犯罪も亦隨つて多く、甚だしきは結婚の爲に刑に觸るゝ者あり、彼の浦和の稅務吏が婚結費を辨ぜんとして官金を盜用せしが如きは其の一例に非ずや此等の男女婚嫁難より生ずる弊害を矯正せんとするには敎化の力に待たざる可からざるは勿論なりと雖も、禮は奢らんより寧ろ儉なれとの本義に基き、婚嫁の禮法を創定して、貴賤を通じて行ひ易からしめんことを謀らんに若かず。

禮は時に隨ひて宜しきを制せざる可からず低頭土下座の宜しき時あり、擧手立禮に非ざれば宜しからざる時あり、我が國文明の發達今日の如きに當りては、婚禮も亦必ずしも小笠原禮式に拘泥せずして、時勢民度に相應すべき適當の法を創定するも亦時宜に中れる者たり而して之を我邦の古法と世界の通例とに參酌せば、當其の式を神聖にして其の禮を簡易にし、貴賤を通じて行ひ易からしむる者なからんや、彼の神前に誓約するが如き是れなり、誓約は我が古代の遺法にして、之を宇氣比と云ひ、其婚禮にも之を用ひたるは、邇邇藝能尊の木花開耶姫を納れたまひし時、姫の父大山津見神の言にも見えたる以て證すべく、其後爭訟を斷ずるにも、其の僞らざるを證するに用ひたる、今の法廷の宣誓の如く、降りては武家の誓文と爲り、起請文と爲りたり、今世基督敎徒の婚禮は、夫妻の同意を敎會に誓ふが如き、亦我古代の誓約に似たり、參酌して、其の中を折し、媒介者をして產土神の前に、もしくは家廟の前に、夫妻を誓約せしむる丈の儀式を創定し、嫁衣の如き、華奢を戒めんには、其の禮式の神聖を保つと共に、其の設備の浮費を省くを得ん、其の方法禮式の如きは、猶講究を要すべし、今は只其の端を發して講究の資に供せんとするのみ(大朝)



家庭所感

子爵 秋元興朝

社會は家庭から成立つて居る、家庭が改善さるれば社會はよくなる譯である、その家庭を改善するといふことは、誰も口にすることで、さてうまい効果は擧らぬのである、

日本には武士道といふものがある、これは日本の專有といふ譯ではないが、君に忠、親に孝、或は廉恥心を重んずるといふ事に於て、日本で最も貴いものとなつて居る、教として儒佛耶の三大教、それよりよいものはなく、武士道も其範圍に過ぎないのである、併し難しい理屈を除いて、いろはにほへと流に簡單に皷吹したものであるから、維新前には武士が中心になつて、武士でないものも其感化を受け、賢愚と階級の區別がなく、武士道が盛んに發揮されたものである、その武士道は家庭に於て、自然に行はれたからである、

日本の昔の武士と、今日の西洋のゼントルマンとは或場合は違ふけれども、決してそれに劣らぬものがある、而して西洋のとは違ひて、日本のは容易い方法によつて得られ、比較上多數の人によつて實行せられたのが、今日に至るも、習慣として來つたのは日本の大に仕合せとする所である、

昔の武士は永世祿を賜つて居たから、奢侈を愼めば衣食住には有付いて、淸貧に安んずることが出來て廉潔といふことも行はれたが、裸體になつて、米一合もないと云ふ日には、食はねど高楊枝といふ譯には行かぬから、淸貧から淸富に一躍せねばならぬ、それには家庭が氣を揃へて面白く働くといふことが先に立たねばならぬ、

昔は奢侈を恐れて、その奢侈の基となる金錢を賤んで、人の行爲としては、甚美しいものがあつたが、今日ではそれでも渡れぬ、故に極端な拜金も困るが極端な武士道も考へ物である、それで家庭に於ける憲法を定めねばならぬ、先づ男女の地位から解決して行かねばならぬ

近頃男女同權など、やかましく云ふ人があるが、成る程男も女も人である以上は、神の目から見れば同じであらう、それは老幼も變つたことはないのであるが、實際そんな事が圓滿に行はれるであらうか、

女學生の一日 （其の一） 盥嗽



日本は藤原時代、徳川時代を除いて他は軍ばかりをして居つたのであるから、男の方の勢力が自然に熾んになつて、女は之に對して臣の君に對する如きものとなり女は政治の上に嘴を入れることは出來ぬもの、男は女に職業上の話さへせぬといふ風になつた、而もそれが德義的に、女子は一等下つたものとして、家庭に圓滿に行はれたものである、決して喧嘩面で女を蔑視したものではない、保護の地位に立つたものである、然

るに今の男女同權說は都合のよい所にのみ同權を望んで、電車に席を讓らるゝことを初め、都合のよい所には平氣に保護を受けて居るのである、同權は男女の各々其職に當つて、一家の主人、一家の主婦としてゝあつて、所謂米國式のは喜ばしくないのである、さればとて男が女に向つて君臨する如き態度をとれと云ふのではない、要するに、昔の武士道が上下の階級を通じて、容易く行はれた如く、あまりむつかしからぬ、家憲をつくつて、簡易に行はれることにしたいものである、餘り男女の問題がむつかしくなると、舅姑に對すること、繼母子に對する事など、到底うまく行くものではなく、忽ち一家の破滅を見るといふ如きにも立至るのであるから、從來の武士道に伴はれた女道の美を、時世に適合する所まで進め、それによつて皮想的ならざる眞の家庭の圓滿を謀り、現時の惡社會を一掃せんことを望むのである。

蒸麵麭の發明婦人

近時都鄙の別なく各家庭に、試みらるゝ手輕食麵麭の製造は、著しき流行を極め、隨て米飯を廢し、此の蒸麵麭に換ふる者多く、衞生と經濟を兼ねて至極結構の事なるが、抑も此の蒸パンの製法を案出して弘く世上に紹介せし人は、小石川區白山御殿町百二十七番地早稻田大學講師法學士上野貞正氏(三十)夫人滿子(三十)にて、去三十一年同人の大學卒業當時初めて郷里越後國高田町を出で、前記の場所に新らしき家庭を造りたるが、夫人は素と進取活潑の氣象に富み、家庭の經營には殊の外心を勞し居りしに、母堂銀子(六十)は胃病に惱み令妹照子(二十)富子(二十)の兩人は、夏每に脚氣を患ひ剩へ令嬢靜代子(八ツ)は屢々腸を痛め、夫人の心使ひ一方ならざりしが、畢竟食物衞生に注意するに如かずと、普通食麵麭を製し、斷然米飯を廢したるも、經濟の點面白からざりしかば、種々苦心の末パンの製法を案出し、且つ饂飩粉にパン種を加へ、蒸して恰好なる食料麵麭を製造する簡便法を發明し得たれば、獨り打喜びつゝ實行せしに、從來の米飯に勝して、經濟に且つは母堂を始め令妹令嬢の持病に知らぬ間に治癒し、今日に至るまで五年間曾て再發せず、衞生上殊効あるものと信じ、さては過般夫人自ら執筆して、其經驗より製法を詳らかにし、一本を著作して世人に示されたるに、意外にも世上の歡迎を受け、遂に今日の如き最大流行と爲りたりと

米國大統領の家庭論

眞理は圓い、文明の今日、古人の眞似でもあるまい、とおつに氣取つた畸形な議論の流行するのに、米國大統領ルーズヴェルト氏は圓い物は圓いと飽まで主張して居る、此處が氏の豪い所である、

昨年、氏の女子教育論を發表するや、氏は故意に斯る意見を主張するのではあるまいかと疑ふものがあつた、蓋し氏のモットーは家庭に還れと云ふのである、氏は敢へて女子の社會的活動を否認するのではないが、然し古人の言つた通り、婦人は家庭の女王、家庭は婦人の王國であると云ふ所から、婦人第一の務めは家庭を善く治めて行くにあると主張するので、氏は此度新たに發行になつたグード、ハウスキーピングと云ふ雜誌にも同趣意の意見を發表して居る、如何にして家庭を治むべき、家庭を治むるは婦人第一の義務である、此の義務たるや、商工業より遙に重要で、職業としては他の何づれの職業よりも高尚であると云ふのが根本の意見である、此の分かり切つた理屈に力を入れるのは、滔々たる婦人界の亡者を引導して王國に還らせやうと云ふ慈善の趣意と思はれる、

さて王國に在つて婦人は何を爲すべきやと云ふに、第一は子女の教育である、然し子女の教育に先つて家庭を健全にする義務がある、家庭を健全にして置いて子女の教育に取りかゝるが順序である、此の順序を違へてはならぬ、子女の教育、其の第一義は身心兩つながら健全ならしむるにある、其の一を欠くと片輪になる、家庭に於ける子女の教育に就いては別して此に注意しなければならぬ、氏は又子女の品性を陶冶する上に十分の注意を拂ふやうにと家庭の女王に警告して居る、

此の如く婦人の責任は實に重大である、夜の目も寢ずに小供の世話をする其勞苦に、男子たるものは大に同情するが至當である、例令自分で手を下さぬ迄も、均しく我が家の事であるから精神的にでも援けるのは蓋し協同者たる男子の義務であらう即ち氏は子女の教育を以て婦人第一の義務であると云ふと同時に、男子亦た責任あり、責任あるが故に發育係に同情すべしと云ふので此の點は多くの解説を要せない、其の同情たるや、溫かなるべく、溫かならざるべからざるは無論である、

其れから氏は人爲的の人口制限を攻擊し、人爲的に人口を制限するのは人種上の自殺であるとまで云ふて居る、生活の困難其他種々の事情から、成るべく子を產まぬやうにと苦心して居る其弊風の、恐るべき結果を生ずるに至らんことを憂ふるに出でたものと思はれる、

要するに氏の云ふ所は大體論である、大體論であるが、平明直截、何人も行ひ得べく、行ふて益のある議論である、其の新奇ならざる所、即ち値のある所である、圓い物を圓いと主張するのは氏の如き勇氣ある政治家でなければ出來ぬ仕事である、

家庭思想

文學士　三輪田元道

人生は夢なりや、あらず、空なるや、否なり、而るに古來人生を夢と觀じ、空とかこちたるは、不健なる思想の結果なり、必ず國民として、家族として、斯る思想を懷くべきにあらず、若し斯る思想に同化せられて厭世家となり、不平家となり、將た、狂的となり、病的とならば、自ら人生の不幸を醸すものと言はざるべからず、

抑も人生は實在なり、從ひて身は胡蝶にあらず、蜉蝣にあらず、孜々汲々として、我が心意を勞し筋骨を役して、天地間に存在する、職分を盡すべきなりされど人生の經過中、困難と苦痛なきにあらざるも能くこれに打勝ち、禍を轉じて福となす勇氣あるを要す、若しこの勇氣なからんか、忽ち人生の陣中に於ける降服者、或は脱走者の恥辱を受けざるべからず、既に此の見識態度あらんか、局面一轉富貴の日を送り、花鳥風月の快樂を受くるは、幾層の幸福なるを覺ゆべし、故に幸福を得んとするものは、反りて幸福に逢はず、困苦に堪へんとするものは、反りて幸福の來るものなり、

若年女子の理想を問へば、異口同音に、答ふらん、吾等は幸福なる家庭を作らんことこそと、されど幸福は物質のみにて、作らるべきにあらず、即ち大閣高樓に住みて、食前方丈の奢を極むるもの、必ずしも幸福か、否々、其の限の家庭も、心の底に、斷腸の苦痛を感ずるものなきにあらず、其他社會に於ける、位置高き家庭、交際場裏の花園と呼ばるゝ家庭なりとて、強ち幸福にあらず往々容易に窺ひ知るべからざる、深窓に風波の絶えざるものなきにあらず反之野邊をたどる、牛の鳴く聲を耳にする外、聞くものもなく、黄昏時に山の端に登る月影の外、目に觀るものなき田園の生活なればとて、主婦たるものに、高尚なる趣味と、掬すべき道德心あらんか幸福なる家庭は作らるべし、故に女子は如何なる種類の

生活を營むも知るべからざるを以て、豫め幸福を生むものは、女子の心の外になきを悟るべし、決して物質の多寡や、職業の如何に由りて、家庭の幸福と否とを卜知すべからず、

家庭を組織する、第一要素は愛なり、思ふに愛の純乎たるものは、我が愛するものゝために、殆ど一身の存立を忘れて、犠牲となるも、厭はざる覺悟なかるべからず、決して利己的のために、要求する心、露ばかりだにあらば、何んぞ圓滿なる家庭を作り得ん、西洋の譚に、一婦人將に婚約成らんとするとき、曰くわれは良人と生を共にするのみならず、死をも共にせんと、既に、婚式を擧ぐるや否や、良人に向ひ、保險を附せよと、蓋し良人の死後、生きながらへんの準備なりけらし、勿論、文字通り、死を共にせんことは、全然不可能なるも、人は言葉の誓よりも、心の定めを尊ばざるべからず、兎も角幸福なる家庭を作らんとならば、相互に一家の平和と快樂を得しめんため、自我の私欲を忘れて、辛酸を嘗めざるべからず、而して、辛酸を甞むる悟覺だにあらば、天道は必ずこれに與みすべし、

特に、日本の國風より論ぜんか、家庭の本體は、個人主義にあらずして、家族主義なり、故に由來一家の始めは一男一女の關係より成るべしと雖も、普通の一家には、老父母あり、昆弟姉妹あり、各これに對する女子の道を盡さゞるべからず、即ち父母には孝養あり、兄弟には友情なかるべからず、これ歐米女子の夢想だにせざる道ならん、而るに歐米の國俗を見し目より、これを察せば、日本の婦人は苦痛に堪へざる如く思はれんも、一面より考ふれば、日本婦人の柔順と歌はれ、勤勉と譽めらるゝ所以のものは、全くこの一點に存す、されば、日本婦人たるもの、益々憂きことのなほこの上につもれかしと、獨りでちつゝ勇氣を振ひ、千難萬苦を排し、遂に平和と幸福とを自ら作らざるべからず、單に空想を懐きて、國情に戻り波瀾の絶えざる家庭を作る如き愚を學ぶべからず、凡そ最も賢なる如く見ゆるものは

往々最も愚なることあり、思一思せざるべからず、學校にて學び得たる智識は、種々ありといへども、其の目的は、先づ女子たる人格の養成と、次は家庭の實務に應用せんためなり、而るに、學校生活は、單純にして、社會と接觸すること間接なれば、勢ひ實際の社會に出で、若しくは家庭を作らんか、其の熟達までに、多少の時を要す、これ學校教育の一大恨事なり、故に生徒なるものは、學校にて學びたる智識を、日々活用せんことを勤むべし、更に卒業生に於ては、卒業なる虚飾の名に醉はず、心中自ら不足なるものと、謙退して能く經驗者の聲を聞き、亦滿目の森羅萬象より、天然の法則を發見して、一切の智識を家庭のために、應用せざるべからず、

蓋し、女子が社會の表面に活動するは、家庭を整理せし、餘力を以てすべきなり、若し女子より家庭を奪はんか殆ど女子の功德を實現すべき、天地は消失すべし、これを以て、女子の家庭思想は、必要にして缺くべからざるものなり、唯空想を懷き、我が力を測らず、不分の榮達を願ふものは、最も哀むべきものなり、近來女子にも煩悶するもの、不平の聲を發するもの多からんとす、而して其の結果は、人生を夢とか、空とかと誤りて、識者の笑を招くに止まるのみ、されど人生は實在なれば、我が心を安んずるものは、一に我が心のみ、我身を幸福ならしむるものは專ら我が手足のみ、他を恨む勿れ他を待つ勿れ、亦不平の聲を發する勿れ、獨り默して、心身を勞し、以て我が家庭をば、この世ながらの淨土と化すべし、嗚呼、我を助くるものは我ならずや。

○髮結泣かせ　今髷をくけ掛けて居るから、今嬰兒が騒かけて居るから、お琴のお復習中だから、旦那が出かけの際だから、日傘だから、甚だしいのは讀みかけた小說本が面白い所だから抔と、種々樣々の理由?で、待たしたり、または後にして呉れ、明日來て呉れと、自分一家の都合のみで、今日は何軒と定めある髮結を泣かせる人がある、其くせ斯ういふ人に限つて、すらせば立腹すること人一倍甚だしい、よろしくないことである。



風俗と國民及び人種

理學博士　坪井正五郎

通常の言葉で言へば、違つた國々の人の風俗と云つた方が分り易いのでありませうが廣い世界中の人間を見渡して、廣く風俗のことを調べると云ふ時分には、人種と云ふ言葉を使ふ方が適當であるのであります、國民と人種と必しも同一でないと云ふ事に付いて一つの例を言つて見ますると、日本の南西の方に當つて、印度に行く道に非律賓と云ふ處が在る、元は非律賓の土人が住んで居つて、それが或時西班牙の征伏する處となつて西班牙に屬した、それからまた其後亞米利加に屬することゝなつた、斯の如く元は獨立であつたものが、或時は西班牙に屬し、又或時は亞米利加に屬して、今は其儘繼續して居るのでありますが、其變毎に土地の人が非律賓語を止めて西班牙語を話し、又西班牙語を止めて亞米利加語を話す樣になつたかと云ふと、さうは行かない、風俗に於ても同じことで、西班牙に屬したと言つて、俄に西班牙の風俗になると云ふことも無い、又亞米利加に屬したと言つて、俄かに着物を着換へて亞米利加の風俗になると云ふことも無い、其の通り政治上の都合で、アッチに屬し、コッチに屬すと云ふことがあつても、其度に人種の性質又風俗が變ると云ふことは決して無い、斯樣な譯でありますから、風俗習慣のことを言ふ時分には、政治上の國と云ふことを姑く措いて、人種に就て言ふと云ふのが最も適當であると考へるのであります、

そこで唯だ人種と言つた所で、どう云ふものを土臺として、人種と云ふのであるか、それを知らなければ、何せ國民と云ふものと違ふかと云ふことが、充

分に理解出來なからうと思ひます、此人種の性質と云ふものには二つある、一つは生れ付きの性質、一つは習はしの性質、此二つがあるのであります、六ケ敷い言葉で言ひますると、生まれ付きの性質を先天と謂ふ、生れてから後に有つて居る所の習はしを後天的と謂ふ、同じ人種の性質と云ふ中に此二つの別がある、先づ先天的の性質と云ふ方から御話しますと、生れ付きと云ふのは、身體の生れ付きと、心の生まれ付きとありますが、重に人種の上で謂ふ、生れ付きは重に身體に就て謂ふ、心の方は或場合には改めることが出來る、是迄亂暴の人が穏順しくなることもあり、又極穏順しかつた人が亂暴くなると云ふこともあります、それから開けなかつた人間が段々に學問をして開けると云ふこともあります、心の性質の方は幾らか變り易いが、身體の上に至つては決して變らぬとは言はれぬけれども、容易には變らない、それ故に先天性即ち生れ付きの方でも、身體に關した方が、人種の事を言ふには最も肝要なことである、

それで先づ、身體の全體の事から言つて見ますと、先づ第一に大きさでありますが、身體の大きさと云ふものは、處に依て色々違ふ、我日本人の如きは、男の成長したものを平均して見ますると五尺二三寸位である、地方に依て細かく分かつて見ると、どの地方の人が大きい、或はどの地方の人が小さいと云ふことがありますが、全體から言ふと五尺二三寸である、日本でも壹岐對馬、あの邊の人が大きい、それで皆さんが歐羅巴人を御覧になると、大層大きいと云ふやうな感じを持たれるに違ひない、これまで私共の遇つた人でも、此方で下を向いて話をすると云ふ人は一二人しか無い、多くは此方から上を向いて話をすると云ふ人ばかりである、即ち歐羅巴人は吾々から見ると大きく見える、それであるから公平に判斷して見ると、歐羅巴人は大きい人間である、日本人はそれに比べれば小いと言はなければならぬそれで多くの人の中には日本人は、世界中で極く小

さいものである、或はどうも年々小さくなッて行くやうである、と言ッて心配をする人もありますが、是は成程歐羅巴人と日本人だけとを較べれば、さう云ふ考が起るか知らんが、廣く世界を見ますると云ふと決して此考と云ふものが、正しくないと云ふことが分るのであります、又一體大きいのが宜いのであるか、小さいのが宜いのであるか其邊も分らない、直に歐羅巴人と日本人と較べて、どうも大きい方が宜いやうだ、脊の高い方が宜いやうだ、と云ふことを、言ふ人があつてもそれは或は見た所が立派だと云ふことはありませうけれども、それが果して宜いものであるか、果して

女學生の一日



掃除（其の二）

羨むべきものであるか、或は又それ程で無い、身體の大きい小さいは別として、健全でありさへすれは宜い、斯う云ふやうな考も立つのでありますそこで世界中を見渡して最も大きい人間と云ふものはどの位あるかと云ふと男の脊の伸びた、即ち大人になつた者を測つて見て、平均して、曲尺で五尺九寸と云ふのがある即ち中には六尺以上の者もあれば六尺以下の者もある、それで平均した所が五尺九寸である、日本のやうな家であると、何處を通るのにも鴨居を潜つて歩かなければならぬ、六尺以上もあつたならば、

直立して鴨居の下を通ることは出來ねのであります、そこで斯の如き大きい人は何處に居るか、歐羅巴人の中にでもあるかと云ふと、決してさうではありませぬ、南亞米利加の南の端に居るのであります、南亞米利加のパタゴニヤと云ふ所の人が世界中で一番脊の高いのである、最も脊の低い人は何處に居るかと云ふと、亞非利加の中心に住んで居る、此人種の成長した者を平均して見ると、曲尺で僅かに三尺を少し超える位のものである、

日本人は平均五尺二三寸と云ふのでありますから、世界中の一番大きい部類には固より這入らないけれども、併しながら又極小さい部類にも這入らない、今の極端のパタゴニヤ人と云ふ者はまだ能く開けない、教育も進んで居らないから文字も出來なければ充分に道具を拵へることも知らない、石の道具を用ゐて居る、極く開けない人種である、又亞非利加のアッカ人種も充分に發達して居らない、用ゐる道具抔は金屬で拵へた道具も持つて居るけれども、それは恐らく餘所から段々に學んだものと思はれる、着物などは着て居らない、斯くの如く脊の高い者も野蠻人、脊の低い者も野蠻人である、して見ると大きいのが良いとか小さいのが良いとか云ふ理窟は無い所でパタゴニヤ人と亞非利加の内地の種族と較べて見ると、丁度馬と犬、猫と鼠の大きさの違ひでありますけれども、世界中の人を見ると、斯樣な大きな人と小さな人の仲間ばかりでは無い、世界中の人を寄せて見ると、此兩極端の間が皆繋がつて仕舞ふ決して世界中の人種を大きい者と、小さい者との二つに分けることは出來ない、日本人は丁度兩端極の眞ン中位になる、唯一地方に限つて見ると、大層大きい者と大層小さい者と分れるやうであるけれども世界中の人を見ると、何處を境とも無しに連續して仕舞ふ、パタゴニヤ人の次に位する者は、何處の人かと云ふと、日本から言ひますと、東南の方、亞米利加に行く途に布哇と云ふ處がある、布哇からズットト南の方に澤山の島がある、是等を總稱して南洋諸

島と云ふ、此南洋諸島の土人がバタゴニャ人の次に位するのである、其次は何處かと云ふと、亞非利加の一地方の人間である、其次に位するのは何處かと云ふと、英吉利人とか獨逸人とか云ふ者である、日本人であるとか、歐羅巴でも北の方に居る所のラップ杯と云ふ者は前の者より脊の低い人間である、其外亞非利加の內地に居る小さい者を寄せて見ますと一番脊の高い者から一番低い者迄ズット繫がつて仕舞ふ又開化の順で見ると、極大きい人間は野蠻人である、其次の者は稍々開けて居る、其次の者は開けた人間である、小さい方で見ましても、一番小さい者は野蠻人である、其次が稍々開けた者、其次になると大に開けて居る、斯う云ふ譯でありますから、脊の高いのが善い、脊の低いのが惡いと云ふことも言へない、つまり人間の頭の中で、樣々の事を考へて行ふのでありまして、脊の高い低いで競爭をして居るのでは無い、若し脊の高い者が必ず勝つと極まッて居れば、何も回向院で角力を取るには及ばぬ、物指を持つて行けば宜い話である、世界諸人種の知識でも其通りで、大きいのがよい、小さいのが惡いと極まッて居るのでない、我々日本人が歐羅巴人に對して話をするのに、上を向いて言つては、如何にも申上げるやうで見識がない、斯ふ云ふ樣にチョッと思はれるけれども、それは一時の話であつて、バタゴニャ人のやうな、大きい奴は野蠻だと思ッて居れば何も大きいのが羨ましいと云ふ譯も無い、それで吾々は身體が丈夫であつて、御互ひに勉强して、國の開けるやうに努めさへすれば宜いので、何も身體の大きくなることを努めるには及ばぬ、同じ事ならば大きい方が立派であるけれども、小さいからとて何故斯んな小さな人間に生まれたかと言ッて嘆息するには及ばぬ、それよりも頭で以て考へて、外國人に負けないやうにすることが必要である、既に露西亞と日本と戰爭をしてどッちが、勝ッたかと云ふことは說明する迄もない、正しく脊の高い者が負けて居る、して見ると私共が此處で長いことを言はぬ

でもどちらが宜いかと云ふことが分る、小さいのが宜いと云ふ譯で無論ありませぬけれども、大きいのが決して羨ましいので無いと云ふことは分つたらうと思ひます、

歐洲の婦人社會

文學士　齋藤一如

世の中が文明に進むに從つて、起る所の弊害は何であるかと云へば、人心が奢侈に流れることであつて是は社會學上の原則とも云ふべく、孰れの世界にも免れ難いものである、それが爲に宗教、道德若くは倫理と、さま〴〵世の制裁といふものが起つて、奢侈を矯むることに付いて、學者は大に研究をして居るのである、若しも何の制裁もなく、此奢侈といふことが進んだならば、其結果は如何であらうか、彼のハビロン、インタスの河畔まで進んで來た所の文化、スパルタ、アデンの如く榮えし國、埃及羅馬の如く盛なりし國も、遂に滅びて、今では孤城落日の慘憺たる有樣に歸して居る、何れも其の因する所は奢侈に外ならない、巴里の文明は花をかざし、美を競ふ奢侈の爲に衰へ、即ち彼の大革命となつたのである、英吉利も奢侈に流れて、英領には年中日が沒しないといふほどであつたが、今では商機を他に制せらるゝに至り、學者が大に頭を傾けて之が挽回の策を講じて居る、獨逸を見ると、軍人がコルセットを嵌め、お白粉を塗り、容貌を飾り、男兒の手に金剛石の指環を輝かし、只管其風采を粧ふことに氣を揉んで居る、それが爲に軍氣は緩み、近くは北清事變に於ても、其成績は列國に比して宜しくなかつた斯の如く奢侈は、國の進歩に伴つて來ると同時に、其文明に障碍を加へて居るのである、斯樣な有樣で歐洲は各國共に今日は非常に奢侈を極めて居る、從つて歐洲の婦人は、貴族若くは富家の子女は問はず其他は皆幾分か相當の地位ある人でも、生活の度の高くなると共に、自分自ら働いて口を糊せなければ

ならぬといふ狀態になつて來た、それ故に婦人もさま〴〵の方面に向つて、獨立して職業を執るの途を求めて居る、或は雇敎師になるとか、若くはタイプライターを遣つて出版するとか、種々の婦人の職業がある、それを一々並べることは甚煩はしいことであるから、一二私が婦人の職業として、最も恰好の仕事であると認めたものを申さう、

それは動植物の標本を製することで、例へば小さき動物の一部を切離すことなどに至ると、最も細かい事で、男子の硬き手を以てしては、迚もよく出來ない、是非とも女子の纖手を以てしなければならぬ歐洲では博物館を初めとして、至る所に於て婦人が蝶の羽をひらき、或は足を延ばし、こわれた虫の足をつけるとか、或は魚の骨を組立てるとか云ふ職に當つて居る、私の友人に獨逸で此標本の商賣をして居るものがある、此人は自分が常に印度、亞弗利加支那などに來て、珍らしい蝶、蜻蛉を集めて歸る、さうすると家にゐる、七八人の婦人は、それを立派に整理する役目を持つて居る、さうして殆んど天然と違はないやうに好く仕立てゝ居る、これを若しも男子にさせたならば、男子にはやゝ狡猾なものが多くて、少し製作法を覺えると、直くに自分で獨立して仕事する考を起すものが多い、それ故兎角秘密が漏れる恐れがある、商人に取つては職業の秘密を重んずるといふことが第一の寶であるから、此秘密を守るに確かであるといふ點からも喜んで女子を用ひて、相當の報酬を與へて居る、其他各商店に於て、店頭で物を賣捌くのも女の仕事として居るは、日本とても同じことであるが、大勢の客を引受けて、愛嬌よく秩序正しく敏捷に立働いて居る態はなか〳〵比較にならないものがある、

日本でも女子が判任官になるなど、大分事務の範圍が廣くなつて來たが、歐洲へ行けば、裁判所の代書人の如きは皆女子で、圖書館に行つて、何々を調べてくるとか云ふやうなことにも、皆女子が使はれて居て、一度女子を使うたものは、從順で正直で、

其成績もなか〲擧るさうである、併しながら歐洲に於ては、實に物價が高く、斯樣に女子が用ひられて居るに拘らず、なほ且つ口を糊することに汲々としてなか〲自分の服裝迄も、思ふやうに整へることは難しい、それであるから、多くのものゝうちには知らず識らず穽の中に這入つて、救ふべからざる境遇に陷るものが出來るのである、

私が初めて歐洲の地に足を踏入れた時に甚く感じたのは、我國の女子はさて置き、我國に居る西洋婦人を見ると、實に皆悠々閑々と歩い、或は威張つて居るやうにも見えるが、それが反對で、一人も悠々閑々として居るものはない、何れも凛々しい、健康らしい身丈の高い、日本男子は後に瞠若たらざるを得ない大きな婦人が、大きな籠を提げて、活潑に至る所に歩いて居る、段々馴れるに從つていくらか其感想が薄くなつたが、最初のうちは、遇ふ人、見る人皆顏色はうるはしく、薄くれなゐの色を呈し、骨格のよいのを見て、實に人は斯くありたいものだといふ考が腦へ浮んで、我々日本人は。此矮小なる骨格、黄色なる顏貌を、互に相見て、友達同志啞然として長歎息をした次第であつた、何故に歐洲の婦人が、斯く體格がよく、血色が優れて居るかといへば云ふまでもなく、食物のよいのと、運動がよいのとであつて、その運動の方法には樣々あるが、先づ郊外の散歩、或はテニス、クリケット、冬になれば氷滑りを盛んにやる、何でも暇があれば因循姑息に引込で居らないで身體を動かし浩然の氣を養うて居る、それから家庭の有樣であるが、西洋と日本とは大分趣が違つて、何方が樂しいかと云ふに、私は假令多少の缺點があつても、寧ろ日本の家庭を取る、歐洲に於ては、女子に一定の教育を授け、丁年に達すれば、最早親の手から離して他嫁ふのが先づ一般の風俗である、それ故に前述の如く色々の職業に從事して、獨立の生計を營むと同時に、殆んど自分の家庭といふものは無くなつて、未來の家庭を造る考に移るそれであるから、婦人は出來るだけ、種々の會

に出席し、多くの人に接し、交際を廣くすることを考へる、而して歐洲の婦人が、一般に想像をして愉快を感じて居るのは、自分が良縁を得て、愉快な家庭を作りたいと云ふのである、さて其家庭を作つた上は何うかと云ふに、歐洲の家庭は夫婦二人にて新たに家を造り、其間に何も心を置くべきものがないのであるから、最初は非常に愉快であるが、やがて平々坦々たる無趣味の家庭になつて、苦もなく、樂みもなく、遂に互ひに境遇に厭きて、夫に對する擧動が冷淡になり、妻に對する愛が薄くなり、不平不足を訴ふることになつて、忽ち一家の和睦を破るといふやうなことになつて仕舞ふ、親は一度我子を手離した上は、恰も他人を見るやうな有樣を以て居る、從つて子も亦親を思ふの情决して濃やかではない、之を我々の眼から見ると、誠に冷淡極つて、餘り感心が出來ないのである、之に反して日本の家庭といふものは、女子は一度他に嫁せば、舅姑に事ふるといふ義務があるので、女子は之が爲には隨分心を勞することも多いけれども、妻に斯ういふ一つの苦みがあると思へば、夫たる人も之を察して餘計にいたはるといふ樣に、自然愛情も濃かになつて、苦みの中にも、常に精神上の愉快を受けることが出來る、又親子の間も、親は死するまで子を思ひ、子は親に孝を盡さんことを願ふて、親子の情の厚いこと、歐洲の人の想像にも及ばぬ處であらうと思ふ、故に歐洲の婦人に、日本の風俗を話すと、皆羨しいといふて居る、それ故に私は寧ろ日本の家庭を取ると同時に、何うか斯ういふ歐洲の惡弊を日本に注入したくないと考へるのである、日本古來の習慣には惡いこともあらうが、又日本には一種固有の美があるから其美に益々改良を加へたならば、大に日本婦人の進歩敎育上に稗益する所があらうと思ふ、



歐米の交際社會と婦人

學生勞働者等にして、海外に渡航する者は、暫く措き苟も漫遊に依つて智識を培はんと欲せば、必ず之を上流社會、即ち交際場裡に求めざるべからず、然るに從來漫遊の程か終りて、歸朝する者の多くに就て見るに、曰く予は某國の某大臣と會見せり、曰く予は某國の富豪某氏の晩餐に列せりと、人に接する毎に揚々頗る誇色あるも焉ぞ知らん、其の見聞し來りたりと云ふ事項に就て、少しく深問追究を試むれば、内容のプーアなること、殆ど漫遊前と何の選ぶ所なからんとは、併し彼等と雖も、最初より漫然として其の行を企てたるにはあらざるべきも、其の智識上の收穫の、斯く貧寒なるは、蓋し其の日程に際して、用意の足らざりしものあればなり、即ち智識の寶庫に入るべき關鍵たる上流社會に交はるの作法、就中婦人との交際法に通曉し居らざるに因るなり、而してこの婦人に對する交際法は、從來の習慣より邦人の最も難しとする所、否寧ろ蒼蠅しとする所にして、實は無理ならぬ事なるが、之に反して歐米に於ては、婦人は常に交際場裡のオーソリチーにして、苟も婦人に接するの道を知らざれば、交際場裡に出入する能はざるなり、故に交際場裡の人として馳驅せんと欲せば、先づ婦人に接するの道を會得するが肝要にて、之が爲め邦人は殊に其の蒼蠅しとする所に耐へ忍び、時に或は吾人日本人の眼より見て、男子の威嚴を疑ふことまでも、婦人の爲めには能く之を忍ぶ底の覺悟なかるべからざるなり、蓋し歐米に於ける婦人の地位は實に邦人の想像以外にて、晩餐會に於ける男子は婦人の爲め、常に半ば給仕人の役目を勤め（食卓の順序は必ず男女を一人置きに、組合はすが例なり）馬車の乘下には、往々馬丁の代理をさへ承はるなり、隨つて晩餐會に於ける主人の常に婦人なるは勿論、偶々個人を招待するも、亦皆主婦たる細君の權能に屬するなり、故に第三者の紹介等に依りて、始めて相會ひたる兩者は、單に「知人」となりたるに過ぎずして、相手に依りて更に其の細君に紹介され、家族と共に談笑するまでに至らざれば、未だ交際を結びたりとは云はれざるなり　而して我か漫遊者の所謂る某々と交際せしと云ふは、多くは前者の部類にて、前記智識の寶庫に入るべき關鍵は實にこの細君たる主婦の手に握られ居るなり、即ち換言すれば彼等のファミリーに入るは、彼等が朋友として承諾を與へたるを證するものにて、吾人漫遊者の目的たる諸種の觀察は、之に依て始めて其の光明を望み得るなり、而してまた之に伴ふ第一の用意として、十分なる語學の素養を要するは勿論にして、少くとも一箇國の外國語には通じ居らざるべからず、併し故西鄕侯の如きは、外國語に於ては全く啞者たるにも拘はらず、世の外交場裡に立ちて常に外國婦人の歡迎を受けし例あるも、是は所謂る言辭を以つて傳ふべからざる侯獨特の技倆にて決して一般を律する標準とはならざるなり、

（和田維四郎氏談）

伊豆大島の風俗

東京府視學　御園生金太郎

大島といへば伊豆七島の一つ、伊豆七島といへば、鎮西八郎爲朝や浮田秀家等が流罪の舊蹟たることはとくに御承知の筈でありませうが、この因縁からか伊豆の大島と聞けば、何だか遠いやうに思はれ、千里天涯の孤島でもあるかのやうに思ふ人もありますが實際はそれほどでなく、大島は七島中最も本州に接近し、東京を距ること海路四拾六里、伊豆下田港を去ること十三里の所にあるのです、まづ東京からの順路を申すと、朝の六時頃に靈岸島を發すれば、午後三時頃には有名な熱海に寄航し、なほ二時間餘にして伊豆の伊東といふ温泉場に着きます、こゝから南方を望めば昆波渺茫として盡きんとするところ一縷の煙霞天に接して、宛然、臥牛に髣髴たる黛影を瞥見すべしも仰山だが、まあ、こんな風情で、大島の姿は遙に雲煙の間に認められます、さて伊東に一泊して、生々したおつくりでもたべ、透きとほるやうな温泉の溢れる中に飛び込んで一夜の熟眠を貪る、たゞ銘々お勝手次第、翌朝大島通ひの滊船に乗り込むと二時間ばかりで目差す大島に到着します、尤も滊船は隔日に出るので滊船の外に和船は風さへよければ毎日出るが、これは十時間ばかりかゝります、最も遠い八丈島は月一回の定期船で、東京から百二十里あります、其他三宅島は月三回、新島は下田港より隔日、御藏島、神津島は各月一回の定期航海があります、尤も大島でも天候が、惡くなると半月位、舟の通はぬこともあります、大島は此の通り本州と異ならざるものでありさうなものに、これはまた豫想外で、その人情風俗さては男女生活の狀態に至るまで、全く別天地の觀をなして居ります、ことにその最も著しきは女子の風俗であります、私が大島に着いた時はちようど達磨船に薪を積み出すところで、濱邊から船に棧橋を架けて、數多の人々がかしましく働いて居りましたが、それが皆婦人で、

矢瀬や大原の流筏に薪を頭で運ぶのです、旅客が着くと島のものが、手荷物などを運んでくれますが、これが、また婦人で、軽いものは手に提げ、重いものは頭に載せます、これがまづ第一着に旅人の目を驚かします。

ここで、ちよつと島の大さを申すと、此島は東西二里半、南北三里十八丁、周圍凡そ十里二十六丁ありて、戸數一千六百五十六と、人口五千四百二十四とを有し、新島、岡田、野増、差木地、泉津、波浮の六ケ村に分れて居ります、新島村は島の北部にありて、其の繁榮は全島の首位を占め、舟の着くのもこゝで、島廳もこゝにあり、小さいながらも郵便局も設けられてあります、私の滯在して居つたのもまたこゝであります、郵便は和船の通ふ日には毎日來ます、去三十四年から海底電信も通じました、これは一つは波浮港に水雷艇の碇泊所があるから、

話前に戻る、さて婦人の風俗中第一に目に着くものは、髮の結ひ方でありますが、これは本州とは著しく相違して居ます、髮の結ひ方には何れの婦人も中中苦勞するもので、丸髷、島田、銀杏返し、束髮の似合不似合それから、それに付き添ふ掛け物、櫛笄リボンの好みに至るまで、之を求めば日もまた足らずで、こればかりに浮身をやつすものさへあるが、島にはこの苦心一切無用であります、髮の結ひ方は島田といんぼんじり、いんぼんじりとは奇妙な名です、島田といふと一寸氣がきいて聞えます、島田はなげしまだといふのが普通で、これが先づ年頃の若い婦人の髮です、なげしまだと名だけ聞くと小意氣に聞えますが、實はさほどのものではありません、ざつと申すと、手拭の兩端を左右の手に持ち、これを髮の毛と想像なさい、さて左手のところをしつかり握ると、それが根に當ります、さて右手の方を適宜に折り返へす、即ち拇指と食指でその中央をつかむやうにすると、もう島田が出來上るので、其の上の方を倒したのが即ち投げ島田で、倒さないのは一本島田といひ、十二三までの子供の髮です、いんぼ

んじりといふのは、いぼじりの轉
じたので、結ひ方は髪の先を折り
返して、羽織の紐を結ぶやうに結
ぶと、眞中で結ばつて兩方に輪の
やうなものが出來、ちようど蜻蛉
の頭の恰好に出來る、是が中年か
ら老婆までの髪で、何れも自然の
儘に束ねるのでありますから、元
結などはない、皆糸紐で多くは黑
又は紫であります、其外飾りは一
切附けず、常に手拭を冠つて居る
その冠り方は後ろ鉢卷に似て居り
ます、たゞ男のそれのやうに前の
方を狹くせず、前からは髪がすつ
ぽりかくれる位ゐに廣げて居りま
す、此手拭は外に出て働くときば
かり冠るのでなく、内に居るとき
も寝るときもその儘なので、お給

女學生の一日（其の三）料理



仕に出るときなどは新らしいのを
冠り代へて來ます、手拭地はりん
ぼうしぼりとか申しました、縦に
縞みがあつて、色は紺か水色、老
人は無地若いものは肴や波の極簡
單な小さな模樣が二つか三つ白く
染め出してあります、着物は本州
のと異つたことはありませぬ、た
ゞ袖が短く、ゆきもたけも短くし
て、どれもこれもつんつるてんな
借着をして居るやうに見えます、
地はすべて木綿か麻で、色は無地
誠に質素な風でありますが、それ
は此の着物が紋付、しかも五つ紋
で、そして此紋が全島同一で皆花
笹の蔓卷といふのであります、こ
の紋は爲朝の定紋さゝりんどうか
ら出たものだと申します、子供や

年若な娘は裾模様に松や梅を付けて居る、これもつんつるてんには過ぎ物です、帯は一切締めず、皆二幅の紺の前垂をして、その前垂の大い紐を前で結んで帯の代用をさせて居ります、去りながら女子が已れに屬する總てを飾に利用せんとする天性を有するは東西一轍、此島ばかりに造物者が此の天性を稟賦することを忘れる譯もありませぬ、何所かにありさうなものと觀察しますと、あります、なんでせう、これは皆さんにはお氣がつかれますまいが、たすきこれが大島婦人の唯一の飾り物です、たすきは、大抵一半は赤地、一半はかなことといふ如くに縫うてありますが、これには贅澤を盡すものと見え、普通五六十本、多きは二百本も持つて居りますので、土用干のときには、素麵か乾瓢でも干したやうに賑かに掛けてあります。

これが、大島婦人の頭髪衣服の一般であります、されど本州の風俗の浸入には茅ケ崎沖の黒潮の力も抗抵し難いものと見え、本州と同樣の着物を着たものも二三見受ました、また五つ紋や裾模様は昔はすべて付けたものださうですが、現今では、これを付けぬものが色々殖えたとか聞きました、次には生業の狀態、結婚、葬式、等本州と異つた點を談しませう。

内地と著しく相違して居るのは、男女の分業の差である、男は外に勤め女は内を治むといふは、殆ど一般の通則であるが、島では女子の職分が非常に廣い手短かにいへば女子が非常に働き手である、畑に出で、耕作をなし、牛を飼ひ、山に入りて薪を苅り、之を束ね海邊に運びて船に積み、家にありて衣食を供し、旦夕に水を汲み入るゝ等、女子は家の内外掛持で非常に働いて居る、男子は専ら漁業に從事して居るが、其暇は皆無爲遊惰に暮して居る、元來未開の世では、男子は外敵に當り戰爭に從事し、平素は遊惰に日を送るのですが、いくらかその風があるのです、一寸島の産業をお談しませう、産業は農業、林業、漁業の三つで、農産物は甘薯、芋、麥、粟、稗、大豆、胡蘿蔔等で水田は無論ありません、その中

に最もよく出來るのは甘藷と芋です一體に地味が瘠せて居りますから、永年同一の土地を耕すことは出來ません、切替畑と稱へて、はじめ原野に樹木を植え、それが薪材になるを待つて樹木を伐り、その跡を畑にする、かくて三四年耕作を續けると地味が段々やせて、ものが出來なくなる、さうするとそのまゝ打捨て置き、數年の後雜草の生ずるのを見て、また薪になるべき樹木を栽え、十五年乃至二十年を經て其の木を伐り、あとへ麥、甘藷を播種すること前の如くするのであります。また山には椿が多く生えて居る、其實から椿の油を製する、これも産物の一つであります。皆さん御承知でせう。牛は殆ど家毎に飼うて居る、現今は全島で千五百頭ばかりあるこれがすべて洋牛で、勞働にも使役し且つ牛乳をも搾る。練乳の會社があつてミルクを製して居る、そのため一村に一ケ所位づゝ乳を搾るところがある、そこへ乳搾りが來て、諸方から連れて來る牛の乳を搾る、その價は一升八錢位のものである。大島では一合一錢二厘で新鮮な牛乳が飲める、ついでに御談すると牛肉もありますが、これは生れてから百日許生長した牡の犢を屠るので、親牛を屠るのではありませぬ。漁業は小仕掛の漁業ばかりで、これは内地の漁村の有樣と異つたことはありませぬ。

かやうに女子がよく働くところから、一家内に於ける婦人の勢力は從て強く、一例を擧ぐれば家中の鍵は恐く一家の主婦の保管するところとなり、數多の鍵はすべて一繋ぎにされて婦人の前垂の脇に下げられて居る、こゝにおかしきは萬一家内に風波荒立ち偕老同穴の契遂に破裂といふ段には此鍵を投げつけて出て來る、これが三下り半といふ所に當るのださうです、女の方から投げて出て來るとはえらいのではありませんか、この通り女子が非常に働き手である結果裏面には、また悲しむべき事が起る、なにかといふと女子が勞働を職分とするために、その職分に不利なる事を厭ふ、それで多くの小供を持つことを嫌ふ、其の結果墮胎といふ恐しい事が行はれる

しかしこれは現今は全く跡を絶つたさうですが、年寄の婦人に聞いて見ると三人以上子を持つて居るやうな事はなかつたものだと申します、まづ長子を育てると其次は育てぬ、其の次を育てゝ、其の次は育てぬといふ風であつたさうです、そのためですか、婦人は勞働も十分にし、衣服頭髪なども前云ふた通りで運動には輕便であり、且つ頭に物を戴せるところから身體は貞直で姿勢は立派で、娘の時代は皆健全であるのに、やはり婦人には病持が多いと申します、結婚送葬の式はまた異なつて居る、結婚の方は餘程手輕で、當夜婿の家で親類の者共が祝の宴を張り、近隣の人を頼み、強て女を誘ひ來りて、婿の家に入らせる、花嫁は別段に晴着を着るにあらず、當夜の衣裳は平常着の小奇麗なといふに過ぎぬ、さて花嫁は閾を入るばかりで祝言の式といふもなく、ただ家内土間の片隅に潛み、暫時にして機をうかがひ實家に逃げ歸る、その翌朝は早く水桶に水を汲み婿の家に至るといふ至極簡單なものです、それから後も或は一年或は二三年も女は婿の家には入らず男の方から通ふ、たゞ朝夕水を婿の家に運ぶ、これを舅姑への務となす、その後舅姑が隱居すると、嫁は始めて家に入り、婿と共に新たに家を相續するのです

水を汲むことは七島全體を通して女の仕事の重なるもので、毎戸の庭前に井戸があるが、これは地中から湧き出すのではなくて、雨水溜である、屋根の雨水がことごとく樋を傳つて此井戸に入るやうに出來て居る、隨分深い井戸もあるが側から底まで一切タタキである、これを雜用水に用ふるのですが、ボウフラなども居ないではありません、飲用水に用ふるものは共同の大きな井戸で、其井戸の周圍に二十人も三十人も集つて汲むやうに出來て居る、水桶は大人のと小供のとは大小があるが一斗入位のが多い、釣瓶は小形な釣瓶で、これを使ふのは餘程熟練もので、我々がやつても、ジャブンと甘く釣瓶が顛へりませぬ、朝と夕とには村中の女がこゝへ水汲みに來るのでその陸續として水桶を頭に戴せて行き交ふさ

まは、一寸見ものです、例のインボンジリヤナグシマダから手拭の冠り方、つるざさの五ッ紋、此島に特有の襷、すべての風俗が一幅の畫面に現はれるのは此時です。

婚禮の簡單なるに比して葬式は非常に重々しい、女は婚禮の晴れ着は持たないでも、葬式の時に着る服は持つて居る、これはカッギに似たもので、相應の金をかけてふだんから持つて居る、ことに異なる風は此の葬式に泣女のあることです、支那人の葬式には泣男といふがある、その巧拙によりて五圓位、十圓位というて、巧に泣くものだけ泣き賃が高く、そのよく泣くものを多く雇ふだけ立派な葬式だといふわけだが、大島のはすべて女に限り、夫の死するときは妻、母の死するときは娘、その他親戚知己ののゝうちで泣くのです、その泣き方には一種の節があつて、言ふ事とも大概同じことで、まづ死者の名を呼び、哀悼の意を述べ、妻子遺族が悲嘆の情を訴へ、さてオヽイ・オヽイ、オヽイと聲を揚げて泣く送葬の時は出棺の前 及び寺にて讀經の終りたる時とにかく泣く。然るときは其の坐に列なる人々が皆同情に打たれて一齊に泣く、其の式強ちに虚禮とのみ擯斥すべからざるところもある、その外忌日追薦皆同樣で、ことに于蘭盆には墓場に行きても同樣に泣くのです。

言葉や歌も甚しく相違して隨分異つた言葉や、面白い歌もありますが、あまり長くなりますゆゑこのくらゐにしておきませう、

法學試驗と和歌

動ともすれば趣味と實益の云々といへる看板の下に目を惹く雜誌の色々を始め、社會の各方面に、此の文字の多くなれるを見るが、面白きは此程臺灣協會學校の學年試驗問題に『都鳥』の事ありて．各新聞に奇異と唄はれしが、又た法政大學の學年試驗法學通論の問題(中村博士出題)に左の如きもの出でしとぞ

世を棄てゝ山に入る人山にても
なほ憂きときは何地行くらん

とありて、此の歌の意義を法律學上より見ると同時に解釋を述べ、之れを批評せよとの事に、生徒一同眉をひそめつゝ、イカニ趣味流行とは云へ、我々の大學に入れる以來、斯る學識に達し得る迄の修業の功ありしや否や疑問なりと、並べる椅子の目ひき袖ひき、果はてゝに三人彼處に五人、額を合はせ假かに和歌の研究に頭をいためしとなん、

少女の登山と心得書

大阪市堂島吉弘白眼氏の令嬢政子は、漸く九歳の幼兒にて、單身富嶽に登り、更に東京に來りて、長き旅寝を重ねたることは、過般の新聞にて普く人の知れる所となれるが、其出立に際し、兩親より政子に與へたる心得書は、微細の點にまで注意行屆き、慈愛の溢るゝものあるを以て、左に其要項を摘載す、

◎風が吹たり、雨が降つたりしたら、幾日でもお泊りなさい、危いから、

◎山へ上りかけには、玉子をたんと持つてお出、沸した水も持てお出、上へ登る時は上を見ないで、足元へ氣をお付け、

◎宿屋で杖を一本お買ひなさい、そして大阪へ持つてお歸り、

◎山の上ではパンが厭なら、お粥をおたかせなさい、

◎山の上で神さまの印を端書に澤山押してもらひ、山を降りたら郵便でお出し、宛名のないのは持てお歸り、

◎紀念帖へ捺て貰ふことを忘れてはいけません、

◎山の上で蟲と小石と金明水とを忘れてはいけません、

◎山を降る時は急いではいけません、

◎氣分の惡い時はすぐ藥をお飲みなさい、

◎足の底や、鼻緒の摩れる所に豆や鼻緒ずれが出來たら決して潰してはいけません、綿で包んで大事にしておきなさい、又湯に入れてはなりません、

◎サルマタを外さないやうに、何時も着てお出なさい、

◎山の寫眞や持ちよい土産が有つたら、高くても買つてお歸り、

◎宿屋に泊つたら茶代一圓、下女みんなへ五十錢やること、

◎山の上で端書に印を捺してもらつたら、お錢を出して お禮をすること、

◎汽車の中では持物に氣を付なさい、

◎便所へ行く時は持物に氣をお付けなさい、新橋へ着たら驛長さんに面會して、車の確かなのを賴んで貰ふこと、



谷の川水

伯爵夫人　小笠原貞子

閑居水

谷川の水のひゞきを友として
浮世をしらぬわび住居かな

海人

鮑とるからき手わざに世をわたる
あまのこゝろぞあはれなりける

沖舟

沖見ればいかつる船のともす火の
星かとばかりあやまたれぬる

磯松

潮風にかたぶきながらいつまでも
みどりかはらぬ磯の松ばら

百とせも經にけむいその老松の
みどりもふかく苔むしにけり

山中橋

やまがつはなれてかよへどくちかへり
よそめあやうき谷のかけはし

谷あひにかゝる板はし苔むして
行かふ人もいまはたえけり

あでやかなるものを

みそのふのませのなでしこ露おきて
今をさかりと咲匂ひたる

寄月祝

望月の窓にたのしく酒くみて
君が千とせをいはふ夜半かな

閑居水

霞袖女史

山里に住める我身と水の音は
こゝろ細くもなりにけるかな

折にふれて

佐々木信綱

塔の上に夕月しろく見えそめて
　ゆく道くらし竹の下道
飛石も濡れしばかりの夕あめの
　なごりすゞしき青桐のもと
泣やめば一人がないて幼兒の
　聲かしましきさみだれの窓
關越えて行くや遊子の影は見えず
　いなゝきさむし有明の月
なつかしき母のみ面はふと消えて
　ともし火くらし五月雨の音
なき妻が縫ひさしたりし夏あはせ
　こはかくながら殘しおかまし
村づかさみつぎをはたる聲さむし
　秋くれかたの山かげの村
大后めでましゝひさごつるかれて
　秋かぜ寒し萬壽山のうへ
托鉢にあるじはいでゝ古寺の
　門ににほへる白ぎくの花
霧のうちに砧うつ家こゝかしこ
　ともし火さむし山かげの村
宿引のこゑしづまりてうまや路の
　並木松かげこほろぎの鳴く
いそしめるかぬちが槌の音たかし
　あかつき寒き村のはづれに

友のたのしみ

小川直子

凡そ人の名をつくる事は、正子あるは操など、すべて斯くならまほしとてのわざにしあれど、玉とつけたりとて光もいで來ず、輕と呼べども身は重くして働き鈍きがあるべく、兎にも角にも名にそはぬが世の習ひなれど、爰に阿部優子刀自は、名に背かず心

ざまいとやさしく、こぼるゝばかりの愛敬ありて、老たる人の爲には心の安からんやうにしなし、幼き兒子達をば、らうたがりて、よくなづけなどせらるゝさまは、實にくし聖の願ひにもかなへり、と見ゆる君なれば、此の舘には老も若かきも訪ひ來つゝ、常に賑はしく暮し給へり、かゝればおのれも常に訪ひみ訪はれみ、親しみあひて、心へだてぬ友なるが、此程より五月雨の打續きて、いとゞつれぐ\なるまゝに、窓の中なる文よむわざも、梅の實ならねどうみはてたる折しも、此刀自のもとより消息ありて、只今三輪田眞佐子女史、安藤菊子刀自打つれて、ふりはへ來たまへり、されば例の物がたりも心ゆくらんを、とく來たまひてんやとあり、素より此の刀自の舘とおのれの庵とは、程遠からぬ道にて、たゞはひ渡たるばかりの所にしあれば、老が身なれど、やがてかちよりものしつ、此二人のまろうどには、久しうたい面もせざりければ、いとうれしうて、種々のかたらひぐさを摘いでつゝ、互ひにわらひみたのしみあひぬ、此時優子の君いひ出でられけるは、世に占といふ事ありて、いにしへはかし



其の(四)讀書

こき御わたりを始め奉り、下は野邊の末、深山の奥にすまへる賤が身までも、萬につけつゝ問ひたる習ひなりとかや、されど斯く開け行く世は、かゝる事に心をとむることは、中々に迷ひの媒ともなるべければとて、此頃はいたう戒むるわざなるを、猶この占を深く信ずるともがらもありて、兎かういひあへるは、如何なる事にか、優などは、學びの道も淺ければ、何のたどり得たる事もなくて過し來ぬるをいかなるものにかとありけるに、三輪田女史は、素より唐やまとの文のはやしにも、奥深う分入にし君なれば、これにつきて弘くためしを引出でつゝ答へられければ、優子刀自喜びて、

心ある友にしあへば世の中の
　まよひの雲もはれわたるなり

かゝみとも見るべき友にあひしより
　心のやみも晴れわたりぬる

とよみいで給ひけるを見て、おのれも

曇りなきこゝろの友とかたらふる
　折しもはるゝさみだれの空

さみだれのつれ／＼わたる頃としも
　しらで語らふ窓のうちかな

となむ思ふまゝをよみいでける、又優子刀自、菊子の君には、七とせあまりもあひまゐらせざりければとて、

年ふれどかはらでうれし老松の
　たかきこゝろの道の友がき

とありければ、菊子刀自のかへし

嬉しさは何と言葉にいは淸水
　ふかきなさけはくみてこそ知れ

また三輪田女史

おもふどちあひ逢ふごとに紅葉の
　わかきこゝろのいろぞ見えける

三輪田女史はこよなき有識の君なれば、おのれ

分ゆけどはてなき道の奥佐で路を
　あさればひろふことのはの玉

とよみて聞えたり、また菊子刀自は、いとも／＼み

やびたる君なれば、

夏もなほ匂へる菊の高き香を
たもとにしめて遊ぶともがき

かくおのも〳〵思ふがまゝなる事どもを、うらなくものしつゝ遊ぶ折しも、二郎君名は泰二と稱へて、今年帝國大學を事をへ給ふが、いで來て、何くれと物がたりども、今めかしき方にうつりて、こよなう面白し、かく樂しむほどに、此頃世にもてはやすなる繪葉書といふ物をもていでゝ、あはれ刀自達よ、願くばこれに歌かきてたびてんやと乞ひ給ふに、安藤刀自がとりあへず、螢草のかたあるをとりて、

よるひかる螢に似たり山さはの
みぎはに淸き露くさの花

今ひとつ浦島が子のかたに

玉手箱あくればさむる夢の間に
八千代をこめて契りおきけん

とかき給へりければ、三輪田女史は新樹の繪に唐うたを草にて

滿林煙雨午冥濛　淨盡殘花春已空　猶有餘香吹不滅　輭靑綠樹梢風

おのれもたゞに過さんもはえなきわざならんと思ひて、うるはしき竹の繪ありけるに、

人のよのまことの道はくれ竹の
すぐなるかげやしをりなるらん

かゝる遊びなれば、心ゆくことたとへん方なくて、長き日もはや黄昏近くなりにければ、いざ〳〵と催したてゝかへらんとせしに、雨いたうふりいでければ、優子刀自が、ぬれ〳〵て出行き給ふ刀自たちを見送りまゐらすとてなどいひて、

淺からぬ人のこゝろはふる雨に
ぬれてかへるを見てぞしらるゝ

といひかけ給へるに、安藤刀自のかへし

玉あへる友と遊びし嬉しさに
ぬれてかへるも何いとふべき

三輪田女史は

あかずとてまたかへりみる別路も

あひおもふ心はてなかりけり

おのれ

おもふどちあかぬ別れにしをれつる
たもと濡れそふさみだれの雨

などいひかはして、みなかへりにけり、つとめて三輪田女史より、優子の君へきのふのたのしかりしことなどいひおこせ給へる文の奥に

わたゝかきむしろのかをり今も猶
袖にのこりてなつかしきかな

この日おのれは、庵のうちにたれこめて、きのふの事どもくりかへし、思ひいでつゝ、

松坂のさかゆくかげに立よりて
遊びしむしろ敷しのぶかな

と口すさびてありける折しも、優子の君より三輪田女史よりの此うたなどもたせて、見せにおこせ給ひければ、おのれもまた此松坂のえせ歌かきて贈りけるに、頓て

かくてこそ世にすむかひもありそ海
なみ〳〵ならぬ友にあひつゝ

とあり、そも〳〵此優子の君は、名のごと優なるのみならず、慈悲の心ふかくものし給へば、すべて世に行はるゝ慈善のわざには常に心をそゝぎて、かゝつらひ給ふ事大かたならず、さるからにいにし年御軍のおこりてより、こなたに救ひ給へるわざども、数へ盡すべうもあらねば、おのれは常に敬ひ尊びて交らうなりけり、誰も〳〵斯くこそあらまほしきわざなりけれ、

愛氷曰く、類を以て集まるといふ諺の如く、揃ひも揃ひし、貞淑の聞え高き刀自たちのつどひ、互ひにうつりあふ心のかゞみ、いかばかり清かりけむ、この文のうへに、そゝろその日のたのしかりしさまのしのばれて、いと〳〵奥床しうてなむ、

待草花　　宇治の橋姫

花見んとうつし植つる秋艸に
まづ置く露もなつかしき哉

胡蝶の日記（七）

白井千代梅

のぼり見るに、平らかなる山にて、千草所せきまで生茂り、鈴虫の聲など、哀に聞えければ、

駒なへしくつはの音にひきかへて
　ふりし世しのぶすゞむしのこゑ

松風の響きも、其世の事ども知せ顔なり

神がきのおひ木の松にもの丶ふの
　矢ながれ川のむかしとはゞや

大石楢橋てふ所を過て、右に黒う森の見ゆるを問へば、われぞ飛鳥の觀世音なりといふ、爰をもよそにやはとて詣づ、音に聞つる二王の御姿こそ、尊とけれ、慈覺大師の作らせ給ふといひ傳ふ、いと嚴しう生るがごとくに見ゆ、御佛に額きつ丶、頓て見あぐるに、黒き板に白き墨して、たゞ賴め、甍も高くとぶ鳥の、あすかの宮のひろき惠みを、とあり、繪馬額やうのもの數多あれど、煩さければ記さず、爰よりは遠くもあらずと聞けば、十二瀧とも見んと、人々思ひおこしぬ、遠藤河内とて、田のみ果なうて、させる見所もなき野邊を、限りなくゆきて、や丶瀧つ瀬ある山に登りつきぬ、聳えたる岩山も樣かはりて、我國の境とも見えず、武陵の桃源も斯やあらまし、今日はこ丶らの道にふみ疲れたるを念じつ丶、辛うじて登りてみれば、あなたこなたの、岩山の間ひを、十二段になりて落るなりけり、されど、三段四段ならでは見えず、高き、ひくき、洒しかけたる糸のごと、落るもおかし、岩ほに萩の咲きたるをみて

山ひめのかざしの花とにほふらむ
　鹿もかよはぬみねの秋はぎ

日もいたうかたぶきぬとて、皆いそぎつれど、幾ほどなくて暮れはてつ細き小田の畔道たどり行くに、ともすれば、ふみ落して、いとゞ足重うなりて、進みがたければ、

さかしかる山ぶみすれば我さへに
　足びきとこそけふはなりけれ

と思ふ、松山までは程遠し、松明なくては、いかゞせむと、困じぬれど、野中にしあれば、いと便なし、とばかり行けば遥かに火の光り、二つ三つ見ゆるにぞ、聊かたより得たる心ちして、そなたへと辿る、行きつきて見れば、河邊に里の童が集ひ居て、寄りくる魚を捕らんとて、松ふり照すなりけり、頓て火乞ひ道問ひなどして、少し歩めば細き川あり、わたせる橋もなければ、かち渡りして、浅瀬白波袖さへぬれぬ、更けゆくまゝに、道の勞れもいや増り、佗しさいはん方なし、あすは家路に歸るらむとおもふかりそめの旅だにも、斯う心細きを、郭孤のみだれたる世には　やんごとなき人も、從ふ者だになくて行衛も知らず漂泊ひしなど、況ていかなりけむと哀なり、辛うじて松山に到れば、夜半ちかくなりぬ、人々の相ひしれる方もあれど、甚う更けぬれば、むらひなりとて、某の町に宿りもとむ、眠たげなる聲して起出つゝ來れと、皆辭むに胸つぶれて、

まつ山の名のみたのみてこし物を
今はやどかす人だにもなし

雨さへふりきぬ、斯ては花の枕も結び難し、いかゞはせむなど佗あへりつゝ、猶求めさするに、やゝありて歸りきて、斯々の家になん、辛うじて乞ひ求め侍りぬといふにぞ、いと嬉しう、黄泉にて佛に逢へるも斯やあらむなど、供なる女どもの、おろがみなどするも理りになん、頓て入ぬれば、物も覺えずふしぬ、四日己の時過る頃、起出つる物から、雨ふればにやいと暗し、立出るほどいよ〳〵降りそふ

なみにぬれ露わけきぬる旅ごろも
なほくたせとや雨のふるらむ

銅龍山總光寺に詣づ、甍高く境内いと廣う、塵だになし、入もて見れば、佛の御前きら〳〵しう、名香薫りわたり、作りなしたる四季の花は、今咲出たらんやうなり、欄間にゑりたる龍は、空をも翔りつべう、虎は風をもおこしぬべき様なり、いかなる匠がものしたりけんと人々めづる、晝にもちかし、雨も降りそひぬれば道の程もたど〳〵しからむなど、從

者どもの急がすにぞ、實にもとて出ぬ、名にしおふ七色の櫻をば、青葉なりとも見るべかりしをと、心のこしつ、を指を折れば、さまでの日數も積らねど月頃へだてし心地して、此頃の面白さも、また侘しかりしも、とく母君に語り參らせばやと、心のみ急がるゝに、小出といふ渡りに出れば、風いみじう吹て、笠もとられぬべう成しかば、

さらぬだに家ぢをいそぐ旅人の
　かさ吹かへす風ぞつれなき

追楯八色木など打過ぎて藤島にきぬれば、家路になりぬる心地して、いと嬉しき物から、斯るしのゞ歩行は、又いつかはと思ふに、過來し方もかへりみがちなり、されど近き山だにさだかならねば、

あま雲よたちなへだてそながめこし
　かたゞにもなほ見つゝ歸らむ

渡前に至れば雨も晴ぬ、押口なる渡り打ちこえ烏の塒もとむる頃ほひ、家に歸りぬ、まづ母君に見えまつらむと、常のおましを指てゆけど、在さねば、いづらやいづらと求むるに、何ぞかく魘はるゝよと宣ふ御聲に、夢さめつれば、ありつる床にて、母君の傍にふりたりけり、

（完）

萩の花

中山幸子

萩の花見つゝくれたり村雨の
　ふりしく野邊にすゞ虫のなく

眞萩はら見はてぬうちに暮れたれば
　あかしとなさむ月をこそまて

まはぎ原さかりを見つゝ暮れたれば
　月をまつ虫なきすさぶなり

糸萩にころもぬれはていとをしく
　動きもやらず立くらしつゝ

あさ夕のけぶりもほそき賤が家の
　軒ばの萩のうるはしきかな

家事

家庭と鼻の衛生

醫學博士　岡田和一郎

一　鼻病と精神の關係

鼻は生理的どういふ關係を有つて居るか、人間に鼻と云ふものが存在すれば、どういふ仕事を命ぜられて居るかと云ふことがわからねば、鼻の病氣の事も解らぬ、鼻の生理的作用、即ち本來持前の役目は無論いろ〳〵あるが、先づ大別すると二通りである、鼻は嗅覺を司る、是は他の機關で決して代理の出來ぬもので、一は呼吸を掌る、即ち人間の生活の上に於て最も必要なる空氣を取り且つ出す、即ち呼吸を掌る役目を持つて居る、此方はちよつと單純に考へると、鼻がなくとも出來る、即ち鼻の代用物は口と云ふものがあるから、強ち鼻がなくとも、鼻の効力が缺損しても、口で出來るではないかといふ考を起すことが出來るのである、併しこれが家庭の上に非常なる關係を有つて居るので、どうしても呼吸をするには鼻に限る、口で呼吸をしてはならぬといふことは、我々の學問上、實驗上確かに定まつて居る、是も矢張皮想的に表面から考へると、口で呼吸が出來さうであるけれども、理屈上實驗上どうしても鼻でなければならぬのであつて、即ち口腔は決して呼吸する道ではない、併し此二つが生理的の關係であるので、何故そんならば、鼻は嗅覺を掌ることが出來るか、又にほひを嗅くのは鼻でなければならぬかと云ふことは、臭を嗅くのは是は五感の一であつて、五感器といふものは、皆それ〴〵特別の神經が入用である、それで其神經が、即ち眼で物を視るには必ず網膜のうちに視神經、即ち視る神經が分布して居る、さうして其神經の作用によつて、吾々

の腦髓に見たといふことの事實を知らして、初めて見たといふことの事實を感ずるのである、即ち耳で聽くには一の聽神經といふものがあつて、其神經が耳の鼓膜の方に來つて、音響を感じて、更に之を腦髓の方へ傳へるのである、

それど同じやうに、嗅覺を掌るに於ても、にほひを嗅ぎ得べき神經即ち嗅神經が鼻の中の一部分に分布して居つて、其處へ香といふ物が麝香であつても、樟腦であつても、皆空氣の中に飛んで居る極く小さな物體であるから、それが入つて來て、其の神經に附着して、一つのにほひを嗅ぐのである、であるから其の神經のない處へどんな多くの物が附着しても決して感じないのである、それ故に神經の在る場所、即ち鼻の中に限つて、にほひを嗅ぐのであつて、乃ち鼻でなければならぬといふ理屈はそこにある、

夫から呼吸をするには、どうして鼻でなければならぬかと云ふに、呼吸を爲る目的は空氣を取るのにあるので、吾々の身體の生存上極必要の物は空氣である、食物もあるけれども、食物はこの問題外である空氣がなければ、吾々は寸時も生存することが出來ない、その空氣といふものは、どんな空氣でも吾々の身體の中に取りさへすれば生存が出來るかと云ふに、決してさうではない、空氣は身體に害のないやうな有要な空氣を採つて、初めて吾々が生存することが出來るのである、そこで吾々の鼻は呼吸をする道具として作られて居る爲に、惡い空氣を美しくして、即ち身體に適するやうに空氣を改め直して、さうして身體の中に入るやうな構造になつて居るのである、少し卑近のやうな申分であるが、解り易いやうに申せば、先づ鼻の前庭部と名づけて、入口の所には微毛が澤山發生して居る、此微毛が發生して居るのは、誠に無用の長物を置いてあるやうであるが決してさうではない、即ち微毛の發生の爲に空氣が幾分か清潔にされるのである、實に空氣の中には、諸の塵埃が澤山飛んで居る、從つて其中には黴菌

も澤山ある、多くの病氣、特に傳染病の原因は、多くは皆黴菌である、其黴菌が空氣の中に飛散して居る、それから黴菌の附着して居る塵埃も飛散して居る、其黴菌や、黴菌を附着した塵埃を有する空氣を身體中に澤山吸込んでも宜いと云ふ吾々の身體ではないので、吾々の身體は非常な弱點の多いものであるから、愈よ無害である、清潔であるといふ、極清淨なる空氣を取りさへすれば、何時までも健康であるけれども、此清鮮の空氣を撰ばなかつた時には種々の傳染病に罹り、或は塵埃を吸込んだ爲に病氣にかゝる、故に黴毛の發生は取りも直さず空氣濾過器を備付けたのであつて、即ち世の中の不良の空氣が先づ第一番に黴毛の發生して居る所を通過する爲に先づ一通り粗漉にこされて、さうして大きな塵埃などを其鼻の口先に置いて、然る後肺の中に進行するといふ構造になつて居るのである、

それから吾々の鼻の中は粘液膜があり、粘液膜には粘液腺といふものがあつて、始終多少の粘液を分泌して居つて常に多少の濕氣のあるものである、是は必要上濕はしてあるので、それはどういふ譯かと云ふと、即ち空氣の中に於ける塵埃或は黴菌が其道を通過する時に、其濕つて居る壁に突當つて、其處へ皆附着されて、さうして咽喉を通つて肺に入るのである、塵埃などを先づ鼻先にて粗漉にした空氣が尙一層漉されて、奇麗になつて入るやうな構造になつて居るのである、即ち此濕潤の程度、それから黴毛の發生の部分等は、正に不潔の空氣を奇麗にするといふ職分を掌らしめる爲に、斯くなつて居るのである、それから又一つは吾々の吸込む所の空氣は、一定の溫度を有つて居らなければならぬ、もし冷たい空氣でもあると、それを直接に肺の中に吸引したならば多くは風邪をひく、風邪ばかりでなく肺炎やり其他種々の病氣が起るであらう、故に吸引する空氣は必ず一定の溫度を有つて居らねばならぬといふことは當然である、所で平生我々が呼吸して居る空氣はどれ程の溫度で吸收するかと云ふと、定つて空氣

は此鼻を通過する時は、如何に冷たい空氣でも一度暖まる、即ち我々の血温で温められ得るやうの裝置になつて居る、我々の呼吸道は、此鼻の尖端から喉頭を經て肺に到る迄、其距離が甚だ長い、距離が長いばかりでなく、鼻の内は竹筒を二つ並べたやうな單純なものではない非常に複雑なる構造である、鼻の内には凸凹屈曲が澤山あつて、出たり引込んだりして居る、それが即ち空氣を暖めるに適當した構造で、其距離の長い、複雑なる構造を有つて居る爲に、其複雑なる所を通過して行く間に、好い工合に空氣が温められる、さうして温まつて健康な空氣となつて吾々の身體に這入つて行く、其職分が鼻にあるに拘らず、若も是が役に立たず、口でばかり空氣を吸つて行くと、寒冷の空氣は寒冷の儘で入つて行く、それ故口で呼吸をする人は、喉頭加答兒を病んだり、氣管支加答兒を病んだりするのである、それから今一つの問題は、吾々の呼吸する空氣は、一定の濕潤を有つて居るといふことが必要である、即ち空氣をしめつぽくするといふ必要がある、それには鼻の中にある粘液によつてさうされるのである、もし空氣が鼻を通過せずに、直に口から吸引されたならば、

女學生の一日



（其の五）編物

乾燥したまゝで這入るから、種々な病氣を惹起すのである、であるから口から空氣を吸收することは出來ても、唯一時的代用であつて、眞の生理的の感應を充分に代用することは出來ぬ、殊に吾々專門家の眼から見たならば、毫も正當なる代用をするものでない、鼻でなければ決して眞正の呼吸を營むことは出來ないと言うて然るべきことであらうと思ふ、

然らば此二つの問題があるからして、若も鼻に病氣が起つたならば、多くは此生理的の作用を營むことが出來なくなる、そこが病氣といふものは何であるかと云へば、生理的の作用を營むことが出來ないもの丶名であるといふのが盡して居る、

それで吾々の專門として居る所の鼻の病氣といふものは、前述の二つの作用をすることが出來ない、鼻の中が腫れたとか、或は腫物が出來たとか、種々の病氣が出る、兎に角病氣の原因や種類は千差萬別で澤山あるが、いづれの病氣に於ても、先づ第一に來るのが鼻が詰つて、呼吸を鼻ですることの出來ぬやうになつて來る、それから嗅覺が惡しくなつて來るといふものである此二つの感覺を失つた場合は、其失つた人々は如何なる影響を此家庭に及ぼすか、家庭と何ういふ關係を有つて居るかといふ事を考へて見たならば、是は實に深き關係を有つて居るので、即ち此二つの感覺を失つた人が、一家庭の中にあつたとしたならば、其家庭は非常なる不幸な結果に陷るといふことを認めて居る、

さて人間の身體には諸種の機關があるが、此鼻の粘液膜ほど過敏なる腦髓と密接なる關係を有つて居るものはない、それで此鼻の粘液膜の中には一定の病氣が起る、さうして二つの必要な感應がなくなつた場合には、それは腦髓にどれ程の關係を有つて居るか、實に其關係は大きなものである、風邪をひいて鼻が詰るといふ時には、殆んど何んな場合でも、頭が重くて、頭痛がして、何をするのも嫌である、平生大變勉强家であつて書物などをよく讀む、仕事をしても人に劣らず一人前にやつて居つた人が、頭痛

の爲に何事も打捨つて終つて、さうして仕事が嫌になつてしまふ、食事をしても食物に味がない、寢ても眠られない、實に不愉快な感じに陷つて仕舞ふ、僅の風邪で、鼻加答兒の爲に、鼻が詰つたといふだけであるけれども、斯の如く腦髓に非常の影響を及して來る、輕い風邪で鼻が詰つた塲合なれば、發汗劑でも服んで其內に治つて來れば、恰も夜の明けたやうになつて來るが、長き間鼻が閉塞して、口で呼吸をしなければならぬといふ樣な塲合になつて來ると、腦髓に來る影響が持續的になつて、長い間種々の影響を來すのである、此影響は老幼男女の別なくどの人でも同じやうに來るのである、故に修學者は放心する、記臆力を減ずる等の事があつて、常識が一向役に立たぬことがある、

前述の如く、此鼻の閉塞を始めると、非常に腦髓に交感し影響して、或人は非常に鬱憂の狀態になつて氣が沈んで來る、平生非常に活潑で、人に面會して話をするにも巧みであつて、交際塲裡に立つて充分に立廻つた人が、急に引込思案になつて他人に面會するを厭うやうになる、それから時によると興奮狀態で騷ぐやうになる人もある、平生は何んでもないが鼻が詰つて來ると、非常に短氣になつて、人を打つたり亂暴な事をするやうになる、急に一の發作狀の症狀になつて、精神に變動を來すことがある、それから世の中には隨分酒癖の惡い人がある、平生柔和な人が酒を飲むと、急に癇癖が强くなつて來て、他人を打つたり、くだをまいて見たりする人があるそれは一つには酒の中毒であるか知らぬが、鼻が詰つて精神の狀態が變つて來て、癇癖が高まり暴行をするやうになるのではないかと始終研究をして居る兎に角非常に神經の狀態が變つて來て、他人の暴行を加へるといふ事が往々あるが、もし一家內に老幼男女を問はず、さういふ狀態に陷つて居るものがあるつたならば一家の團欒といふ上に於てどの位影響を及ぼすか、和氣靄々たる希望を滿たすことは出來ぬのである、

篶子女王御婚禮の御式

久邇宮篶子女王殿下の壬生家御降嫁の事に就て、其後御取極めと相成りたる次第、及び御婚儀の式等に關し承はる處によれば、目下壬生伯爵が陸軍大學在校中にて實地演習のため、各地へ旅行勝ちなれば、本年十月下旬か十一月右御用の片付き次第に、御儀式を取行はせらるゝ都合にて、委細のことは當地の御別邸にて決定し、角田家令より一々殿下へ言上に及ぶ筈御用品の如きも、大抵は當地御邸にて整へらるゝことなれば、京都より御携帶相成るべきは、眞の御手廻り道具、軸物、茶器、文庫類と御召用時服など、長持にて十二三指し位のものならん、又た京都御出發の日取は、何れも御婚儀前十日位なるべし、畏役人一兩名奥女中兩三名御供申上ぐる筈にて、當地御着後御婚儀の了るまでは、依然皇族の御資格なれば、御降嫁當日の如きは、宮内省主馬寮より御召料として、貴賓用の御馬車を差遣さるゝ外御道中の守衞として、近衞騎兵六騎士官一名を差遣はさるゝ筈になり居り、大禮の御盃事の了ると同時に、守衞兵の指揮官まで、無事御婚儀の濟みたる由を報告すると同時に、玄關に整列せる騎兵は、一齊に最敬禮を行ひ、歸營の上隊長へ御婚儀濟みたる由の報告を傳へ隊長より聯隊長へ聯隊長より師團長へ師團長は更に侍從長迄該報告をなし、侍從長は改めて陛下へ奏上し奉る順序にて、之にて全く御儀式了る都合なりと、尚ほ御降嫁濟になれば、宮家よりは直ちに『君號』と云へるを賜らせらる、是は殿下御降嫁後の稱號にて臣下の者は勿論、婿君よりも御名を呼ばるゝことなく、常に君樣と呼ばせらるゝ次第にて、決して奥樣又は其他の名號を用ゐさせらるべきものにあらず、御婚儀は固より古式に則らせらるべく、伯爵家の家風もあり、幾分の相違は免かれざるべきも、略式に流るゝ樣の事は萬あらせらるまじ、尤も各宮家幷に華族の婚儀に就ては、東京の松岡とは子女史深く其禮法を究め居りて、一切の取り廻しを行ひ居ることなれば、這度も矢張同人に萬事御托しあるべく、式は小笠原流と御所風(内裡式)に幾分の西洋式を加味し、其中を取りたるものにて、御杯の間合には椅子を用ゐさせらるゝ模樣なり、御降嫁當日殿下の御服裝は、是れ亦た古式に則り、白羽二重十二一重に精巧地鳳凰に鶴の大紋ある袿を召し、緋の袴を穿ちて、中啓を帶せられ御髮は下げ髮にて古代の日本靴を用ゐさせられ、御婚儀の御杯事のめでたく濟むと、同時にお髮は直ちに丸髷に直し、御羽織着に召換へらるゝことなど、是迄の御降嫁の例に據らせらるゝ御都合なりと云ふ、

衞生と美感

醫學士　久保杏林

衞生といふことは、美を愛する心を以て勵行したいものであります、故に身分に應じて、美を愛する心を養うて、之に因つて衞生の行はるゝやうにしたいのであります、尤も身分不相應に、高尚優美なる美術を、日々の樂みに用ふると云ふことは、到底望み難いことで有らうと思はれますが、此節では段々歐米の美術が輸入されて、彫刻繪畫音樂等まで純粹に西洋風の美術が擴まつて參りましたけれども、眞に我々の精神を慰むるものは、却つて古くからの習慣で、見馴れ聞馴れて居るものゝ方が宜いやうに思はれます、元來我邦の人は上下押し並べて、美を愛する心には乏しく無いのであつて、今日の活計に追はれつゝある貧賤の者でも、夫れ相應に美を愛する心は貯へて居ります、縦へば此頃世間一般に致す花見などは、全く高尚優美の心で、咲き出づる花をのみ愛づるのでは有りますまいけれども、古來の習俗で春季百花の咲き揃ひます頃には花見遊山と云ふことがあつて、男女老若を問はず打連れて、これに出掛けるのは衞生上に取つて至極宜いことだと思ひます昔は神社佛閣へ參詣することは若い女子にも許してありましたが、濫りに物見遊山などに出ることは餘り能き事でないとして有りました、けれども併し、神社佛閣に參詣するのも、亦物見遊山に出るのも戸外に出で、散歩運動し、傍ら美を愛する心を利用して、衞生の助けにするので有りますから、我々の見る處ではどちらも昔からの習慣で、知らず識らず閉居の弊を破り衞生の爲にはなつて居るやうに思はれます、夫れ故前後の利害得失を省みず、濫に古來の習慣を禁制すると云ふやうなことは、往々衞生上面白からぬ結果を來すことがあらうと考へます、又花を愛づると云ふことは、啻に郊外にある花を見に出掛けるばかりでなく、如何なる侘敷住居をして居るものでも行詰りたる所にでも、多少庭園の形を設け

爲して居つて、其所に常磐木を植ゑるとか、或は花を作るとか致して樂むと云ふ風が有ります、從て緣日などにも、大道に植木物を持つて出ますと、之が相應に商ひになる、孰れも美を愛するの心が基となつて、陋巷に住むものといへども、多少淸鮮の空氣を呼吸することが出來て、それで衞生の助けを爲して居ることゝ思はれます、此風儀は出稼ぎする勞働者の留守を守る、家内の者には大に關係が有ると思ひます、又室內の裝飾にも高尙な處では、立花の法などが細かく組立てゝありますけれども、其法式を知らないものでも、一寸麥酒の空壜などの中に、桔梗や秋の折枝などを挿して置くと云ふやうなことを裏店住ひするやうな貧家でも致して居る、是れ等は皆日本人に天稟美を愛する心が有るので御座いまして、西洋人などは之を觀て大きに羨んで居る位のことで有ります、幸にして我國は土地の風景にも富んで居り、四季の花物なども殆ど絕えないやうな土地柄で有りますから、自ら斯かることが國民の常習になつて、大に衞生の助にもなると思ひます、此の景色を愛したり花見を好むだりするは、何う云ふ風に衞生の助けになるかと云ふに、先づ第一に精神を樂ませ、第二には充分陽氣に觸るゝことになります些かの空地でもあれば此處に庭形を設けると云ふやうにして、手狹の處に家の建て込んで居る處でも、自然空氣が流通し光線も這入つて來るやうな仕掛になつて居りますから、其點に於ても衞生の助けを爲して居ります、其外食物の料理を致しても、同じく美と云ふ思想が其料理法に加つて居まして大に目を慰める、其目を慰めるのが即ち食氣を促す原因になります、如何なる好い料理でも飾りが不充分で外見の見惡くいときは、食べやうと云ふ氣が起りませぬ西洋並に支那の料理などは、その食物實體には滋養分に富んで居ますけれども、外見の美しきことに至つては淡泊な日本料理の方が、余程勝つて居るやうに思はれます、是れも亦一の美の心を養つて衞生を助ける一斑だと思ひます、總て裝飾に遣ふ物は衣服

でも家内の器具でも、日本人の好む飾りは皆淡泊なやうに思はれますが、決して西洋人の好むやうな装飾の眞似をしても、習慣上目馴れぬものは、直接に衛生上の利益にはならないだらうと思ひます、矢張り我邦で行はれて居る所に装飾を用ふれば、それで目を喜ばせ、精神を慰めて、是まで精神をつかひ、身體を使つて疲勞して居るものが、氣に叶つた所の装飾を見ると、精神の疲れも身體の勞れも忘れて、再び活潑な動作も出來るやうになりますから、美と云ふものが、精神と、身體の草臥を休めるのに、最も宜いことで有ります、又體の美貌と云ふことに就ては、近頃體育の說が廣く行はれて來ましたから、我國の人は體格が少にして、此儘にして打捨て置くと、益々からだが少さくなつて仕舞ふだらう、それを改めるのには、先づ衣服の製作を改めたり、或は食物の滋養分が足りないから、滋養物を多く食ふやうにせねばならぬと云ふ說が行はれて居ますけれども、衣服を替へたり、食物を變へたりして、之に由て果して我々のからだが希望の如く大きくなるものだが、何うであるか、之れは未だ確かに保證することが出來ませぬ、からだは少さくても、恰好が好ければ決して害は無いもので有ります、恰好の好いと云ふのは、即ち體の美貌を備へることで、からだの總ての部分が能く平均して、權衡を得て居るのであつて、四肢も頭も胴體も大小好む工合に美術的に權衡を得て、脂肪の發生も、筋肉の發生も充分に過不及の無いやうに、調つて居れば姿が美になつて、而して動く時分に其運動も亦矢張り輕捷優美になります、從來はからだの瘦て細い構造のものを以て、婦人などでは身體恰好の美であると考へて居つたのは大きな間違ひである、併しながらからだが大きくて肥滿して居つて、動作も稍々石骨なるを以て、衛生上の美人などと申す說も有りますけれども、婦人などのからだは餘り大きく肥滿して居つて、其起居動作が餘り不器用なのは、美と云ふことに背くだらうと思ひます、からだは小さくても、總ての部分が平

均して居つて、而して疾病が無ければ意の如く手足が動いて、温雅靜粛なる動作が出來るだらうと思ひます、是れが眞の衞生美人で、是れまで人が衞生美人などと唱へて居ますのは、不恰好で、どうも少し美の眞面目には當たるまいかと思ひます、男子に向て、言ふ處の體の美貌は、又少し趣きが變つて居ますけれども（これは此雜誌に載せる必要が無いと思ひますから、男子の方は省きます）すべて美と云ふことの思想は、男女共に必要で有りますけれども、特別女子の方には美の精神を缺いては、衞生にも其他の事にも不都合だと思ひます、何故なれば衣服にも食物にも室內の裝飾にも、皆悉く美の精神と云ふものが、加はらなければならむのであつて、此衣食と家內の裝飾などの事は、專ら婦人の職業であつて、若しも其婦人に美の觀念が缺げて居つて、家內も不潔で取散らしてあつたり、或は身分相應の裝飾などがなかつたり、食物にも心が用ひてないと云ふやうな有樣では、一日勞働して外から歸つて來る、主人に取つては、甚だ不愉快のことで有らう、夫が爲に天性己の愛ずる美の心を滿足さするためには、家に歸らずに外で遊んで來ると云ふやうな、極く面白くない風儀が起る、聽く處に依れば、近來外國人の勞働社會などでは、就中其勞働者の妻となるものに、相應の美の精神を養はせて、之に因て勞働者が終日働いて自個の家に歸り、一家團欒の樂みを得るやうにしたい、此樂みがないと、つい家に歸らずに酒樓などに登つて、終日得たる處の勞銀を消費し酒色に耽ると云ふやうな、不養生の事を醸し、家內の者共は飢寒に陷るも之を顧ず、夫が爲め國家の生産力を減じ、經濟にも惡るし衞生にも惡いと云ふ處に氣が付いたに由つて、頻りに勞働者の妻などにまで美の精神を養はせると云ふことを言つて居ります、高尙な地位の人には勿論、女子敎育の中に、此美を愛するの精神を養はせ、下つて卑賤なる者と雖も、亦其身分相應に美の精神を養はせると云ふことは、衞生の爲國家經濟の爲至極宜いことゝ思はれます、

石本次官の家庭

◎中將の繪畫趣味　謹嚴にして淡白なる軍人個有の性情に富まれし中將は、是れと稱すべき道樂なき中に、唯一つ我國在來の繪畫趣味を有し、日常此の嗜好には違ぬきし事なく、書齋は素より、應接間杯は著名畫伯の揮毫をもて裝飾され、目下は激務に寸暇を得ざる折柄とて、稍や其の研究を控へらるゝも、戰爭前にありては、毎日曜屹度上野公園なる諸種の繪畫展覽會に臨み、批評を試むるを樂みとせり、然れば軍人社會は勿論、一般素人中にて此趣味に篤きは、最も珍とせらる、中將は元と姬路藩士酒井雅樂守の臣にて、安政元年丸の內龍之口の舊邸に生れ、當年五十三歲

◎隱れたる賢夫人　中將夫人名を越子(四十)と呼び、舊金澤藩士安達松太郞の妹にして、曾てお茶の水高等女學校に學び、今の木越第五師團長夫人貞子、遠藤海軍少將未亡人倉子、吉武郵船會社重役未亡人照江子、大山伊太利公使夫人、內田紐育總領事夫人陽子等の貴婦人は皆當時同窓の友なりしが、越子夫人疾やく學識超凡、技藝堪能をもて令聞あり、卒業後才媛の譽れ高かりしが、程經て石本氏に嫁し子女を儲くるに至りしよりは、絕へて世の交際場裡に遁り、孜々家庭整理に勉め、只管良人中將の後顧の憂ひなく、君國の爲め盡瘁せんことを祈り、夫人自らは敢て高貴の生活を願はず、極めて質素に、且つ學生時代より嗜み深かりし音樂其他を贅物として廢止し更ふるに子女の撫育薰陶を以て畢生の事業と堅く膽に銘じ、爲めに拮据心膽を凝らし、日も尙ほ足らずと努めらるゝぞ、誠に輕薄の風にしみ行く世の奧樣が鑑たるに足らんなり、

◎親密なる兄妹　中將の令息令孃七人最と壯健に成育され、長男惠吉(十九)は附屬中學校卒業後早稻田大學に入り、次男憲治(十八)は同中學を卒へ、正則英語學校に學び、令兄と共に過般一高の入學試驗に應じ、三男貞三(十七)は中央幼年學校豫科に在り四男四雄(十四)は附屬中學一年に五男五雄(九ツ)は同小學尋常三年に長女綾子(五ツ)は麴町小學幼稚園に遊び六男六哉(四ツ)は常に慈母が溫き懷ろに育くまれ斯かる數多き幼少の兄妹も有繫溫嚴宜しきを得し、夫人の膝下に養成せらるゝことゝて、喧嘩などは更らになく兄は弟妹を扶け弟は兄を敬ふて、其美風は此の可憐の少年少女の間に認らるゝぞ床しき限りなれ

◎父君に似ぬ子　昔より親に似ぬ子に鬼つ子とて、子は自ら親の爲す事を好み眞似るが常なれど、這はまた夫れと異り令息惠吉、憲治二氏は極めて軍職を好まず、長兄は熱心に工業家たらんと希望し、遂に父君に恐る怖る其由云ひ出でしに、叱責せられんかと思ひきや、頗る其熱心を賞し、總て目的等は各自由に任せ、些の干渉をも與へられず、引て風紀品行以外の事は、此家庭に於て全然放任され、只管天賦の才能を發輝せしむ可く苦心せらるゝは、少しく異彩を放つ處なり、

乳の話

其八 病乳の話

農學士 牧 忍

牛乳は黴菌の繁殖に適する養分、水分、温度などをすべて備て居ますから、もつとも腐敗し易い者です今病乳の重なるものを述ぶれば、次の通りであります、

一、青乳 之は乳房より搾り出した當時は完全な牛乳ですが、暫く立つと、緑色又は青色に變るものでありまして、其色素は青色「アニリン」です、此病菌は或る黴菌が牛乳中の乾酪素を分解して繁殖し、其青色色素を生産するによるものです、

二、赤乳 之は食物中の色素、又は血液中の色素が乳腺中混るによるものです、血液が乳の中に混るのは血液が直ちに乳腺中に入るからです、

三、苦乳 之は食物の中の苦味性のものが、乳の中に現れて來るのと、或る醱酵素の作用によりて、乳の成分が種々の變化を受けて分解して、茲に一種の苦味性ある成分を生ずるとに依るのです、

四、水乳 之は青白色を帶んで居まして固形物の割合、特に脂肪の割合が少いです、之は胃弱の牛、若くは飼育の不良な時に生ずるものです、

五、酸乳 之は新鮮な牛乳であつて、著しく酸性を帶んでゐます、其結果として暫く立ては其牛乳中の乾酪素は、悉く凝固します、之は主に夏期狹い畜舍に於て、不潔や濕潤から來ることもありますし、或は消化器病に原因することもあります、

六、粘乳 これは牛乳が著しく粘原となり、これを指に浸して垂せば、點滴をなさずして、糸を引やうになります、之は或る黴菌に作用に因て起るものですから乳房の中で既に此變化を呈するものもあります又搾乳後數時間にして、初めて此變化を來すこともあります、

裁縫のこと

島田好糸

裁縫の教場は、無論あかるいが宜しい、而して、讀書科などゝ違つて光線は、同じくは左からも右からもさす方が宜しいです、殊に裁縫は、場所を多く取るものですから、孰れも廣い間が必要です、其れで兩方に窓か障子があれば最も妙ですけれども、これは、教授の都合を申したので、裁縫は銘々の宅で、何時と限らず致すものですから、斯うで無くては、出來ないなど、云つてる譯にはまゐりませぬから、何處でも宜しいが、なるべくあかるい所を選つて致すが宜しいです、

裁縫用具、裁縫に必要な器具も、細かく云へば、隨分いろ〳〵ありますが、先づ、是非無くてはならぬものから申しませう、裁物板は、略しては、一室に一つ据ゑつけて置いて、あとは、銘々、敷紙の上で、仕事をする人もありますが、本當は、それではいけませぬ、銘々二人又は三人位宛に、一枚の厚板をひかへて、其上

女學生の一日



《其の六》 運動

で、くらべたり、筋をつけたり、何でもすることが出來るやうになつてるのが、極めて便宜です、そして、其厚板は、厚さが大凡二寸位、幅が一尺二三寸位で、長は、大抵四尺長の着物が其儘裁てるやうで無いと不便ですから、先づ長さ四尺二三寸はどうしても無いではいけませぬ、此厚板には、足を、爼のやうに打つのです、板の高さは、大人の膝が、ずつと、板の下へ入る位が宜しい、それで先づ、これを錯尺八寸と申します、高さのことは、學校衛生を説き成さる方から伺つたのです、そして、十分に申せば、教師の前には、大幅物が、らくに廣げられる程の、最も幅の廣い板を据ゑて置くが便利で、又た、綿を入れるにも倘様な、廣板の上ですれば、甚だ入れ宜くあります、板の木質は銀杏、かつらの如き、質の固い木が宜しい、狭い所では、餘儀無く、二尺一二寸の長の厚板を、同じ高さに作つて置いて、返物を長くして、裁つ時だけ此二板の厚板を、堅に繼ぎ合せて、用ふるです、然しどうしても、繼がないで用ふるに越すことはありませぬ、

一火熨斗、火熨斗は、目方四百貫目位の重量あるものにて成る丈け口の開きたるものを用ふるのが宜しいです、何故ならば、目方があまり輕くては、火熨斗のきゝめが少ないからです、

一針　針は木綿物を縫ふには、三の五號、絹物を縫ふには、四の四號を用ふるが宜しい、かつ我が法は、とぢ、くけ、ともにこの一種類の針にて致すのです、夫はあまり多くの種類の針を用ひると煩はしくなるからです、而しながら、未だ年若き小女や、手の馴れざる人は、木綿物は三ノ三又は三ノ四絹物は、四ノ三又は、四ノ三半位のを用ふるも差支はありません、

一指拔　指拔は稽古中は、決して金にて拵へたるものを用ひては不可、可成皮にて製したるものを撰ぶのがよろしい、夫は、金にてこしらへた物は運針上大變に都合が惡いからです、

一物指　ものさしは、通常用ふるものには差支はあ

りませんけれども、裁物をするには、可成二尺指を用ふる方が便宜です、何故ならば短かきものにては、手數も多く懸りますし、又誤りも多く出來勝だからです、

扨是から運針の法に取り懸りませう、先づこの仕事に取りかゝるには、身體の整へが第一番です、身體を整然と整へませんと、どうしても正しい仕事は出來ません、先づ、身體は、あまり屈せず、あまり仰かず、體の眞直になる樣に坐て、兩肱を張つて、兩方の手を同じ位に伸ばして、縫はじめるのです、而して、この身體の整へと云ふものは、只容姿のよしあしに關係するばかりではなく、醫學上から申しても、餘り身體を屈めるのは大に害がありますから、餘程注意しなければなりませぬ、

而して、身體の整へが整然と出來ましたら、是れから縫ひはじめるのです、先づ稽古には一番はじめに白の河内木綿の切二尺ばかりのものを二ツに折りて二分五厘位宛間をあける目分量で幾筋も縫かへすのです、而して、針を持た右の手と左の手との間に成可八寸位隔つて居る樣なつもりで縫はぬといけません、何故なれば、餘り針を持たる手と切を持たる手との間が近かすぎては、切が伸ませんからどうー縫目が正しくそろひません、しかして稽古中は、一日に凡そ二時間位宛は必らず毎日縫ぬと不可、如期して毎日稽古をしまして、すこしは針の縫目が揃ふやうになりましたら、木綿物の縫ひ返しか何かのやうな極く麁末なものからそろ〳〵と縫ひ始めるのです、尤も世間には、稽古中は雛形を以て縫せるのも御座いますが、可成は雛形よりはどんな麁末なものでも宜しいから、實物を以て、縫ひ習ふ方が宜しいのです、何故なれば、雛形はほんの儀式的のもので、雛形では出來る樣になつても矢張實物に取りかゝると仕事の樣子が變てきて何の役にも立たぬものです、又へらを使ひますには、なる丈けそつと附るのです何故なれば、強く付ると地質をいためるからです、

裁物　裁物をするのには、先づ、たつべき反物をひ

ろげて疵などありやなしやを能く〳〵點檢、もし疵などのありし時は、其の疵所を成る丈け目に立たぬ所に裁ちこむ様に致しますのです、さて又其の反物の、耳のつれたるものは、火熨斗にて能く〳〵のばして裁つのです、又切の耳のつれたるものは、剪にて二寸位宛間を置てきるのです、而して、地がちやんと出來ましたならば、裁板の上にて、袖丈、身丈、襟丈おくび等をつもり合せて裁切るのです、且つ反物を裁つ前には、たとへ身や耳のつれぬものにても絹物は、必ず一度は火熨斗をかけてから裁つのです總て、裁物は、一旦裁ち切たる以上は、又繼合せることの出來ないものですから、不馴のものは猶更のことたとへ如何程熟練した人でも能く〳〵つもり合せて充分注意に注意をした上で切りはじめないと、後にて臍をかむやうなことがないとも限りません、

洋食の料理法

霞袖女史

スープの製法

肉吸汁を調製しまするには、其元料の撰方が肝要ですから、之を能く心得て肉を買ひ求めねばなりません、料理用にするスープ肉は、腹部の脂肪に富む肉を用ゆるが宜しく、また病人に用ふる肉は、足部の股肉脂肪の少なきを用ふるのです、小牛は水分が多く滋養分が少なく、鳥類は家鷄(俗にツメと云ふ)老鷄を用ふると價も安くて宜しい、又鴨家本鴨の類は匂い惡しくして、滋養分もすくないから、スープには、適しません、扨其製法は肉百匁を十切ほどに切り水を六合餘り加へて、最初は強き火にかけをけばだん〳〵カスが浮きあがります、此のカスを金網杓子にて取除き、カスの出止むを見て、人參少々に鹽を入れ、鍋蓋を八分通りにして火氣を極弱くし、除々と煮て中途にて玉葱(日本葱にてもよろし)少々加

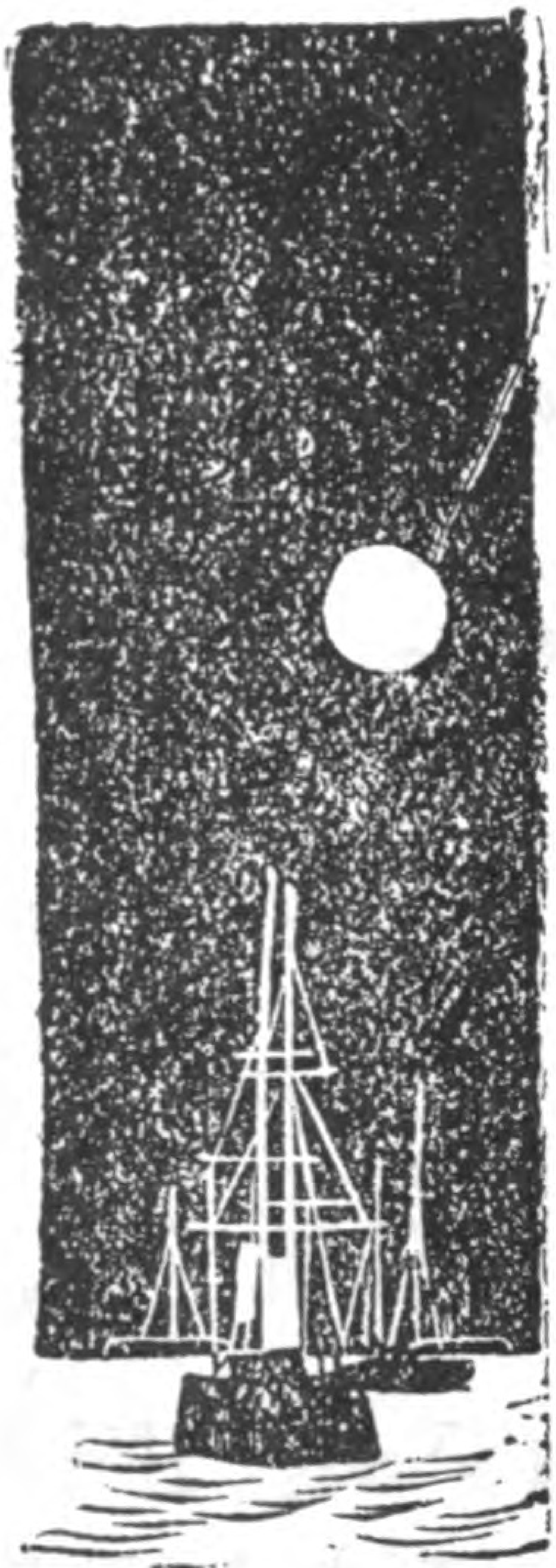
へ、四時間以上五時間以內徐々と煮るのです、而して、此間に肉汁を二合程煮つめるのです、又餘り煮つめ過ぎた時は、湯をさしても宜しい、斯くして煮終りたれば、鍋をおろし、汁に浮きたる脂肪を金杓子にてすくひ取り、丼の中へ口にて向へ吹落すと脂肪は丼の中へ入り、清汁が殘るのです、この清汁を絹ふるひにて漉すと上等のスープが出來ます、而して其殘りの肉へ水を入れ、弱き火にて煮て漉し置き、煮物汁燒肉汁に用ひて宜しいです、

スープ種の製法

人參、玉葱、大根等を極細かく角切(シチン切と云ふ)にしてスープの脂肪(牛酪にても宜し)を鍋に少々入れ、解かして野菜を入れ、胡椒を少し振りかけ攪き交せたる中へスープを入れ、温火にて除々と煮て、種の柔かく成りたるを度とし鍋をおろし前の如く脂肪を吹取るのです、

シチウ煮

此料理に用ふる肉は、犢か、若い鷄が一番宜いのですけれども、若しも、此等の肉が得られない時には普通の牛肉の內ロース、外ロース肉を撰んで宜いのです、其切形は、總ての肉を七八分角に切り、鹽と胡椒とをふりかけ置き、鍋に牛酪を入れ、充分解かしたる中へ人參と玉葱とを厚切りにしたるものに、肉を雜せ、鍋に入れ、弱き火にて攪き交せながら煮りて、肉の色の替るを度として、其中へ饂飩粉を少々加へ、粉の色の替りたる頃に、せり酒か、或は葡萄酒を少し加へると、一層味の宜き物です、扨て、其中へ肉汁を少しづゝ入れながら攪き交せて、充分汁を入れ、極弱火にて除々と煮るのです、さて又、其中へ馬鈴薯の皮をむき去り、適宜に切り、水に入れて灰汁を拔置き、夫に西洋人參の皮を去り、竪に四ッ切り、或は、六ッ切にしたるものを加へ、少し煮て、又玉葱の四ッ切り、或は六ッ切にしたるものを混じて煮るのです、斯くて此品々の內、早く煮えたるものは取上げ置き、總ての品々煮終らば、汁を毛水篩で漉して、器物に盛り食膳に供するのです。



小説



意外

駿臺女史

町を出ぬけて半里許りも往くと、だら／＼と下り小坂があつて、其下り口の右側に松が一株高く聳えてをる、一枝垂れて其が路の上を蔽ふてをるあたりは、ちいとした見えではあるが、風流ばかりでは推せぬ世の中、それが夜になると通行人の物淋しい感じにもなつて、一本松といふ場所の名にまでなつて居る、その小坂を下ると二三間の橋が澤へ架けてあつて、此夏とうと何處のものと知れないでしまつた溺死人の標札が雨曝になつて倒れかゝつて居る、それから向ふは片側がぶッ裂いたやうな斷崖で、路の右側は田や畠である、朝な／＼美事な露の玉を宿した芋の葉も、早や一霜二霜を受けて、今は黒みかゝつて萎れ始めてをる、苅殘りの稻には赤溢た蝗が力なげな跳ねかたをして、其處らあたりにコロ／＼と鳴いてをる蟋蟀と迭に老を果敢なみて居るが、雀ばかりは飛びにくさうに肥太つて豊年の舌打頻とやつてをる。

此處は馬頭の宿へ三里の道筋で、どちらから來ても双方一と坂下りての窪地で、其間が凡そ十町もあらうと思はれる、向ふの坂を上ると路を狹んで松並木がある、松並木外れに家が五六軒あつて、中には腰掛茶屋もあれば、何かの堂も建つて居て、大鼓の音も時々はする、晝のうちは野の人山の人、さては荷馬車の

午後なども可なりにあつて、別にもの淋しいといふ氣もせぬが、然し暮れてから此松並木を通るのは決して好い氣味はせぬ、つひ昨夜の事であるが、一番向ふの新しい家の嫁のお里といふが、昔出染の腐れ緣にでもほだされたのか、主人の留守に不義なことをしたとやらで、姑にひどく言懲らされたのを耻かしと思ふてか、心外と思ふてか、四五丈もあらうと思はれる直ぐ其裏の斷崖から身を投げて、陰府の大蛇が吞まんず口を開いて居るやうな岩と岩との間の淵へ、二九や二十の花の身を沈めて、今に其亡骸が見當らぬといふので、今朝からの大騷となつて居る、兎角曰ありがちな通路なので、夜になると人通りが殆どないのである、

一本松からだら〳〵下りて來て、此松並木へ上らうとする坂の手前の、崖の出鼻の陰に堀立小屋が一軒ある、其裏の洞穴は、此小屋の立つまでは、そこが乞食共の寢床であつて、何時通つて見ても一人や二人が淡暗い中から眼ばかりぎよろり〳〵させて居ないことはなかつた、

まだといふ間に早いは秋の夕暮で、買物に出た村の人も最う大概は歸つて、ほろ〳〵醉の上機嫌がよたり〳〵と向ふからござる位なもの、見れば那珂川越に森陰の在所から、すツと幾筋にも夕炊の煙が、淡ばんだ暮の中を搔分けて昇つて居る、照りつゞいた此頃の日和も、もう長くはと思はるゝ雨氣らしい怪げな雲が、空低うところ〳〵にぶら付いて、高いところは白い川原雲で塞つて居る、折々冷やつたい嵐が颯と吹いて來て、後の小藪が何か囁き出すので甚だ穩かならぬ心持を起させる、見る限りの秋の夕の冷寂が彼の一本松のあたりから送り出されたかのやうに感せられて、どうも目先に何かちら付くものがあるやうな氣がしてならぬ、瀬を下る川音が澄んだ空に透つて、それが亦何んとなく淋しい氣を誘ふのである、

今しも崖陰の堀立小屋に灯が付いた、淡暗いランプの火影にすかして見れば、小屋の鼻先に一寸した臺を

置いて、其上に淺い箱蓋が、二ッ賣れ殘りの饅頭が十もあらうか、今一つの箱には甘藷の煮たのが少し許りある、その上には草鞋が五六足ぶらりと吊してある、樵藏とか言つた主人は今そこには見えぬが、今春から病みつゝけて、秋風の立ち初めた頃から漸く癒りかけて、少しは働けるとは言ふもの、、草鞋二三足が精の山である、寢室も居間も只一掌ばかりのところへ、垢染た薄い布團を延べて、四歳ばかりの娘の子を寢せ付かして居るのは樵藏が妻で、三十五六歳にもならうか、貧の病は其蒼ざめた顏色に知られる、寢せ付かされて、娘の子は、どうしたことやら今夜はなか〳〵眠りつかないで、いろ〳〵と母に話しかけて居る、

『おッ母やん、おッ父んは………、

『好いから早く寢るの……明日また饅頭蒸して遣るから……、

『いや、おまんぢゆうだ、お衣裳でなくッてや、あの赤いの……、

日中ほど通りがゝりに此小屋で休息んだ夫婦連があつて、五か六歳にもなる娘の子を着飾つて連れて居たのである、子供心にも羨ましと見たるそれが、今寢物語に娘が口に上つたのであらうけれども、樵藏一家は今我子に思ふ衣服を着せられぬといふ位のことではないのである、樵藏が病氣で食込だ果は、先祖傳來の家屋敷を離れて堀立小屋の住人となつたのであるが、貧の神はまだ〳〵窘め抜うとするのである樵藏が今日の不在も金策の爲であつて、彼は程遠からぬ、町に耶蘇敎の先生が居ると聞いて、それを訪問に出たのである、兎やかう思を砕いた夫婦が最後の思案といふものは、それであつた、兼て噂に聞いた耶蘇の信者とやらになつて、其代り金を貰ふて來やうといふのである、

首尾や如何にと妻は獨り胸を痛めて居ると、今日に限つて娘の強請が、たとへ無心にもせよ、頑是ないに

もせよ、胸を刺れるやうに辛い、
『よし〳〵、お衣裳か、おッ父んが町へ買に往つたから……、
娘は頗る滿足したものと見えて、いつとはなしにすや〳〵と眠に入つた、實に罪のないのは小兒である、夢は早や赤いお衣裳にくるまつて居るのであらう、母はそつと脱け出て、少しばかりの仕事を濟して戸口へ出て見廻しながら、
『どうして斯う歸りが遲いかしら……、
と呟きながら戸を締めて家内へ入つた、禪念寺の十時の鐘を遠音に聞いたのは、暫く前のことで、もう十一時にも近からう、小屋の傍の小流は相も變らずちやら〳〵音させて、沈々と更け行く夜の靜秘をいぢくつて居る、
少間過ると人の駈ける音が大地を傳つて枕に響いたので、不斗目を覺すと同時に、どさつと來て戸口へぶつかつた、
『た……助けて……早く此明けて……女の聲である、息捲ながら戸に閊搔き付いて
『よツ、早く、おかねさん……、
マッチを擂る音が幾度もして、やつと障子が明るくなつた、おかねと呼ばれた權藏が妻は内から、
『誰ーどうしたの……、
之ぬ急込んで居る、戸を開けると兩人が顔は手ランプの光に照合ふた、外なる女は轉がるやうに飛込んだ儘、其處へ倒れて仕舞つた、内なるおかねも阿ッとばかりに飛退いて暫は無言である、昨夜身投をしたといふお里が今其處へ飛込んだのである、

やう〳〵本性づいたお里を起して介抱しながら、見れば襦袢一枚、

『先、どうして助つて來たの……、

ほつと息つきながらお里は、

『おー、よかつた、ほんとに生きた思はなかつた……、

『さうだらうともね、よく先助つたのう、今日は一日川筋を捜索して見たが見えないので明日もう一日捜索して其で見付らなければ、空葬式でも出すと言つて、親ごが何んぼう悔んで居らしたか、先なによりだつた……、

お里はまだわな〳〵と戰ひて、頻と戸外に氣



を置きながら、

『おかねさん、こんな酷い目に遭つたことはなかつたよ……』

『さうともね、それだから川なんぞへ……』

お里は遮りながら、

『さうではないよ……聞いてお呉れ、あのそれ一本松の橋の下から……』

話の出合さぬのも其筈である、お里は今自分の身上に如何いふ噂が立つて居るか少しも知らぬのである、夫の留守の不義といふのも、それは姑との不折合から出た冤罪で、それを痛くたしなめれたので、悔しさの餘りに一途に思詰めて裏の崖から身を投げんとしたのであるが、又思ひ直して十里が先の叔母が許へ往つて、どのやうにか身の振を相談しやうと思つて、下駄を草履に脱ぎ代へて其儘夜の明



けぬ間に出發たのである、だん〳〵行くうちに、設令覺のない罪を負せられたにせよ、かうやつて外出をするといふことは善くないと氣が付いて、いつそ詫をしてと思つて又途中から引返したが、まさかに眞直中にも歸りかねて、態と夜にして怖いのを忍び〳〵一本松の橋へ來ると、

「おかねさん、そこから眞黒に顔を隱した男が出て來て……

お里は何も身戰ひしながら

「この通り裸に剝れたの……

と言ひつゝ又泣伏した、おかねも聞いて初めて解つたお里が遭難の始末、有合の繿褸に一時の身を凌がせて、お里を連れて松並木の其家へ送り屆けた、翌日となつてお里の夫がわざ〳〵禮に來て、二升樽の詰切一本と熨斗をかけた紙包とを差出した、樵藏は手をふるはせながら絕つて辭退をしたが、聽入れられぬので、垂頭幾つもして頂戴に及んだ、

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

たとひ金はしさにもせよ、はじめて敎會の人になり、人たる道を聞いて見ると、さすがに我身に耻づる所があつたか、それから二三日經つて樵藏は松並木の家に懺悔に行つたが、其罪は何であつたか。

仇あらし

海洲漁郎

明日は雨じやと女共が夕の畔の立話し、見やしやんせ彥太郎雲がと指さす後の山は高く背尖に聳え、見る〳〵湧き出る犬の子雲の奧深く鎭まり在坐は、山の下十七ヶ村の氏神大巳持の大神は、聞も畏こし春秋二

度の峯入には、町在の男女共が樣々の願ひをかけ、縁日商人は思はぬ利益を得るとかや、木立ものふりたる一帶の麓は溪水の流れ清く、柴垣廻らして豊かならぬ村はなし、中にも添田、梅田、增田と續ける邊りは、昔床しき家も多かるに、添田の入口に一木、椈高く茂りて金富家の礎は千代も動かじと、石崖高く重ねたる瓦葺の土藏五戸前、一が米藏、二が金藏でと、里の子守等が手鞠唄にまで唄はれしは、先代權之丞樣の世盛、吉い事は長く續かぬもの、滿れば缺くる浮世のたとへ、今の靜雄樣が隣村の財部樣の姉娘の操樣をお嫁に貰はれし其の翌春、大御新造樣は急性の腹膜炎とかにて一週間經つか過ぬに歸らぬ人の數に入られた、其の翌年の春、連子して後妻に來られた御新造こそ、幸か不幸か其の年の秋、大旦那は先の御新造と同じ腹膜炎とやらにて、彼の世の人と成り給ひしとき、御新造の歎き方が何だかもの足らぬ樣に思はれたとは、其の頃村中の評判であつた。

若旦那の靜雄樣といふは日出銀行の取締役を勤めらるゝ由、少し瘦ギスではあるが、脊丈高くして色白く適はれ當世風の若紳士、其の上性來の親孝行者にて、是迄家内に波風など起ちし例しもなく、繼母に對しては善惡ともに唯々の二ッ返事、若御新造の操樣も夫に感化されたか、此れも性來の持前が、正札付の善人、姑を大事に夫には貞節、此時節柄には稀なるお嫁樣じや、とはお出入するもの等が申せし事もはや今は昔の夢ときえぬるこそあなうたて。

憶、妾程不運不幸のものは又と二人とはあるまい、お母樣はといへは實のお母樣ではなし、實のお母樣は四ッの春お死去なり遊ばしたので、お顏さへ確とは覺えてはいない、乳母の話すには、それは〳〵よい御方であつたとか、それに引かえ今の繼母樣は、お春さんと何程腹が異ればとて、なさぬなかなればとて餘りのお仕打、それは仕方もないが實のお母樣の事までも種々と仰せられた時なぞは、實に堪られなかつた

漸く此家に嫁付て來て、先づと思ふ間もなくお父樣はお死去なり遊ばした、せめて一日でも御介抱をと思つたがそれもできないでしまつた、だが、靜雄樣はあんなにおやさしいけれど、姑樣は如何してあひなに邪慳になされるのであろう、素より足らぬがちの妾、お氣に召さぬ所は斯せよ彼せよとお隔意なく仰しやつて下されば濟むものを、二言目には出てゆけと仰せられる、其上繁子さんもあんまり、如何に足らぬがちとはいえ、云はゞ妹の身でありながら、お姑樣と同じ樣になつて……、何の因果で此樣迄も不仕合な者であろうと、越方將來を思ひ出し、思ひ廻せば身も世もあられず、嚙絞る御紹の袖の上に、自然とはふり落る熱き涙一滴二滴三滴、折柄若御新造樣、御隱居樣が召しますると、例の氣のない下婢のお三は、次の間より申上げぬ。

操は慌たゝしく眼を押拭ひ、お三に怪しまれて極りわる氣に顔を脊けて、唯今參りますと申上てお呉れ。涙の痕を見られてはとは思へども其の隙さへなければ、そこ／＼に顔押ぬぐひつゝ急ぎ姑の居間に至れば姑は例の邪慳な聲にて、いとうお顔の色がお惡い樣だが、何所ぞお加嫌がわるいかな、はい少し腦が、今の若いものはヤレ腦病だ頭痛だと、僅しの病氣を大相らしく云ふてぴい／＼して、私を御覽なさい、若い時から未だ二日と臥た事はないが、腦病位で臥むなんぞは尚更した事がない、腦病位のものは何か仕事でもすれば直に癒つて仕舞うものだよ、お前も何かしてお覽なさいといへば、繁子までが口を出し、でも姉樣は其の樣に御病氣らしいお顔つきでもない樣ですと、傍らよりの差出口、其の癖自分は一寸頭痛でもすると高枕で、ヤレ御醫者樣に來診を乞ふやらの大騷ぎをするのである、折柄玄關に當り、御歸りーと車夫は靜雄殿の歸宅を報せり。

洋服のまゝ繼母の居間に來られ、唯今歸りました、との言葉も未だ終らぬに繼母は、操さんが御前の歸り

をひどくお待兼だよと、言へど靜雄は輕く、ハヽヽ、左樣でしたかと柳に風と受流しつヽ我が居間に歸り給ふ、後ろに續きて操の行んとすれば、またつひて行く、少しは妾の所に居て、妾の用事をして呉れてもよさそうなものと、言葉の針、操どのも立つにたヽれず、いえ左樣では御座りませぬ、御用を致します程に何なりとも、ハイ今はありませぬ、又有る時に御頼み致しましよう、と云はれ漸く姑の前を退り、夫の居間に來れば、早くも夫は和服に召更へられて机に倚り給ふ、此れは眞に恐れ入りましたと、操の手を仕ゆるを見て、操お前もさぞ辛ひだろう、聞てゐてさえ辛い、何も彼も知らぬではないが、萬事僕に免じて辛抱して呉れ、聞いてゐてさえ身を削がるヽ樣に思はるれば、直接に謂はるヽお前は辛いだろうな、此の間もあれ程の惡口雜言、腹は立ども義理ある繼母、言過して爭ふとも詮ずれば此方の負、此れが實の親なら少し位の逆ひは出來れど、義理ある中は其れも出來ないし…………お前も僕も繼母で辛ひ思ひをして來たのは同じだからなあ……、よく存じて居ます、此れと云ふのも皆妾は足りないからで御座いますと、はては淚。

繼母の此く靜雄殿夫婦に辛く當るのは、己の姪に當る百合子を靜雄の妻にと思ひしを、靜雄殿の操をめとりしより、操へ辛く當る事となりたるなり。

何程御自分の姪が御氣に入ればとて罪もなき操を無理に逐ひ出さむとは、扨て〳〵情けなき繼母上かなと靜雄どのヽ心配一方ならず、實子の繁子と云ふは花なら今が蕾鬼も惡からぬ今年十八、若も靜雄が操を出さぬなら、坊主惡けりや袈裟迄の例、毒食はヾ皿まで靜雄とも〳〵おひいだし、繁子に聟養子を取り、金富家を相續させむと恐しい謀計、それ故に最愛の妻に辛く當らるヽを見ては、何程お人善でも何條氣の付かざるべき、それは疾くより知りては居れど、如何に最愛の妻とはいへ、家に係はる繼母の奸計、悉く言

明しもなりがたく、靜雄どのは身を削がるゝ思ひなり、然ればとて表立て八釜敷いへば、結りは自分の恥辱のみならず義理ある繼母に對する道にあらず、されど此の儘に默して居ては、結局が如何になるやら、此等分別なき靜雄にはあらざれど、此の事に就ては心中亂れて宛然麻の如く、生ながら無間地獄の苦悶しみよし繼母上が如何に企まるゝとも、金富家の相續權ある吾々二人唯々として家出すべきにあらず、されど此の儘には納まるべくもあらず、如斯な事なら一層十六の秋肺炎に罹つたとき死んで居たらよかりしものと、遉がの靜雄どのも今更ながら氣迷いて、浮ぶは愚痴ばかり、エヽ馬鹿な男子たるもの是位の事に齷齪して精神を勞ふものか、繼母上が如何に企まれようと心を大きくしてと、思ひ返しては見れども、又湧き出る愚痴に戻りては、兎角に好思案も出ず、噫、如何とせんと思へば慮ふ程心は闇、操、僕の心中察して呉れ、辛いだろうが辛抱して呉れ、あゝもし、何の事、もつたいない辛抱の何のと良人から其の樣なことをいはれまするとと、と、堰止め〳〵耐へて胸一杯に餘る涙、堪りかねて操は其所に泣伏せり、奥には其れと知るや知らずや、邪慳の繼母が操、操と切りに呼び立つれば、操は眼を摺りながら出て行く、嗚呼又かと靜雄どのゝ吐息をもらしたまふも哀れ、

もう何時だえ、妾等には御飯は食させないのかえ、お前は靜雄の所にクッ付て居れば其でお前のお役目は濟むのかえ時間で云へば僅か十分か十五分遲くなつたを小楯に取つての小言は始まりぬ、如何致しまして左樣の事が、いえ左樣であろう、いえ決して左樣の事は、なにいゝえとは親にむかつて又してもの口答へ不屆もの、わゝ、妾しが惡う御座ります程に、どうぞ御容赦をと額を疊に摺つくれど、邪慳の繼母赦すべくもあらず、私を乾殺せるものならば乾殺されましやうと、何所迄も底意地惡く喰ッて掛る、靜雄どのは繼母の聲の餘りに高ければ、操の上を氣遣ひつゝ入來たり見れば此のしまつ、僕が用事を命じたために遲

く成りまして、其なれば僕より御侘致します、操、早くお前も手傳てお三に膳を運ばせたらよからうとの夫の言葉に、姑の前を退り、襖の蔭より夫の方を三拜九拜、有り難涙にむせかへれり、軈て膳は三ツ並び上座には靜雄どの、次は繼母、次は繁子と云ふ席順、繼母は膳部を見廻し、又同じ樣な美味くもない、此れは頗ぶる馳走、然もお繼母樣の大の好物、とは靜雄どのゝお言葉、操は次に退き、再び來れば今御酒宴の最中、靜雄どのはお前も此所に來て一所にやればよいにと、いひたまひしかど姑の手前を憚りて引退ぞく、三度目に來りし時、丁度御飯もすみし處、お三の後片付を手傳はんと、膳を持ち庫裡に退らんとする途端、如何したはづみか膳の上にありし德利廊下に落ちて眞二ツ

事あれがしに待構へ居る繼母は此の音を聞くなり、廊下に辷り出で、操チヨイとお待ち、何をしました、操は繼母の此の言葉に哀れ死せし心地、ハイ、ハイもないものじや、何に腹が立ば德利を抛た、サ、其の譯聞う、何程私が靜雄となさぬ中とてお前迄に馬鹿にされて堪るものか、エヽ口惜い腹の立つと氣相變えて狂ひ懸られ、勿體ない如何して左樣の事を、いえ人を馬鹿にするのも程があると、一語は一語より尖く何が何やら口から出任せの惡口雜言、はては此のお多福め出てうせろと、下婢下郎も恥る言葉づかひにて取つて懸る、妾が惡う御坐ります、どうぞ御容赦遊ばして、と泣き〳〵賴めど、何條以て聞入るべき、お前の樣なものは此家には要らない、たとへ靜雄が何と謂はうが、一時も置く事は出來ない、サア歸れ、サア出て行け、出て行かねば出して遣ると、哀れ何の事操の髻を無手と摑むで引ずりかゝる、操は痛さ苦しさを堪へ忍び、只一筋に拜むばかり、いや親に手向ひする不屈者、いよ〳〵以て堪忍ならぬ、靜雄や此れだから私が常から氣に入らぬも當然ではあるまいか、サア今私の眼の前で見事立派に離緣をするか、但し、矢張女房に肩を持つ氣か、繼母が大事か妻が大切かと、疊かけての談判には、遉が日出銀行の取締役

たる靜雄どのも、一時は當惑された、何程孝心深き靜雄どのも、今眼前に最愛の妻を繼母の手に打れ、或は摑かれ、又は惡口雜言さるゝには、堪忍袋の紐や切れたりけん、お繼母樣、其れは余りでは御坐ませんか、下女や車夫等の手前も少しは御考へなさい、又今此所で操を離緣せよと、左樣輕々敷は參りませんと常に變りて怒氣を含まれ聲も尖く語調に力の入りて聞えしは、晩餐に傾けられし酒氣の爲めなるか此迄にもなく眼光尖く、操の手を取り我が居間へと歸り行ける、

繼母は其の翌朝自分の姉の嫁付て居る所へ、繁子をつれて二三夜泊りと謂つて行きたるまゝに歸らず、靜雄夫婦は心配して迎へのものを遣したれど、歸らざれば、操自らお侘旁迎ひに行たれど、邪魔もの姑や小姑がゐないのでさぞお氣樂でしようふといぢめ懸るを、柳に風と受け流し、種々に侘びて歸宅を乞ひたれども聞入れざる事の惡くもありける、靜雄どのは何に心配するな、何程姉の內だからとてそう〳〵は居られるものでなし、といはるれど、操は其れ所にあらず、親類も見かね、嫁方のものは姑をなだめ、姑方のものは離緣せよと云ひ來れるぞうたてし、昨日は梅田の叔父が來る、今日は增田の叔母が來る、噫實に情けない、早く實のお母樣の傍に行たいけれど、此のお腹の子を思へばと操どのゝ小さき胸に思ひ余りての悲歎こそ聞くも哀れ、見るも氣の毒の至にこそ、姑が二三夜泊りにと出行しより、光陰は矢の如く早くも二月を過ぎたり、憂が中にも操は此の月は臨月となりぬ、されど姑は歸らず、其の月の半は過ぎ操は初產の紐を解き、玉の如き女の子、靜雄殿の喜び一方ならず、綾子と名付て百日の祝ひも終りたれど尙姑は歸らず、親類よりの督促は益々烈しくなり、靜雄殿も今は進退此所に谷まりたるこそ是非なけれ操や、可愛綾子まで出來たなかを、離緣せねば此家が納まらぬかと思へば、實に忍びないけれども、お繼母樣が彼の通り、僕も世間へ對して實に面目ない、じやと謂つてお前も今更歸れぬだろうか、永くとは云

はぬ、此所暫らく、實家へ歸ればとて、矢張繼母で辛いだろう、其の中に何樣とも手段もあろう、と涙だながらの夫の言葉、操は夫の心中を察し、夫は妻の心を推し、暫時は無言、聞ゆるは時々鼻をすゝる聲の微かに障子の隙より漏れくるのみ、最う何も申しません、承知致しました、されど聞譯ない樣ではありますれど、綾子の事を思ひまするとは……、すゝり上れは、靜雄どのも湧きくる涙を隱し、綾子の事は案じるな、必ず大切に養育るから、辛ひ事たらけの此の中に産れて來た綾子は、何うした因果で御坐いましよう、………嗳、モウ何も云つて呉るな操、旦那樣、………、綾子や不運なものだ産れて來るなり直ぐと此の樣な憂目にあつて、………お前も此の母樣と同じ樣な目に遇ふのであろう、これ綾子や未だ何を謂つて聞せても解りはすまいがねえ、最う此の母樣には逢れないのよ、よ、………エ、もう一層の事一所に死、此れ操、何をつまらぬ事を、………………

其の夕景金富家より二輛の車が出た、玄關に綾子を抱き、出行車の後を見送る靜雄殿、操、必ず恨むで呉るな、繼母への義理世間の手前と男泣きに泣く、綾子を抱き締めはふり落る熱湯の如き涙をのみつゝ居間に歸れば、今まで眠りし稚兒の泣き出し乳房を探ぐりし時の靜雄殿の胸中こそ!!!

◎將校婦人會の事業　今度將校の附屬事業として、陸海軍將校の遺子にて貧困なる子弟を收容し、鞠育薫陶の任を盡すべき目的を以て、三好陸軍中將夫人梅子、佐野陸軍中將夫人喜勢子、宇田川中將夫人種子、其他海陸軍有力なる人々の夫人發企となり、四ツ谷大番町三番地に本部を設け、教官には陸軍歩兵少尉石塚繁一郎氏を推し、差當り官費生廿名程を收容し得る設備にて、本日より開始の筈、

懸賞小説　貳等

人住む空家

東京　後藤才子

『本郷本所行』の電車は明神坂の下から燈火を點けた、四丁目の停留場に著いた時はまだ日は全く暮れ切らねど、戸毎の軒にも既や燈火が點いて、道行く人の歩調忙しさうに、遥かに聞ゆる蒸暑いやうな滊笛の聲は、アレは大方砲兵工廠の六時であらう。

『君、まア其處まで附合ひ給へ。』

と、今電車から降りた赤いネクタイをした男は連れの男に聲を掛けた。

『又今度にしませう、今日は少し氣分が惡いから、失敬だが、こゝでお別れにしやう。』

とフロックコートの連れは何うも浮ばぬ顔。

『いゝでせう、氣分が惡けりや猶更のこと、手間はとらせないから附合ひ給へ、何時もの所で一杯遣りませう。』

手を取ッて引かん許りにするので、夫れを振り切ッてまで別れて行かうとするほどの勇氣もない、悄然沈んだ顔に何んの應答もせず、夢でも見て居るやうに跟いて行く。

　　　＊

龍岡町の盛春軒と呼ぶ西洋料理店の二階、風通しの好い窓際の卓に相對して、食事を忘れて談話に耽ッ

て居るのは、最前電車を降りると直ぐにこゝへ來た、[illegible]洋生命保險株式會社員水町美男と、同じ會社の囑託醫師楠田蓮三である。

水町はその赤いネクタイを、反らした胸に輝く勳功の章でもあるかのやうに、時々氣にして指尖を觸れて見ながら

『ふーむ、成程、さういふ――、成程、夫りや御心配だらう、何うも僕は近頃君の樣子が以前と變ッて、始終鬱ぎ込んでばかり居られるので、何にかこりや心配事があるな、とは思ッて居たが、什麼事とは氣が着かなかッた、夫れだもんだから改めて聞くのも何んだか可笑しいので今日まで延び〳〵にして居たが、何にせ困ッたことが出來ましたな。』

『全く困りましたよ。』腕を組んで、仰向くやうに椅子に凭れかゝッて、楠田は長い太息を吐くのであッた

『お話のやうぢや一日だッて家庭の樂しみッてことを味ふことは出來まいと思ふが、夫れぢや第一君にした所が、細君にした所がまた阿母さんにした所が非常な不幸になるのだから、一時別居をすることにしたら何うです、阿母さんを別宅へ隱居さすのさ。』

と譯もないことのやうに云ッて、水町は蠟燐寸を擦ッて葉卷に點ける。

『夫れが出來る位ゐなら心配はないのですが、何うも母が肯入れないので。』

『エー、阿母さんが別居は嫌やだと云はれるのですか。』これは解らぬと云ッたやうな顏をして『訝しいですな、嫁の仕打が氣に入らん、顏を見るのも厭やだと云はれる方が、別居を拒むとは何う云ふ譯でせう。』

『僕にでさへその心中が解らぬのだもの、君など局外の人に解らう筈がない、一體母はあゝ云ふ氣質の人ではなかッたのでしたが、細君を貰ッてからと云ふもの悉皆性質が變ッて、全で別人のやうになつて了ッ

た。」

「其處で君は結局何うしやうと云ふのですか、今の通りにして置いちや猶更宜くあるまいと思はれるが。」

「別に何うしやうと云ふ名案もない、まア成ッたなりにして置くより外はないと諦めて居るんです、時々酒でも飲んで、空家に起臥して居ると思や濟みますからな。」と又長息を吐く。

「イヤ、そりや宜しくありません、肝心の君がさう自暴自棄を起しちや結局がつきますまい。」

「自暴自棄！、實際モウ僕は自暴自棄になッた方が幸福なんで。」

「そりや君は君だけの絶念めをつけて居るから幸福かも知れんが、阿母さんや細君は何うします。」

「何うッて、皆ンな自業自得だから仕方がない、僕がいくら圓滿な家庭にしやうとしたッて、二人で打ッ毀してかゝるのだから、何うなッたッて僕の怨まれる所は少しもないのです。」

と云ッて、思ひ出したやうに洋盃を取ッて、麥酒を續けさまに二杯まで傾けて

「モウ其の話は止しませう、折角君の興を妨げるやうなものだ、一杯さしませう。」

と水町に指すと、水町は受けるは受けたが飲まないで手に持ッたまゝ

「何うも困りましたな、君が什麽になッては、僕が家庭を作ッて居る人間だと一ッ阿母さんや細君に逢ッてお話をして見たいのだが、斯ンな若いものぢや何にを云ッたッて聽入れては下さるまいから。」

「イヤ、君の厚意は謝す、君が年が若いたッて家庭を作ッて居ないからッて、對者が解かる人間ならお賴みをするが、二人とも全で駄々ッ兒以上の沒分漢だから、手が附けられない、僕は君の厚意に酬ゆるに一言忠告をして置くことがある。」

と楠田は酒が利いたか妙にハシャいで來て、ホークの尻でコト〳〵と卓を叩きながら、調子に乗ッて何に

か語り出さうとする。
卓を叩くので白衣のボーイは横手に來て畏ッた、楠田は用があッたのではない、ツイ調子に乘ッて叩いたのであるが、ボーイの來たのを幸ひと云ふ體で
「ウヰスキーを持ッて來い。」
水町は驚ける如き眼光で
「君、ウヰスキーを飲むんですか。」
「何うも麥酒ぢや醉へない。」
「君がウヰスキーを飲むッてことは聞いたことがないが、宜いんですか、身體に障りやしないですか。」
「障るも障らないも職掌柄ちやんと承知して居るが、何うも日本酒や麥酒ぢや此頃醉へないのでウヰスキーを始めて見た。」と云ッて氣が附いたやうに「其處でだ、君に忠告をして置きたいと云ふのは、細君を持つなら島田を持て、廂髮は決して持ち給ふなと云ふことだ、良妻賢母の免許狀持ちは吾等の時代には妻として一文の價値がない。」
丁度、其時靴音高くドヤ〳〵と登ッて來て、少し離れた卓に陣取ッたは五人連れの女學生、數寄屋に風通に、蝦茶に阿利布に、指にも帶にも輝く金色。
「ボーイさん中の所で七人分、大急ぎよ。」
「ハイ。」
畏ッてボーイの引退がると入れ違いに登ッて來たのは、制帽を脇下に挾むだ大學生二人、相見て嫣然
風に煽られて瓦斯は一際明るく此室を照らした。

と楠田顧ッて舌打ち一ッ

「あれだ、見給へ。」

・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・

其夜楠田は大酩酊をして千駄木の吾が家に歸ッた、歸ッて見ると暴風雨の跡のやうに家内はひッそりとして、老實なる下婢の外には誰とて自分を出迎へるものもない、「宛然空家へ來たやうなもんだ。」と例の獨言を云ッて、酒の勢ひを藉りて吾れと吾が心を慰めるより外はなかッた。

實際楠田は家庭の樂しみの如何なるものかを味はうとして、高等の教育を受けたと云ふ醫學博士の令孃を妻に迎へた、其の新婚の前後二三ケ月こそ甘い夢に醉ふて、天の吾れに與へたる幸福の如何に多大なるかを感謝もしたれ、今は酒の勢ひを借りてさへ、猶ほ空家に一人住居する心地のして、娶らざる以前の獨身生活が慕はしい、夫れと同時に良妻賢母の保險の證のやうに崇高の念を以て見て居た廂髮か、單調なる結方だけに野蠻の遺習でもあるかのやうに思はれて、程遠からぬ團子坂の八百屋の娘が、夏も冬も、四時變らぬ島田に拔衣紋、赤い襷に前垂掛けの姿か、何んとなく懷かしいやうな氣がしてならぬのであッた。

親のこゝろ

過日近衛師團長に轉じて東京に參られた大島大將に就て一つの話が有ります、事は將軍が其の久しく住み馴れて居た金澤の地を去らんとして、何かと用事の滋かつた中ばにも、其子環・東の兩人を同地の附屬小學校に學ばせて居た恩誼を忘れず、其お禮かた〴〵同學校を訪れて丁寧にお禮を述べ・且奬學金として金二百圓を寄附した上、更に容ちを改め言葉を卑うして、時に、小供等の今後の躾につき、親として心得置くべき何かの教訓もがなとたづねられました、校長は、初めの程は其答へに窮した樣子で有りましたが、軈て心を取り直し、貴家の小供に兎角有りがちの世間知らずの高上りの氣風と、並びに金錢の取扱ひに如何にも無頓着なる事の二つを擧げ、例へば墨紙筆、其他何にても學校の用品を買ふ場合又は月謝を納むる場合などは成るべく、之れを人手に托せず、自身で扱はるゝ樣に躾られたら宜敷らうと答へ、將軍は此答へを得て、相好をくづし、今日は好き訓戒を得て嬉しかつたホク〳〵上氣色で歸られた相で有ります、



行動の花

學習院教授
女學部長　下田歌子

禮法を學ばんとするに當りて、必ず心得置かねばならぬ事が二つあります、其れは何かと云ふに、一つは、心の整へで、一つは形の整へである、委しく申せば、心の整へとは、心が確乎として、規律にはまる事で、形の整へとは、形が毅然として、法式に適ふ事です。だから、禮法の習練は、無論、其手續や方法を習ひて、形を整へねばならぬ事は云ふまでもないが、この二者の中、何方を取るかといへば、寧ろ形よりも、心の整へを學ぶ方が宜しい、なぜと申すに法式は、三年も五年も習うて置た人でも、常に之を用ふる場合が少ないと、往々細かい手續は忘れるもので、事に臨んだ時、サァ忘れた、如何しやうと思ふと、心がどぎまぎして、覺えず形が崩れるものです、其れのみならず、隨分其道に聞えたる人でも、ちつとも出つけない尊貴の御前へ出て、事のさまがまばゆいやうに晴がましいと、存外に、其作法進退が見苦しい事があるものです、恰も、精神を練磨しない、擊劍家が、道場で、竹刀の仕合は立派であつても、眞劍勝負となつた時や戰場に臨んだ時に存外後れを取つて、却つて、不熟練な人の、精神の確がなのに、斬り立てられたといふ咄しと、同じ樣な結果を見る事が無いとも云はれぬ、然るに、心の整へを學んで置く時には、縱令、其手續は忘れてもさそくの取り廻しが出來て、更に、其場で引けを取る樣な事がないものです。但し、心の整へは、もとより其人に屬するもので、彼のダルク女史が、『人僉賢明善良の資を有せば、決して、禮儀を學ぶの必要なかるべし』と云うたとほり、大人君子は學ばずと

も宜しい。が、總ての教育は、稀に俊れた人を出だす目的ではなくて、普通に間に合ふ人を、なるべく澤山出すことを要するものですから、いさゝか座次進退に就て述べやう。

すべて、座作進退は、沈着きて、物しとやかにあるが宜しい、左樣かと云ふて、逡巡するのは宜しくありません、確乎毅然として、爾も、靜かに恭しく、あらまほしい。輕躁として、沈着ぬやうなる、又は、餘りに四角張つて、角々しきやうなるは見惡きものです。たゞ、何と無く安らかに起居ふるまふ中に、自づから、規則ありて、禮容いさゝかも亂れずと云ふやうにありたいものです。

立ちやう、着坐をして居る時、立ち上るには、先づ兩足の爪先を揃へて、爪立てながら、兩手は、靜かに膝頭の所までのばし置き、右の膝頭を、左の膝頭に、そと寄せながら立つのです。又、椅子に掛けて居る時、立ち上るには、先づ、衣服の裾などの、椅子の足に、はさまりては居らずやと竊に注意し扨、兩足の爪先を揃へて、徐かに立ち上りて宜しい。身體は、眞直にして、反らず屈まずと云ふ中、少し反身の方が宜しい。(殊に、洋服の時は)但し、頭は、少しうつぶき目にして居れば、反氣味でも、意張つて居るやうには見えません、眼は正しく、正面七八尺程向ふの所を、屹と見て、故無きに、左顧右眄などせぬものです。然し、餘り睨みつけてるやうなのも、怖ろしげで惡い。愛嬌は、十分含んで、一寸人に向ふ時は、嫣然にあるが宜しい。……けれども可笑しくも無いのに、げた〳〵と笑ふは、甚だ見苦しい、總じて女子の立ち姿は、富士の遠山の雪を出で、朝日の影に匂へるやうに、氣高く麗しくあらまほしいです。

爪先を揃へて、久しく立つて居る時は、隨分勞れるものですから、其折には、片方づゝ、踵を浮かせて爪先ばかりを地につけ、左と右と、代る〳〵斯うして休ませれば、存外永く勞れぬものです、全體は、眞直に爪先を揃へるよりも、踵と踵とを合せて、八

文字のやうにして立つのが、勞れも遲く、體のゆれも少なくて宜しいけれども、日本の禮では、女子は殊に致さぬものとなつてます、なる程、からげの日本服では、ちと異なものでせうから、しかたがありません。

行歩、先づ、體を正しくし、肩を平らにし、兩手は安らかに、股の上に置き、掌を内にし、指は五本ながら離れぬやうにして、する〱と進むです。足音は極めて靜かなが宜しいけれども、決して拔足はせぬものです。殊に、靴又は、三枚重などの麻裏草履を穿きて、板間を歩く時などには、一層注意して、高き音を立てぬやうにせねばなりません。さて、左の足から進んだ時は右へ旋り、右の足から進んだ時は左へ旋ること丶心得て宜しい、退く時は、一旦兩足を揃へて、右へ旋る時は、右の足を、左の足の後に斜に引き、而して、又、左の足を同じやうに引き、斜に下坐の方へ向ふのです。(斯うすれば、全く後向になる時にも、上坐が眞後にならなくて宜しい)さて、下座の足から退きて歸る、其左へ旋る時は、これの反對と心得て宜しうござります。

歩む時に、閾や、疊の縁を踏まぬのは、何故かと云ふに、閾は、木の切組の所が緩んで居ると、音がすることがあるから其れを除けるのだと申し、疊の縁を踏まぬのは、雲繝縁などの上を、少しにても、濕り氣のある足袋などで踏めば、忽ち、其黒い紋が、足袋に移る等の事があるからだと申しますが、何に致してもこれは踏まぬが禮です。

足は一體、外曲に歩くが宜しい。殊に、靴や袴を穿いて、内曲に歩けば、まことに見苦しいものです。然し困つたことには、日本服のからげのなりで餘り外曲に歩くと、甚だ傍若な容子になりますから、どうも、無據、あの裝では、ちと斟酌して歩かねばなりません、足どりは、小足も品悪く、大足も、傲慢らしく見えます。これも、自然のまゝのやうな風に足をはこぶが宜しうござります。

立つて居る時も、歩んで行く時も、體のふら〱と

ふれぬ様にしゃんとする事を、常に慣らさなければいけません。

和畫に就て

土佐板谷派家元　板谷桂舟

◎繪畫は云ふまでもなく、山水花鳥の姿を撮り、烟霞風月の趣をうつし、人事世態を描いて、其美を楽しむのみならず、實用の藝術として、はた精神修養の一助として、教育上缺くべからざる科目の一つである。

◎而して和畫は、白河天皇の御宇、藤原鎌足の七世春日基光が、巨勢金持に就て繪畫を學び、一生面を開いたのが起りである、金持または、其以前上古既に、佛教の渡來と共に、畫法も傳はつたのであるがそれはたゞ佛畫に止まつて、其他の景物には筆を染ざつたものである、然るに基光に至つては、才筆縱横題を自然に求め、心を寫實に寄せ、風俗、人物花鳥、風月、悉く其の筆に上つて、初めて和畫發展となつたのである、それより歷代繪畫を以て朝廷に仕へ、後性を土佐と稱し其流派を土佐派と云ふに至つたのである、

◎前述の如く土佐家は歷代繪畫を以て朝廷に仕へたものであるから、自然朝廷の禮式、故實等に通じ、それが土佐派繪畫唯一の得意とする所で、舞樂などに至つても、土佐派の繪畫でなければならぬと云ふやうになつたのである

女學生の一日



（其の七）　治涵

◎寛文の頃關東に、狩野派が關東趣味を有てる畫風で、大に德川家に用ひられて居つたのであるが、土佐派二十世廣通の子廣澄も、德川家に聘せられて東下した、土佐派は京都趣味の畫風で、一は瀟洒、一は精緻であつたが、互ひに長所をとつて、京都居殘りの土佐派よりは、關東の土佐派に大に見るべき繪畫が出來たのである、故に其後禁裏の聖賢の屏風と關東の土佐派繪師が上洛拜寫の命を受けたのである

◎その畫師は住吉常行で、住吉と稱するのは、攝州住吉より、出でたる人なるが故である、而して關東に於ける土佐派は、住吉を氏としたのである、住吉四世廣守に至り、廣守に子なきより、當時の國法にて、家名斷絕の止むを得ざるに立至つたので、同族板谷廣當これを憂ひ、自ら入家して其跡を繼ぎ、遂に其子廣行を、廣守妾腹の子と稱して相續せしめ、家名の全きを見て退隱したのである、そこで幕府は其德を愛で丶新たに祿を賜はり、一畫家として世襲せしめた、それが我板谷家の開祖である、故に土佐派は、京都にて單に土佐と稱するものと、關東にて住吉、板谷の三家である、

◎父廣春の代は、橋本雅邦の師なる狩野勝川院抔と德川家の奧畫師として採用せられ、それまでは兎にも角にも、畫家として堂々たるものであつたが、維新後次第に衰微して、甚だ振はぬやうになつたのである、

◎そこで明治十二年住吉廣賢は、和畫保存の爲に其筋に建白書を出し、御歌所と丶もに御畫所として對立することを請願したのであつたが、それは不成功に終つた、併し此建白書が導火線になつて、間もなく美術學校が創立せられる、美術協會がはじまる、繪畫は世に持囃さる丶ことになつた、

◎然るに我流派の畫風は、其人に乏しかりし爲め甚だ振はず、京都に於ける土佐派の消息も杳として聞えず、僅に川邊御楯を土佐派畫師として知らる丶位なりしが、今はそれも故人となつて、其門人村田丹陵の名を聞くのみである、住吉家は先代没後、其

門人山名貫義、當時我父も沒して、土佐派に其人少なきより殆んど土佐派を獨占したる如き勢を以て花々しく打つて出で、古畫鑑定を以て世に知らるゝに至つたのであるが、その貫義も今は世を辭して三年今の住吉家元は、殆と繪畫を眼中に置かぬ有樣であるから、我等微力ながら、和畫保存の爲、進んで大に發展せしめねばならぬ、と苦心して居るのであるこれは單に區々たる家名の爲のみではない、純粹なる和畫が、美術上に大なる價値あることを自認して居るからである。

繪畫と寫眞術

筒井年峯

私は商家に生れ、少時は商家に勤め、然も念入りに兵庫から、東京の茅場町に、態々商業見習ひに上京したのであつたが小兒の時より繪畫が大の好物で常にいたづら書をして居つた、明治二十年頃工藝共進會に行つて、ます〳〵繪畫といふものに心を傾て朝六時前夕六時後の餘暇には、勝手稽古で繪畫を樂んだが、いつまでも獨稽古では行かぬ、誰かよい師匠をと思うて、曉齋氏の門に入らうとしたが、氏は無闇に弟子をとらぬ流儀であるから斷はられ、芳年先生の門に入り、別に四條派の旭峰先生に就て繪畫を學んだ、

旭峰先生は、中々腕の利く畫師であるが、腕より先に法螺を吹くといふやうな事の出來ぬ、至極沈着な謙遜な人であるから、名はあまり賣れては居らぬ、何にしても私は商賈の片手間繪畫を習ふのであるが曲つたなりにも畫の一つでも描けるやうになると芳年先生から畫名を付けたら宜からうといはれたので、師匠の芳年の年と旭峰の峰の二字をとつて、年峰といふ名をつけたが、實に無意味千萬な話である併し畫をかいて、年峰と落欵をすることになると、肝腎な本職はお留守になつて、寧そ籍を繪畫の方へ轉じたいといふ考を起した

そのうち父の病氣で歸國する、暫らく郷里に居るう

ちに、父の病氣は全快する、大阪の或新聞から繪畫を頼まれた、いよ〳〵玆に於て繪畫が本職となり、暫らく大阪を見物をして、東京へ出やうと思ひ、日々新聞の挿畫を描いて居つた、何がさて初めて版下を描くのであるから、今から考へると噴飯すやうな事をして得意がつたものである、それなら大阪でもなにはがた、其他續々文藝書の出版が始まつたので仕事は忙がしい程ある、金儲半分修業が出來た、廿六年めざまし新聞に招聘せられて上京し、それから時事新報に入社し、傍ら書籍雜誌の口繪挿繪を揮毫し、多年繪畫に養はるゝことになつた、

繪畫に養はるゝやうになると、よかれ惡かれ、その日〳〵を繪畫に追はるゝものであるから、展覽會であるとか、共進會であるとか、いふ所へ出品して見たいと思うても其の餘暇がない、繪を畫くことに忙がしくて、繪を、研究することが出來ぬ、そこで其の目的の幾分を滿す爲に、去る三十四年頃、寫眞術をはじめた、寫眞を研究する暇があつて、繪を研究する暇がないと云ふのは妙であるが、寫眞の研究は畫の研究ほど頭が痛まないから、時間の隙りになることがすくない、つまり繪に對するほど、寫眞に重きを措いて居らぬからである、

そこで寫眞は繪の爲に如何なる助けをするかを云へば、時間の問題で、或る景物を寫生に行く、急ぐ場合に大體の形を撮る、またよい枝ぶりの松の木かある、よい圖になる橋がある、などいふをカメラでも持つてビシ〳〵撮つて行く、それに記憶を加へて、繪畫の材料にする、存外成績がよいので、初めの目的以上寫眞が面白くなつて、技師のする總ての事を悉く自分でする、新たな發明にでもなれば別であるが、在來のところでは、繪畫ほど奧の深いものではなく、殊に補筆などは、まことに造作のないことである、

寫眞は、營業者は人物に重きを置いて、景色などは容易なもの〻やうに云うて居るが、寫眞屋が充分設備せる場所に於て、多くの工夫を要せぬ人物を撮影

することは、よく見せるといふことに少しの手加減あるのみで、光線の工合も天然の儘なる、山水の景色を撮影することは、其位置をとる上に於ても、なか〳〵容易でない、美術的頭腦がなければ、とてもよい圖を得られぬのである。であるから素人の寫眞になか〳〵侮られぬのがある、

寫眞はレンズのよいのを用ふるに限るが、それも使ひやうによつて、よいレンズも一向役に立たぬもので、飛放れたものでなければ、使ひ方さへよければ少々レンズがわるくてもよく撮れ、種板のわるいのも、よく生して使ふ事が出來る、

寫眞を撮れば、修正、現象皆自分でせねば面白くない、撮る時の光線の度合で、現象の藥品の分量も違へば、時間も違ふ、また云ふに云はれぬ微妙な點に於て、決して自分で撮つた種板を他任せに出來ぬ所がある、

で數年繪畫の助けをさせつゝ、寫眞の研究をしたが今日では時事新報に對しても、寫眞の方が本職のやうになつて、同社から出る雜誌、また他の書籍雜誌の寫眞をも賴まるゝやうになつて、其餘暇が、繪畫を研究する時間となつた、猶一歩進んで寫眞屋を開業し、寫眞によつて充分に繪畫の材料を得、生活の爲に繪畫に筆をとらず、金錢を離れて繪畫の研究をし、いさゝか繪畫界に貢獻したいと思ふ、

●流行界（婦人持時計と鎖の新形）　最近佛國又は米國より輸入せられたる婦人持時計は、大さ八形より十二三形の間にして　極めて薄手の兩蓋に限られ、側は十四金より二十金製のもの、而して之れに兩面總彫したるものと綫のみに彫刻を施したると二種あれど、いづれも結米彫にして日本彫とは趣を異にすれど、半月又は星などを高彫となし、之れにダイヤモンド又はルビー等の寶石類を鏤めたる手際は面白く、又た孔雀の羽を高彫りとなし寶石の色を利用して、色彩を施せるなど、贅澤に過ぐれど、趣好見る可きものあり、但し以上の如き彫刻あるものは華美を好む向きの品なれど、淡白瀟洒を好む向きは、又た別に趣向ありて、兩面無地又たは梨子地の艶消しとなし、金の質を吟味して其を得意とするもの、或は之れに何の彫刻も趣向も用ふることなく、無意味に高價なる寶石類を鏤めたるなどは粹の粹とも稱す可きものなるべきか、

女鑑新聞

紀元二千五百六十六年　西暦一千九百六年　清暦光緒三十二年
明治三十九年八月一日水曜日　ひのえうし

▼投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の愛讀者にて女鑑の讀者には自然口へて見らる、誌
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る
發行人紫式部　編輯人清少納言　印刷人赤染衛門
發行所　東京築地二丁目　株式會社國光社

論說

女子と學問

西園寺侯爵談

此頃世間で女子問題が喧しいが、其のやかましういふ人々の多くは西洋の事情に通ぜずに、云はゞ僅かに一度廻つた位で實際に長く西洋の事情をも研究せずに議論をして居るから、正鵠を得ないやうに思ふ、と云うて自分が屢々西洋に行き、長く西洋に居つたから、非常に委しいとも云へぬけれど、女子に高等教育を授ければ、女子は獨立の氣象が强くなるとか、家庭の面倒が殖ゑるとか、心配する人もあるが、西洋の實況は決してそんなものではない視學官に導かれて、屢々女學校も見たが、其の主としていふ處は、能く生活をして良妻賢母たらしめよ、といふにある(特に家事に注意する、例へば室内に花が活けてあれば、此花の活けやうはよいとか、家政は斯ういふ風にせればならぬとか云ふて居る日本で最も苦心して注意して居ることを、彼地でも細かに注意して居つた、決して西洋の婦人だからと云つて、悍馬を扱ふが如くに心得るのは、大なる間違である、そして西洋婦人には、日本の婦人よりも學問のある人が多いが、其家庭の實況を見ると、頗る柔順で、決して良人を凌ぐものはない否良人の德を他人の前に吹聽するのさへある位である、決して良人を尻に敷くなどいふやうな事はないのである、是等の事情に通ぜずに、女子に學問をさせると西洋流になる、西洋流になれば女があばれる、全然悍馬でも家庭の内に養ふやうに思ふのは大なる間違ひで、どうしても女子にも相當の學問をさせ自分の體面を保たしめ、延いて一家の面目を全うせしむるやうにせねばならぬのである、



文苑

秋初風

岡井飛洋

◎山　わが手すさびの琴に、かよひし山のまつ風は、たゞひとよさの夢のまに、秋のしらべとなりにけり

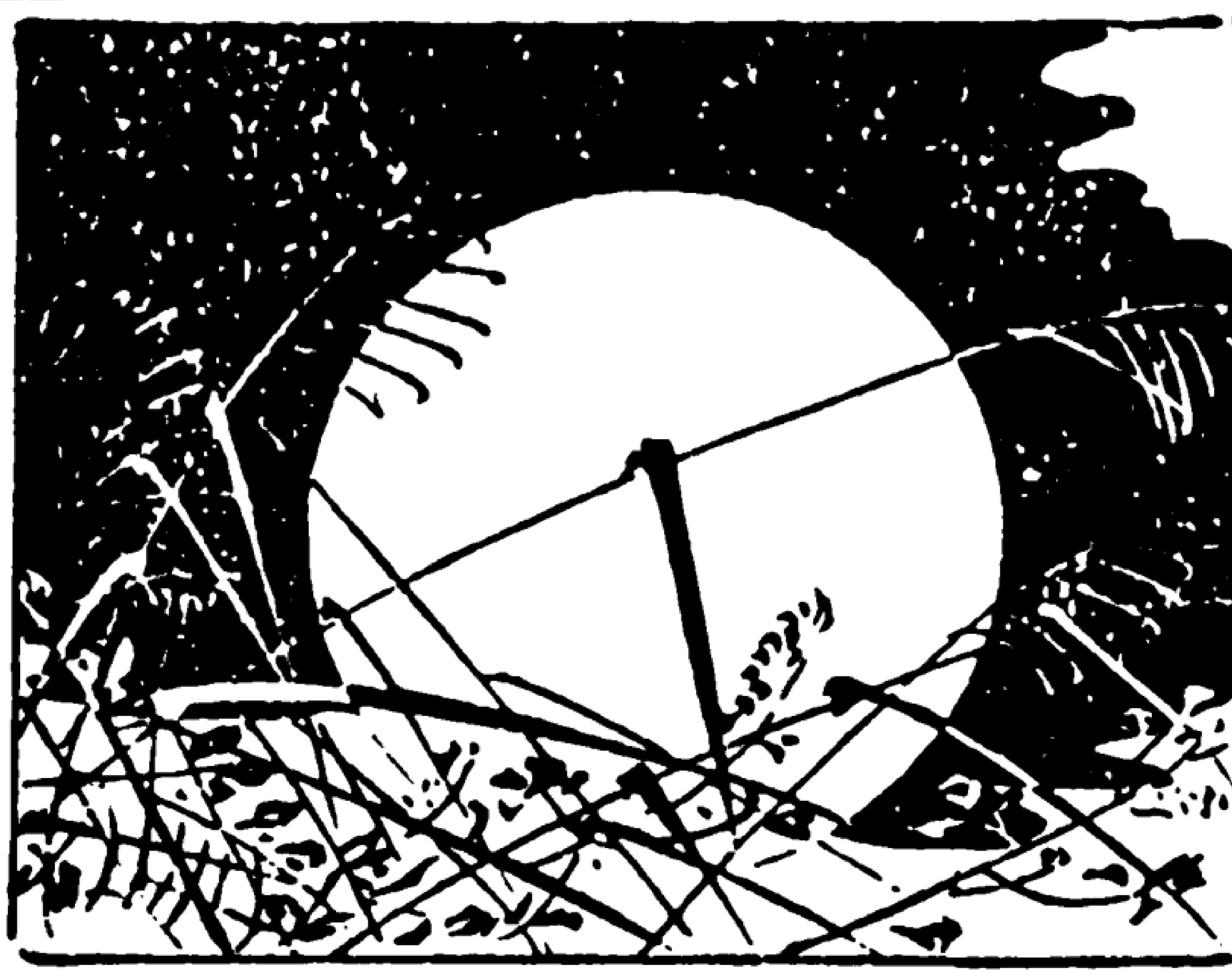
◎川　川ぎりわけて行く船に、吹來る風のすゞしさは、きのふにけふはかはられど、蘆のそよぎに秋ぞ見ゆ。

◎野　野べの夕ぐれ來て見れば、空をかすめてふたつ三つ、飛ぶや蜻蛉の羽そでにも、すゞしさかよふ秋のかぜ。

雜報

高輪御殿の御養蠶

高輪御殿におはします常宮周宮兩内親王殿下は、養蠶が國產物中の重要なる故に、女子としては是が飼養法を心得置くの必要なるを思召してや、常に御心を養蠶の上に留めさせられ、御居間の襖子には、蠶の掃立より飼育して、繭となり糸と繰るまでの畫をかゝしめられ又時々西ヶ原の養蠶講習所に成らせられて、親しく飼養の法を見そなはすなど、人々の感じあへる所なるが、此程大日本農會々頭松平男爵へ優良なる生糸三百匁御下賜相成りたる其所以を承るに、昨年十一月三重縣宇治山田町にて蠶種繭生糸の品評會開かれたる際、一等賞を得たりしものを、會頭松平男爵より献納したるに、兩殿下には今春右の蠶種を掃立て給ひ、御用掛主任佐々木伯夫人、並に侍女の人を御相手に手づから飼育あらせられし結果、非常に良好にして、種紙一枚に對し、四斗の良繭を得られ、此程之を糸に繰らせ給ひて、其内三百匁を松平男爵に下賜あらせられたるものなりとぞ、男爵は之を何とか永く紀念として世の奬勵ともなさんと欲し、目下考案中の由なるが、ありがたきは兩殿下の御心なり



◎女子美術學校　同校にては、今度製作部を設置することゝなり、昨今既に建築中なるが、本月十日の學期始より、愈々其實施に着手する由、同製作部は、從來も小規模ながら造花刺繍編物圖案等を製作して、世の依頼に應じ居たるものにて、今後は之を擴張し、十三四歳より十六七歳までの少女にて稍や美術思想あり、將來望みあるもの約二十名を募り、日々教授の上一日十錢以上の日當を與へ、同校卒業生をして、監督指導の任に當らしむべしとなり、

◎高等女學校新設　岐阜縣大洲町に、町立大洲高等女學校を設置し本日より開校の筈

◎下痢と番茶　昨今の氣候で、急性の腸加答兒を病むものが多いが、そんな時には渇がひどいから、番茶をよく焙じて之を煮出し、濃い位のを冷して、小量づゝ飲むと可いそうだ。

◎女子の通信屬　郵便爲替貯金管理所にては、女子雇員數十名を通信手に任用したるが、去る十三日には、又々通信局雇員として多年勤續せる佐藤桂子筧清子を、通信屬に任じ、月俸十八圓を給與されたりと、

◎慈惠醫院の產婆養成　東京慈惠醫院にては、醫員ドクトル樋口繁次氏主任にて、養成中の產婆生徒八名卒業せるを以て本月より試驗の上、更に新生徒を入學せしむ由

◎篤志看護婦人會の行賞　篤志看護婦人會にては、戰時勤務者の行賞に就て、取調中の處、略ぼ結了を告げたるを以て、近日中に發表せらるべき筈なるが、行賞の方針は勤務の點數を主とせるものにして、男子職員にも、夫れ〳〵行賞ある由なるが、其總數は全國を通じて六千餘名なりといふ、

通信

清國纏足廢止會

西廣二會には、上海に於けるリツトル夫人の如く、熱心なる纏足廢止會の指導者なく、尙又張之洞の如き非纏足主義に勢援を與ふる有力なる官人なしと雖も、歐支兩人間には之に加擔せる人鮮からざりしが、機會は愈々到來して、支那人自身を以て、斯會を組織し、多年彼等を束縛せる慣習を破壞するを目的とするに至れり、從來斯種の運動起らざりしにはあらざりしも到底不可能の事なりと放棄されたりしが近く此運動の動機となりしは、通じて女學校の開設せられしことにして女子に從來よりも一層自由なる教育を施す結果、斯る野蠻的風習に對し、一般の反抗起るべく、又其子女は母を動かし、又自ら母となりたる時は、此態度に根本的の反動を起すに至るべしと思考されしに出る據にして之れを言ふ時は、現今女兒の七割は、其陋習に檢束され居りて、只其三割が斯會の會員たる故を以て、自由の恩惠に浴し得たり、斯會々員たるの條件は自分及び其子息をして小足を有する婦人に結婚せざる可きを誓約するにあり、又是等の會員が如何なる程度にまで其誓約を遵守す可きかは疑問なりと。

一少女の旋車器發明

母親に甘へる外何の能なき少娘の中に斯る發明家のあらんとは、思ひも寄らぬ事ながら、外字新聞の報する儘に記すべし、此奇少女は白耳義生れのアーネスター、カーストン、デー、ルースー(十四)と呼び、尙小學校に通ひ居るなり、發明したるは一種の旋車器にて、之を他の車輪に取附くれば、車軸によりて車體を自由に旋轉し、且つ一瞬時に方向を轉換し得るものと云ふ、此を自働車、馬車、自轉車等に應用して最も妙なりとの評判高く、此少女を訪問するもの引きも切らず、少女の母は語つて曰く、娘は別に發明心ありとは見えず、唯平素人形の如き玩弄物を好まずして、汽車汽船の形せる玩具を選み、旣に四歲の頃厚紙にてボンプを造り玩び居たる事あり云々少女自身も旋車器につき答へて曰く「是は私の心に折々考へついたもの〻一ツにて、實際は左まで大切なものとは思ひませんでした」と、然るに此の發明は、白耳義政府にて軍隊用として採用せられたり、而して少女が發明の動機は、學友の所有せる自働車に屢同乘し、火夫より其說明を聞きたるが大に趣味を喚起したるに、或日一人の自轉車乘の車の方向を轉ずるに困難なる體を見て、フト思ひ付きたるを、或人が聞き、更に專門の機械家に託し、少女の考案を完成せしめしなりといふ。

未開國婦人裝飾法

アラビヤの貴婦人は、指と足とを赤色に染め、グリンランドの女は其顏を青黃の二色に彩色する
印度にては上等三階級の婦人は、我邦のお齒黑の如く、悉く齒を黑く塗り、ヒンヅーの花嫁は、頭より足まで一面に脂肪又はサフランを塗り付ける
ボルネオの女子は、薄紅色、綠、青又は猩々緋などの仰々しい色に其髮を染め、
新和蘭では、貝殼製の至極巧妙に出來た黑子を幾個となく美人の頸上に飾る、
南米の土人種族にては、婦人は皆な其前齒を拔き取りて、其穴跡の黑く見ゆるを至極の裝飾と心得、
又新ギニヤにては美人の鼻に孔を明けて鼻の邊を飾る、

社會

女工の現況

得能印刷局長談

▽東西の工女　由來日本の工女は品性劣等にして、勞働に不忠實なりとは一般の世評なるが如しと雖も、十年昔の女工ならばいざ知らず、今日に至りては、世人の想像するが如きものにあらざるなり、何となれば第一學識に於て、第二體格に於て、第三紹介者に依りて身元を確むる等の其選拔方法に於て、非常の手續を要すれば、品性に於て學術に於て、世評の如く侮るべきものにあらざるなり、余は二回西洋に渡りて、其女工を視察したるも、彼我長短の優劣は、未だ遽かに斷じ易からざるなり、勿論世には日本女工は公德心に乏しく、仕事最中にても監督者の眼を偸みて、互に談話し業務を怠る如きこと多しとの評あるも、余輩を以て之を視れば、毫も眞實となすに足らざるなり、何となれば、現今事實に於て其一人の働きたる分量を見、又分擔の制能く行はれ居れば、隱さんと欲して隱す能はざるの制度となればなり、又學問の點に於て、西洋の女工に劣るかの感を抱くものあらんも、最早今日はしかく著しき軒輊を見ざるなり尤も西洋の女工が、勞働時間中と雖も、一意專心勉强するは爭ふべからざる事實なるが如し、

▽女判任官と女工　世人は女工とさへ云へば直に卑下する風習あるも、近頃新聞紙上にて持切り居る女子判任官に付き、彼我俸給額の多少を比較せんに、今回採用したる通信手の最高給額は十八圓にて其最上額も廿五圓と限定せらる、之に反し我が印刷局にては、現に四十圓を受くる女雇員二人ありて三十圓廿五六圓の女雇員に至っては數十名の多きに達せり、而して此等の雇員は、多く師範學校高等女學校の卒業生にして、幾年となく經驗を積みし女工の監督者たり

△撰拔法　我が印刷局にても、女工の總數は一千七百名にて、其内女雇員八十七名あり、是等は皆同局に五年以上奉職して、經驗技術に長じ、衆中の勉强者なるを以て、此等を撰拔して雇員と爲したるものなり、近時師範學校卒業生等續々女工となるが、是等の爲には普通の女工と同じ職務なるものにあらずして、可成調査係りとかに採用するを常とするが、此内には學校の教員をなして、廿五圓位の俸給を支給され居るもの多きも當局に入りたる當時は、局則として廿圓以上を支給する能はざれば勢ひ雇員の試驗に合格する迄は、其範圍内にて支給を受くるものとす、前述の如くなれば、女工の成績は極めて宜しき也、

繪畫と好奇心

公文菊仙

近來洋畫科の女生徒に裸體の寫生をさせて居る學校がある、すでに繪畫である以上は、宇宙の森羅萬象悉く一枝の筆に染出すべく、決して其物と材に選ぶ所はない譯であるから、裸體の寫生も差支ないといへば差支はない、

併し裸體とは如何なるものであるか、即ち赤裸々で極端なる物の美はそこにあるかも知れぬ、併しながら美術はその赤裸々を貴ぶべきであらうか、人は平素衣服を着るものとして、肌を出すを羞ぢ、股を出すも違警罪に問はるゝ習俗の上から見ては、どうしても裸體は醜體であるとせねばならぬ、而し日本人殊に婦人の裸體は、失禮ながら醜體といふを憚らぬので、西洋人すらも婦人を大臀短脚の動物として、其身體を形容して居る、予は眞に近き裸體の婦人を寫すよりも、繿褸着たる中にも、其心の美のほの見ゆる婦人を描出す方、美術家として執るべき道であらうと思ふ、

よしそれらの理屈を除いて、好個の繪畫材料とせんか、西洋に於ては、裸體を美術の粋として居る、なか〳〵初歩の畫家には出來ぬ畫題となつて居る、潤飾のない曲線の上に、美を描現はすのであるから、極めてむつかしい藝である、男子にしても容易に裸體を美術範圍に描き出すことは出來ぬのである、然るに女子が裸體を描かうとするは、なか〳〵度强のよい話である、

女子は其特質の美なるが如く、花鳥山水を描くには適當であるが、奇抜なる人物を描くは容易の事でなく、况して裸體に於ては猶更の事である、女子といへばとて決して繪畫に於て男子の域に達せぬとは限らぬのであるが、それには距離がある、順序があるそれ相應に楷梯を踏まねばならぬ、

まだ碌々茶碗の寫生も出來ぬものに向つて、直ちに裸體の寫生をせしむるは、甚だ不眞面目な事で、單

に滑稽として傍觀することは出來ぬ、想ふてこんな事は好奇心に投ぜる教師の卑劣なる政略で、實に怪しからぬことである、苟も眞正なる女子の美術家を養成する考あらば、宜しく相當の順序方法を採つて貰ひたい、予は男女を問はず、初學の徒に、苟且にも曲線の美などいふむつかしい語を、ひねくれた心とゝもに發しさせたくないと思ふ、

要するに近時の藝術は、すべて不眞面目で、口の先にのみ發達して行くのであるから、却つて無言のうちに彫刻、塗工等の藝が、美術として最も發達して行くやうである、理屈が多く、技術の出來ぬのが、美術家の屑であることを思はゞ、腕もなきに好奇心に驅られて、裸體などを寫生するうちに日が暮れ、終に學んだ美術も物にならぬといふことになるであらう、

それから寫生といふことも、繪畫は寫眞と違うて、その價値は虛實皮膜の間にあるのであるから、徒らに寫實の末に走つて、形以上の精神を描現はすことを忘れてはならぬ、

須磨琴の話

富田　寛

須磨琴の話を詳しく申せば、隨分長くなりますから一通り簡單に申上げませう、

一體須磨琴、即ち一絃琴は、日本の樂器中でも、極めて優美なるものでありまして、殊にこの樂器が、女子に適して居る事は、其優美なる心を養ふ上から申しましても、又體育上から申しましても、何れもこの樂器の爲に、利する所が多いのであります、文學上の趣味があつて、和歌などの出來る女子は、自作の歌を直に此樂器に合せて歌ひ樂しむとか、又假令、和歌は出來なくても、鬱いで困ると云ふ婦人は此樂器に依て、精神を慰めることが出來るのであります、なほ體育上に如何なる効用があるかと申せばこの須磨琴を彈する時には、左右の手を兩方へ開き

ますから、自然に胸廓を廣くするのであります、故に日々裁縫などをして、前方へばかり身體を屈する習慣の女子に取つては、此樂器のために、却つて身體の姿勢を正しくし、肺臓の健康を保つ事が出來るのでありますから、私は家庭に於て、音樂の慰藉を得ると共に、一方衛生上に於ても、大に利益を得る所があると思ひます、

要するに、此樂器が高尚優美なる淑女を作り、身體壯健なる妻母を作ると云ふ事は、事實であります、又須磨琴の構造に就て申しますれば、板片又は竹を割りたる上に、一條の糸を張り渡したもので、構造は至つて簡單な樂器でありますから、西洋音樂の樣に多數の人が合奏して、多數の人の耳を傾ける樣な事は出來ませんけれども、其特點と致します所は即ち此點にあるので、單獨で樂しむとか、又は心許せる友數人に聽かせる音樂としては、最も適當であらうと思はれます、其音律に一種の雅味がありまして單に聖人君子の友となつたばかりでなく、我國古代にも用ゐられたと云ふ説や、如何なる邊土にも、神前に奏せらるゝを見ましても高尚である事が知れます、彼の八雲琴は、此琴から變化致した、と申す事です、其由來に就きましても、今日迄種々の説がありますが、要するに皆、風雅を眞に愛する人の間に用ゐられたる事は、解りますのですから、少しく御話を致さうと思ひます、何故に須磨琴と申すかは、彼の行平中納言が須磨の浦に居られた時、關屋の廂板に冠の紐を結び合せて、

わくらはにとふ人あらば須磨の浦に
もしほたれつゝわぶとこたへよ

の歌に合せて搔きならしたと云ふ説と、足利義政が須磨の古關の板を得て、作られたと云ふ事がありますが、二説共別に信を置くには足りませぬが、此時代より既に行はれた事は明であります、德川時代には熊澤蕃山が甚だ愛好致しまして、京都にて有志者に教授せられ、名人大家が續出致しました、支那に於ても、極めて古代からあつたものと見えまして、

古書中に往々散見致して居りますが、印度にても釋迦在世の時分から、盛んに行はれた證據には、百縁經の文中に舍衛國の南に善愛といふ音樂師が、巧に一絃琴を彈し、能く七種の音聲を出したとありますし、又私の所藏致しまする尾州駿亭作の、琴の裏面には、日本後記巻八の一節が記してありますが、原文は漢文ですから之を譯しますと、

延暦十八年七月三河國に小船が漂着したが、乘つて居た人は、布で脊を覆ひ、別に袴も着けず、左の肩から紺の布を掛けて、丁度袈裟の樣であつた、年は二十許で、身の丈が五尺五分、耳の長さが三寸餘、何國の人とも知れず、唐人に聞くと崑崙人だとの事勿論言語は不通だが、中國語を習つて、自分は天竺だと謂つて居り、常に一絃琴を彈じたが、其歌聲が極めて哀れにゆかしく聞えた、と記してあります、

右の如く、何れの國にても行はれたる事ですが、我國のは元祿時代の熊澤氏以後、我師豊平翁に至りましては、京都に於て千種有功卿、初め公家諸家の寵遇を受け、中にも正親町殿より、一絃琴教諭取締役となり或規則を設けた程であります、翁は先年九十以上の高齢を以て歿しましたが、私は少時より此琴を愛し遂に大阪に參りまして翁の門下となり、數年の後、家傳の秘曲を授け、又家元の允可も請け、又特に先生が多年の苦心に成れる歌曲を、訂正するの自由を與へられましたから、爾後は諸國に廻遊致しまして、斯道の流布を圖つて居りますが、何分國語詩歌の素養なき身でありますから、歌詞の訂正は一々本居豊穎大人の校定を仰いで居ります、嘗て同大人から、

一すぢにつくす心の緒琴こそ
千年をかけて亂れざるらめ

との歌を與へられました、此他にも次の如く、諸名家の作歌を乞ひまして、私が作曲を致し、老後の樂しみに將來一卷として、世に出す時機の來るのを待つて居ります、

○　幸　磨

聞くたびにげにや心も須磨琴の
　糸の音色の清ければこそ　　公業

○

風わたる松かげにして聞きにけり
　心をすます須磨琴のこゑ　　三輪田眞佐子

○

さかえ行く豊葦原のことの葉も
　すみてきこゆる須磨琴の聲　　豊平

○

ひとすぢに心こめなば十あまり
　ふたつのりちのたがひあはせぬ　　島村雅規

○

松風の通ふしらべの須磨琴は
　千代のためしにひくべかりけり　　清水喜樂

○

一すぢに心をこめし琴の音に
　須磨の昔を忍ぶ夜半かな

そして私の拙作も、一首あります、

一すちに心つくしてかきなさば
　いかなることの通はざるらん

終に御參考までに、他の樂器との調子のおはなしを申しませう、全體、この琴の譜は、十二に分かれて居りまして、一より十二の數字を用ゐるのでありますから、十三絃では、二の絃に合せ、三味線には、本調子三下り共に、二の絃に合せ、二上りは、三の絃に合せます、又尺八には、(レ)の律に合するのでありますが、彈曲により多少變する事があります、尚琴に附する總は、素より裝飾具でありますが、左の如き規定があります、

黑（初傳）　半紫（中傳）
總紫（奥許）　白（極傳）

先づこの位にして頂いて、詳しい事は、後日重ねて申述ぶる事に致しませう、

わりし世の須磨の浦曲もしのばれて
　しらべゆかしきいもがつま琴

挿花雜事

新瓢庵宗水

勉めて花を多く挿まんなど思ふこと勿れ、花多しとて、風情あるものにあらず、多く挿むと少しく挿むも花木の性質によるなり、取分け名花珍花などにはこの心得肝要なるべし、頼山陽曾て云へり蘭の花の多きは、美人のかんざし多きが如く、風情少し、些々たる一本のかざしも扱の如何に依りて英雄の鐵腸を湯にすべしと、眞に知言と謂ふべし、

凡て風情は不充分なる所に存す、花は半開酒は微醉妙趣は決して圓滿と伴ふものに限らざるなり、二三輪の椿一もとの水仙と古銅瓶に挿みたる、清素の風趣は之を九谷燒七寶燒などの花瓶に數多く挿みたると、その雅俗同日の談にあらざるなり、初心の人常にこの弊を免れず、意を注ぐべき事柄の一なり、

會席に坐次の上下を爭ひ、職役（花道の免許坐次の類）の高下を競ふが如きはめざましき業なり、世の名利の街に馳奔する事にても斯る所爲は賤しげなるものなるを、況て風雅の會交に斯樣の醜惡のふるまひは、返す〴〵も口をしき極と謂ふべし物事は必ず後れよとは、俳諧先哲のいましめときゝぬ

會席はいふもさらなり、たとひ門下の人に向ひても他の花の巧拙など是非すべきにあらず、何人も己の花を好しと思へばこそ、人にも見せ會席にも出すなれ、然るを其缺點を論ひあざけるなどは、何の益も無く、徒に人の感情を傷ふに過ぎず、假令その花拙しとて、我に於て何の妨も無きことならずや、況や己は之を缺點ありと見、拙しと思ふも、その内に如何なる情意の遇するも知るべからざるをや、蓮如上人も關屋船などにて、他宗他門を誹謗すべからずと戒められしとかや、

夜花を嫌ふと申すこといつの頃より云ひ初めけん、甚だ道理なきことなり、花は夜こそ特に愛でたきものなれ、金燭を把て見る金繍帳裡の夜花の妍なるは云ふまでもなく、短檠のかげに投入の梅花などの清

瘦淡雅なるは云ふべからざるの趣味あるものなり草木は夜、炭素を放つて衞生を害すとか、むつかしげなる枝影の壁上にうつりて、何とかなど云へるは風流を解せざるの言葉と言ふべし、昔は李夫人滿窓の眞と云へることさへありて窓壁の竹影を愛でしことさへありき、床の花に水したるが燭光にうつりて、露のきら〳〵と輝き、紅珠緑珠妍を爭ふさまの麗はしきは例ふるに言葉なし、ましてその花の色の紅白うち交れるなどは、一きはうるはしくめでたきものなり、

床の間に幾瓶も花を配列することは、啻に裝飾の體を失ふのみならず、花の美をめづるの心にも違ひ且つは何となくうるさげに見ゆるものなり、然れども眞の裝飾の時に爲するは對瓶などは、玆に云へるに限らざれば混ずべからず、時に世に用ひらるゝ文人花又は投げ入挿と云へるものは姿賤しきものなり、花の出生をも辨へず、自然にも背きたるが多し、これも上手の挿みたるは風情も趣致もあるべからんも、未た見しことなし、

座敷と花との配合は大切なる事柄なり、小間の閑寂しき床には派手なる花似付かはしからす、書院その他廣間などにて特に裝飾きらびやかなるには、わびたる花ふさはしからずや、こは草木の種類のみならず、挿み様も心すべきなり、

歐風の會食場、應接の間或は舞踏室など、盛花もわらまほしう思へる所に、流儀張りたる花挿みたるは分けて心ゆかぬものなり、若し斯様の席に挿花所望せられたらば、紅黄紫白取交へて派手に挿むを好しとす、

茶室の花に流儀に泥めるはよろしからず、無造作に投げ挿すをよしとす

◎談話の盜難　時々女鑑の投書にも古歌古句などを平氣で我物に投書し、偶には拙者も其盜難に遭ふたが、これは去八月一日の夜の事我宅へ梁上の君子訪問せられ、例によつて無斷にて拙者の財産を二風呂敷ばかり持歸りたるが、其うち手帳一册、これには西園寺侯をはじめ諸大家の高話を書附けあり爲に、相手に饒からぬ不便をも感じたが、盜難屆の被害品目中にもこれだけは洩しぬ(愛氷生)

樂界の二才媛

過般東京音樂學校を卒業したる優等生のうちに、二人の斯界新進の二明星と稱せらるゝ才媛を得たり、左に其姓行を記さん

▽成功は啻逈勉努力　久野久子(二二)は滋賀縣大津市字馬場農久野彌助の次女にて、九歳の折京都に出で、小學課程を履修の傍ら同地の宗匠に就き琴曲を學び、爾來八年間は琴の稽古に餘念なかりしが、不幸にも生來の跛に、搗てゝ体質極めて孱弱に到底普通の學業を修むるに耐へねば、寧ろ嗜好に投ぜし琴曲を極め不具の身を餘生樂しく送らん覺悟なりしに圖らずも、兄彌太郎(二八)の勧誘に任せ、東京音樂學校に入學の事となり、十八歲の際初めて上京、後一箇年豫科に在りたれど、更に素養なき事とて、洋學の趣味を解し兼ね、呆然日を過すうち、肋膜を病み、空しく一年有餘休學し、其間の靜養中、生甲斐なき不具の我が身上を深く悲むの餘り、既に幽鬱症に陷らんとせしが、又た自ら慰め此度は精力の總てを注ぎ、洋樂の而もピアノを研修し、力盡きて倒れんものと健氣なる心を飜し、病氣の稍や快癒を俟て、再び登校、夫れよりは愈よ本科生とし、幸田延子師が熱心なる指導の下に、ピアノの專攻に努めしも、容易く其趣味を領得せず、苦心慘憺只管勉勵し、學校にまた家庭に在りても、毎日寒暑の分ちなく、七時間宛は、必ずピアノに慿り温習し、餘暇には音樂と須要の學科に耽り、他の女學生の如く、遊散や駄本に暇を費す樣の事なく、唯只逈勉努力日も尚足らずと、不具の身の亦他に賴邊も無ければ、此處ぞ一生懸命と奮ひ勉めしに依り、其苦心の經營空しからず、僅々三箇年に著しく學ろ愕く可き發達を告げ、遂に今日最も巧妙なる樂手として知らるゝに至りぬ、畢竟技術の爰に至りしは啻だ克己逈勉の賜にして、尚後は此技を自らの生命とし、終生樂界に身を投じ、何事か斯界の爲め命を賭しても貢獻せんと所期せるぞ賴母しゝ、尚本月の新學期よりは、同校研究科に留まりて更に蘊奧を極むべしと、目下は下谷櫻木町に一戶を構へ、法科大學在學中の令兄彌太郎夫婦の三人、最も親密に樂しき生涯を爲しつゝあり、

△巧妙は天稟の性　河野秀子(二一)は、目下麴町區富士見町四丁目九番地に、實母さつ子と弟の三人暮しなるが、母は極めて和樂を好めど、父存生中は嚴しく差止められありしが、母が懇望に任せ、箏曲のみを許され、七歲の折初めて一番町なる今井慶松師の門に入り、稽古を積みしに、所謂栴檀は二葉より香しの譬に漏れず、當時既に中々の妙手を擬ひ、年長者を驚かす迄屢々なりしが、小學を卒へて後は纖弱學業に堪へねばとて、單に箏曲の研究のみ日を送りしが、無爲に消光するも詮なしと、三十五年同校專科に入り、一通りピアノを修め、父の歿後恰も同校本科に箏曲部新置され、教授は今井慶松師なれば、其儘留りて箏曲の習得に從ふ事とせり、然るに箏曲は敢て嗜好に叶ひしにはあらざりしも、爭ひ難きは天稟の性、是れを能くせしむるにて、日々二時間位の復習に過ぎざれど、今日は多年の修業とて箏曲の總てを涉獵し、疾くに免許皆傳となり、同校開始以來の俊逸たるは勿論、今井門下の最高弟を以て推稱さるゝに至りければ、今後尚ほ其奧義を探らむと勵み居るぞ尤もの次第なれ

雜録

讀書に就て

文學士　伊藤南陽

昔は日本でも、婦人が文字を知て居るなどゝいふと一概に生意氣と擯斥せられた時代もある、これは日本ばかりではない、西洋にもあつた弊である、何れの國でも、その歴史は、一度必ず斯ういふ關所を通過せねばならぬものと見える。

十八世紀の末から、十九世紀の初めにかけて、英國にゼーン、アウステンといふ名高い閨秀小說家があつた。かのウオター、スコットでも、マコレーでも頗るアウステン女史の才藝に服して居たといふことであるが、小說を書く時には、まるで偸む樣な鹽梅で以て書いたものである、常に小さな刺繡物を机の前に置いて、不意の來客でもあるといふと、直ぐこれで、隱して仕舞つたといふことである。

今日では、非常な天保老人（天保老人の中にも開けたものは澤山あらうが）を除けば、讀書をすることを、時間を徒消することゝするものは、先づ無からう日中家事や裁縫もせずに、書籍ばかり讀んで居るといふは決して讚められた話でもないが、閑暇があるのに、書籍も讀まないで居ると云ふは、如何にも情ない根性ではないか。

女學校そだちの、一時は勉强家といはれた婦人でも一旦人の妻となるといふと、何時のまにか、世話女房になつて仕舞ふ。新聞でも、所謂小新聞といふものと、大新聞といふものを二つ並べて置くと、先づ小新聞の方に手を出すやうになる、一枚の新聞でも一番先きに見るのは、續き物か、左なくば三面雜報であるといふは、能く人の話しに聞くことである。

こんなことを言つて無禮であるといひ給ふ方あらば

我等は深くその過言を謝するが、併し之が或はその實狀を穿つた說ではあるまいか。

若し之が實狀であるとするならば、なか〱書籍などゝいふ方へは、手が屆くまい、併し生は、何卒新日本婦人に、もつと讀書の趣味を持つて貰いたいと思ふのである。邦語の書籍もよろしい。歐文の書籍もよろしい。新書を買つて讀むといふは、新知識を養ふ所以である。平生讀書をせぬものは、男でも女でも、何處か下品で、話せない、話が兎角、下品な方へ落ちて行き易い。

書籍に就て、第一番に注目すべきは、書名と、著者の名と、出版者の名である。平生餘り讀書の趣味のない方は、直ぐに之を忘れて了ふ。けれども、讀書ずきの人にはこんな等閑なことはない。出版者の名を見て、議論の種類を推察する。

書籍に若し自序が付いて居るならば、何よりも一番先きに之を讀むのが至當の禮儀であらうと思ふ、之を讀まな　で、直ぐと本文に取りかゝるのは、玄關で暫らく御待ち下されといはれて居るのにつか〱と客間へ這入り込んで行く樣なものであらう、無禮ではあるまいか。

書籍を讀むに、その取扱ひ方は、隨分注意せねばならぬことである、書籍商は、客の來つて、一寸書籍を開くのを見れば、もはや其人が丁寧な藏書家であるか否やといふことを識別するとのことであるが、書籍を亂雜に扱ふといふのは、甚だ善くない癖である。一度讀んだばかりで、最早綴目を切らし、紙をばら〱にして仕舞ふ人がある。又一度見たばかりで、百年も讀んだかの樣に折目をつけ、手垢をつける人がある。神經質のものには堪へられぬことである。

書籍を讀んで、一息休まうといふ時に、紙を折つてその記號にする人がある。これも餘りに感心せぬことである。願くば、こんな御手傳ひを假らずに、ちやんと記憶に、何十何ページまでと刻み込む習慣をつけたら如何であらう。

書籍の大事にすべきものなることは、衣物や道具の大事にすべきと別に替りはあるまいと思ふ。衣物には、一點の汚垢でも付くとなか〳〵之を氣にする、陶器や、塗物に毛筋の樣な細い創でも付けば、心配をするではないか、それと同じ樣に、書籍も又大事にすべきである、殊にそれが、他人からの拜借物であるならば特別に注意せねばならぬ讀書の弊も、少し擧げて置かねばならぬ、一、不注意に急讀するは善くない。二考へないで、慰みに讀むは善くない。たとへば、解り易い小說の樣なものばかりを讀んで居る人は、その理解力が追々鈍つて少し眞面目なものは、讀みたくない樣になる。三、何かせねばならぬことがある時に讀書をするは、善くない。母親一人に臺所も、洗濯も皆させて置いて自分一人書齋に居るは、子の本分であるまい。

日々の新聞と、種々の雜誌とは、一應讀まねばならぬ。日々の出來事は、人類進步の階段で、之を承知して置くのは、少し言方が強いかも知れぬが人類の義務だ。どんな大發明があつたかどんな戰爭があるか、之を知らぬは、隨分間の拔けたものだ。

要するに書籍は讀まねばならぬ、それには相當の注意を要することを忘れてはならぬ、

女學生一日



（其の八）奏樂

男女兩性心理上の差違

(一)男性には理の人多く、女性には情の人多し、是れ一般に認むる所なるが如し、世には道理に富める女、涙に脆き男なきに非らずと雖ども、是れは寧ろ例外と云ふべく、概して言へば、古來新勢力を發見し、新器械を發明する等は殆んど男性の領分に屬し、慈悲博愛に從事し、温き家庭を造る等は多く女性に待たざるべからず。

(二)男性は概して義に傾き、女性は概して愛に傾く、古來の歴史に徴するに正義の爲に愛情を犠牲にするは、男子に多く、愛情の爲めに正義を破るは婦人に多きが如し、一家の中にも父を嚴父と稱し、母を慈母と稱す、殊に我國に於て此傾向あるを見る。

(三)男性は快活にして、女性は温順なり、是故に男性は外交に長し、女性は内治に適す。

(四)男性は分析的にして女性は綜合的なり、學校に於て男女兩性の成績に徴するに、男生徒は比較的に科學に關したるものに良好にして、女生徒は概して文學に關したるものを好む、科學は分析的の學問にして文學は綜合的の學問なり。

(五)男性は創始的にして女性は模倣的なり、例へば一の外國語を研究するに當り、男性は文典に長じ、女性は會話に長ず、男性は自ら事物を創始するの才あり、女性は既に存在せる事物を模倣するに巧なり、女性に音樂家の多きは其性質に於て模倣的のものなればなり。

(六)男性の觀察は粗大にして女性の觀察は緻密なり、男性は事物の大要を觀取するに留まれども、女性は其位置、形狀色彩等の細末を觀察す、啻に觀察するのみならず、又能く之を記臆す。

(七)男性は興味多岐に渉るも、女性は或る一事に集中す、故に大局を見て多面の事務を整理するは男の手腕に屬す、心を一事に傾注して之を完成するは女の長所なり。

(八)男性は發動的にて女性は受動的なり、是れ動物の通性にして、凡ての進化論者の論證する所なり、人間の社交に於て多く此現象を見る。

(九)男性は放散にして女性は執拗なり、故に忘恩の惡徳は男性に多く、怨仇の念は女性に多し。

(十)男性は寧ろ放任主義を守り、女性は頗る批評的なり、男性は觀察力の鈍き丈け、其れ丈け批評眼も鈍し、女性は全くこれに反對の傾向を有す、右は一般に就て述べたるのみなれども世間まゝ男性にして女性の性情に富むものあらん、女性にして男性的の性癖を有するものあらん。されど男女に就て多數の性質を對比すれば如上の如し。

大陸の歴史と賢母

淺岡一

上

濠洲は今日立派な大陸として、五大洲の一ツに算へられますが、此大陸に光を現はしました、或賢女と其經歴とが、之が濠洲唯一の歴史でございまして、此外濠洲には、歴史は無いと申しても、決して誣言では有るまいと思ひます

此賢女、財産とても持ちませず、他人の力をも借りませずに、英國政府や、各種の移民會社が、此地に施設致ました、殖民事業よりも、同じ事業の上に、偉大なる功績を現はしました。抑も英國は印度及び大邈三島其他の邦土をも併有致しまして、其の殷富其の人口、其の勢力、共に世界第一と稱せられます程の大國でございますから、濠洲の殖民事業の爲には、富をも、人をも、力をも、費しましたが、一通りではございません、それさへ事業は中々擧りませなんだに、此の婦人の單獨の力が、能く其事業を成功させましたと申すことは、取りも直さず、此婦人の至誠と、忍耐力とが致したわざで、其德澤は實に宏大無量とも申すべきことゝ思はれます。

我々は世の人々が斯樣な人に對して、眞誠に尊敬の意を表せられたいと希望致します。大勢參りまして中には慈善事業杯を企てた者の無いことはございませんが、此婦人の樣に如何なる艱難辛苦でも、物の數とも思はず、永の年月間一日の如くに奮勵して志を遂げた樣な人は、一人もございません、して見れば此婦人の至誠と忍耐力とは、遠く世の人の上に超絕して居つたに相違ないことゝ信ぜられます。

さて此賢女は、名をカロリナーと申しまして、ノルサントン伯の、所有地内の農家に生れました。それが丁度一千八百年頃のことでございました。其後二十歳ばかりの時に、印度商會の傭兵士官に歸ぎまして印度に參りましたが、英國の田舍で正しき風俗の地に生れ、誠實なる家庭の中に、成長致しました『カ

ロリナー」で、ございますから、風俗の壞敗して居る、兵舍の内に住みまして、見るに忍びないことを見、聞くに忍びないことをも聞きまして、甚しく不快な感じました、元來此の兵舍と申しまするは今日の鎭臺杯の樣に、軍人のみの居る所でなく、凡そ英國から移りましたものは、如何なる種類の男女でも、住居することが許されて有て、亂暴人も有れば狼藉者も有り、殆んど無賴の男女の集會所とも申したい樣なものでございました、斯樣な有樣でございましたから、本國から參つた軍屬やら、吏員やらの女でも、不幸にして、親な失ひますれば、マアドルの市街に、棄て賣りに賣らるゝ樣な、悲慘なこともございました、カロリナーは面り此悲慘の樣を見て、堪へ難く感じまして、斯樣な不仕合の女兒をば自ら貰ひ集めまして、自分の營舍の中に、溢れる程大勢のものを、養育致しました、されば近隣の人々は、カロリナーの、此所爲を見て、瘋癲者と疑ひ、又は物好者、馬鹿者と笑ひ罵る樣なことでございましたがカロリナーは、人の誹謗などは耳にも懸けず、氣にも留めず、一心不仕合せな女兒を、養育して少しも怠りませなんだ、然るにカロリナーは已むを得ない事情で、印度を去らねばならぬ樣なことに成りました、所がカロリナーの精神は、神明にも通じたと見えて、此營舍が、皇立孤兒養育院と成つて、後々まで殘りました。

カロリナーの良人、大尉シソルムが、病氣に成りまして、此保養は氣候のよろしくない、印度に居つては、到底出來得ませぬから、寧ろ濠洲に移つて氣長に治療を加ふる方が肝要ぢやとの醫師の勸告に從ひまして、一千八百三十八年に、夫人及び三人の小兒と共に、濠洲に移りました、(カロリナーが已むを得ない事情が有て印度を去らねばならぬ云々とは 即此事でございます、數日を經てシソルムの病氣は癒りまして、印度の任地に歸らなければ成らぬ樣になりました。けれども此濠洲の風俗は印度に比べて、猶數十等も劣つて居りまして、淫猥汚醜、暴亂、凶惡

何とも名狀することの出來ぬ位な有樣でございましたから、印度でさへ忍び兼ねたカロリナーが、なんとして、之を看過すことが出來ませう、是非とも此地に止つて、世の爲人の爲に、此風俗を改めさせたいとの、大希望と、大決心とを、起しました。

今の世の人々は首府のシドニーでも、其他の地方でも、皆通常人の移住したものではない、當時英國政府が流刑人やら、徒刑人やら、多くの犯罪人を驅逐して、此に殖民したものぢやと申すことを知りますまいが、實に此殖民の多くは罪人の移されたものでございますから、男子のみ澤山有つて、女子の數は甚だ乏しくございます、是は其筈のことで、何處の國でも、女子の犯罪人は男子に比べますと、五分の一乃至十分の一でございますから、從つて濠洲に移されまする流刑人やら、徒刑人やら、何時も其割合で男子のみ多く參ります、又通常の移住民でも、矢張男子の方が割合に多くございました、それ故女子は大に缺乏を感ぜられて居りました、斯樣な譯でございますから、たま〳〵女子に移住者を載せました船が、濠洲に到着しますると、其歎呼の聲は非常でございます。又其歎呼の語杯は、耳に入るさへ氣分を害する程卑陋を極めて居りました。恰も飢渴に迫つた賤民が、飮食物を見て、喧噪を極めますると同樣ぢやと評した者もございました。右樣でございますから、此地方の人民が、女子に對する亂暴の行爲は、如何にも有りさうなことだとは、我々の說をお聞きに成る方々にも、殆んど全く推測が出來やうと思ひます。斯樣な有樣でございますから、移された女子のみではございません、官吏の家内でも、良人不在の時には、餘程嚴重な用心を爲なければ、安心して家に居ることは出來得ません次第でございました、流刑徒刑の婦女杯は、毎日毎日創傷するやら、病に罹るやら、死ぬやら實に悲慘の狀は、言ふに忍びない程でございました。

婦女子が斯く悲慘の狀を極めまする樣になるも、幾分か其原因が無いとは申されません、當時英國普通

の女子は、自活の精神、自活の業務、自活の藝術、自活の智識抔と、申すことは常に教へられて居つた者は殆んど全くございませんから、濠洲に移りましても、何事もすることは出來ませず、徒然に苦む樣なもの丶みが多くございまして、其長所と申しますものは、僅に小兒の保育と、割烹のこと位に止りました。然るかはり、甚だ柔和で、甚だ愛らしく、見識を高くして毅然たる風采を持し居る抔と、申すものは一般の女子には、先づ無いことでございました其内既婚の婦女は物馴れて居りますから、此活地獄の中に棄てられても、痛苦を避くる分別も致しましたが、未婚の女子は不幸なることには、正しき道を踐で生活することは、甚だ困難でございました。世人は當時斯樣な女兒を形容して、喪家（家を失ふ義）の犬と申しました、そは喪家の犬が此處彼處に迷ひ居て爲すことも無く日を送るにたとへて、誹しつたものでございます。

婦女の中でも、此地に生ひ立ちましたものは、其位置は移りましたものと、同樣に危險な譯でございますけれども、小兒の時より此地の風俗に馴れて居りますから、中々に言語應答も出來男子の暴横に、默從する樣なことは少くございましたが、英國から參りました女子、就中愛蘭の女子は、男子の亂暴を防ぎまする氣慨もなく、言語もなく、武器もなく、誠に嘆息すべき樣なことが多くございました、されば此汚辱を自ら慰めます爲に、果は酒を嗜み毎日醉を貪る樣に成つて參りました、

玉乘見物の所感

愛氷散士

名を聞けば恐ろしき淺草の奥山、狒も居れば、獅子も居る、といふは見せ物にもせよ嘘にあらず、そこに玉乘といふもの丶興行がある、

この一座を江川といひ、男は二十一二を、女は十七八を頭に約二十人ばかりの演藝者がある、玉乘が賣

物で、綱渡り、宙飛び等、一日に其數を仕切れぬほどの藝がある、

その藝を説明するには、本誌は適當な舞臺でないから、藝が與へた所感を、いさゝか記述することゝせう、

一　勉强はせねばならぬ

演藝者の年少者は十歳内外で、球にも乘り、宙をも飛び、笛も吹けば、太鼓も鳴らす、口上をも述べる、いかに敎へれば斯く覺えたものか、敎へた人の心は鬼にもせよ、既に客の足を引くものとしては、客の滿足を買ふにつとめて、一藝にして既に木戸錢以上の藝を、極めて忠實に、極めて熱心に、工夫に工夫を重ねて、日に數十回目先を變らし、演者交代、殆んど幕なしの有樣にて、一日の見物に膝の痛さを覺えしめぬは、予は營業として、この玉乘一座あるを喜ぶものではないが、其營業者の心掛としては、甚だ感服に堪へぬので、いづれも自身の不幸をも知らぬ顔に、笑ましげに其職に當つて居る心事は、世人の多く學ばねばならぬ所であらうと思ふ、

二　中心を取るが唯一の財産

數十番の演藝、其仕掛を見て既に膽を寒からしむる者のみで、悉く千番に一番のきはどい藝でないものはない、一たび過てば、二度つなげぬ玉の緒も臺なしと思ふばかりであるが、綱を渡るとすれば、左右に倒れぬやうにと練習した中心のとりやうは、いづれにも應用して、見上るばかりの棒の上に逆立したるが、過つて倒るゝとしても、中途にて身體を支へられる丈の工夫は出來て、一度も身體に傷を負うたものはないのである、單純なる身體一つを、中心のとりやうに依つて、數十番の、目先の變れる演藝となるのである、その藝は彼等無敎育者によつて工夫されて居る、人間書を讀むは苦の初めなど、いたづらに世の中に煩悶して、何等爲す所もなく、空々漠々に日を送るものは、此玉乘一座に對しても、大に耻づべきことゝ思ふ、

三　信用の大切なること

すべて事を成すには、信念が第一である、信念の缺けた仕事は、極めて薄弱なものである、空中高くブランコの裝置をなし、その撞木に板を渡して、その板の兩端に一人づゝ或は立ち、或は坐し、或は逆立し、或はブラ下りして、相互に中心をとつて、それ〴〵客の視線を引く藝を演じて居る、この時いづれにても中心をとり損ね、其他萬一の事があれば、相手は甚だ危險な目に逢はねばならぬ、併ながら此演者にして、萬一を懸念し、些の恐怖心が起れば、忽ち中心を失うて、秒時も演藝の出來るものではない其他梯子乘の如き、足藝の如き、二人にて中心をとり合ひ、一藝を演ずる場合は、相互に信念が深固でなければならぬ、故に事を爲す場合に於ては、先づ其事に信念を拂ふべきや否やを確め、然る後些の疑念と恐怖心もなきやうにして、それに從はねば、到底仕事らしき仕事は出來ぬのである、この點に於て玉乘は大なる敎訓をして居る、

四　すべてを美化せよ

月の光は曖昧なもので、日の光の如く公明なものではないが、日の光はあまりに露骨に過ぎるので、或場合には、月によつて其趣味を增すものがある、小川に棹さす一小舟の、晝見ては何等の風情のないものでも、月の光に映出されて、甚だ好趣を感ずることがある、實に月は景物を美化するに於て、大に愛翫せられて居る、玉乘の藝も、極めて殺風景なるべく、無風情なるべきものを美化するものである、其美化力が入神の藝によつて起るのである、斜めに懸れる高き綱に、一少女之に攀ぢ登るとすれば、中々富士登山どころの話ではない、そを想像するも甚無氣味である、然るにいざ之より登るとなれば、美裝したる少女、些の浮雲氣なく、頂上に登り、此度は兩爪先にてツルリと綱を下る、彼はなぞらへなして星下りと謂ふ、其輕妙なること人間の業とは思はれぬのである、綱の上にあることが既に危險であるに小劍を綾に振る、或は足にて番傘をあやつる、その小劍といひ、番傘といひ、甚だ非美術品なるに拘ら

す、彼が藝に乘れば、恐怖の念は既に去つて、極めて優美に感じらるゝのである、殊に予の見たる時の如き、夕日の空に入亂れたる小劍にかゝやけるなど得も云はれぬ美觀を呈したのである、現時の女學生が、動もすれば言葉さへも美しくすることを得せずして、其人格を醜化する如きは、大にこの玉乘の藝を參考すべきであらうと思ふ、

五　力を協はして働け

淺草公園は、東京に於ける、小兒の耳乃至目口の正月をせしむる第一の場所である、殊にこの玉乘の演藝は、小兒を第一の顧客として居る、氣取る念を去らば、實際小兒をして喜ばしむるは、この公園中此右に出づるものはあるまいと思ふ、小兒は物に飽き易いもので、中々一日の辛抱をせしむる藝は少い、然るに此の一座は、この第一の小兒客を飽かしめぬやうにと、一座大車輪であるが、舞臺は、樂隊と、口上者と、後見と、演者の四者より成立つて居るがこれが座中悉くどの役をも勤められるので、今口上を述べたもの、次には樂隊に廻はり、今樂隊中にあつたもの演者となり、又後見となるなど、一人として手を休めて居るものはない、どれ一人役不足を喞つものもなければ、だれ一人無事に苦んで居るものもない、一家を處理するに於ても、一日の仕事を充分に見積つて、互に手の明いたものが助くるといふやうにして、役不足を喞つものと、無事に苦んで居るものゝないやうにすれば、必ず家政は擧つて、愉快に團欒し得られるであらうと思ふ、玉乘はこの點に於ても、大なる敎訓を垂れて居る。

富と仁

女子商業學校教授學監　嘉悅孝子

どなたもお讀みになりましたらうとおもひますが、彼の可愛いセドリックのお話。富と權威とをもつて唯一の武器の如く心得て居られる老公爵の最初の境

過を思ひますれば、仁なき人の心ほど淋しいものはないと云ふことが、先づ感せられる一大教訓と思ひます、

彼の老公爵は、自は莫大なる富を有し、おそるべき權威を有し、自の前には、此世に何物をも頭を下げないものはないと思ひ、自の心の行くまゝに、多くの人を酷たらしく待遇してゐられました、その罪の報いとして、さしもにきらびやかなる殿堂にも、眞に孤獨の人となり、侍女よりはじめとして、總ての人にすてられてしまひ、もう此世に同情の光といふものが、此老公爵の身のみは、全く照らさないやうになつてしまいましたと云ふお話、

セドリックは可愛い子でありました、思へば天使のやうでありました、不幸にも父を失ひて、身はまづしきに生ひたちながらも、其天稟の聖き心と、その親の優しき情とをうけてそだてられたる彼は、何者にも同情の念燃ゆるが如く、まことに愛と仁との化身とも云ふべきもの、

セドリックの母は、眞に優しい女でありました、アメリカ育ちで野卑だと老公爵はのゝしられましたが其實上品で、從順で、どこまでも女らしい女でありました、如何なる情をもよくおさへ、如何なる苦痛をもよくしのび、如何なる場合にも從容迫らざる女でありました、

此天使の如き子と母との仁の勢は、やがて老公爵の邸を襲ひ、老公爵の身をおそひ、老公爵の心まで遂におとしいれて、此を占領するやうになりました、老公爵は同情もなき、光もなき慰めもなき富と權威との勢力が、殆んど身を樂ましむるには、甚だ弱きことを悟りて、もう此世に希望も何もなくなつてしまひ、遂に闇黒の巷にさまよう身となられた時、此聖き母子の仁愛は、忽ちにして老公爵の前途にまばゆきばかりの光明をわたへたではありませんか、此に於てはじめて富も權威も、爵位ゝゝべて、眞の富眞の權威、眞の爵位となつて、人生に役にたつものとなつたといふお話、

廣く世間を見わたして見ますれば、多くの人は富や權威をもつて、生涯の目的としているもの丶やうであります、ならうことなら、是非ともそれ等の地位にのぼつてみたい、そして衆人に羨まれたい、それは人の通有性として許すべきことでありませう、しかしながら途中に出あふ黒塗馬車の中には、色甚だよからぬ方が、愁眉尚ほひらけずして、心には限りなき悲みあるもの丶やうに見うけることが往々あるところであります、此から察して見ても、人間の富と權威等が必ずしも生涯の目的でないことと、又人生の慰めとなるものでないことが云はずとも明かなることでありませう、

それでは富は役にたゝないものであるか、いゝえさうではありませぬ、大に役にたちます、人として此の世にある間は、必ず大に富まなければなりませぬ出來る事なら世界の富を一人にて有する程の大志望をもつて、富まむことをはからねばなりませぬ、しかし乍ら富そのものを此上もない人間生涯の目的だと心得てはならないのであります、

即ち富には必ず仁が伴はねばなりませぬ、富を得るの目的は仁者たらむためなることを心得ねばならないのであります、彼は富、我は仁とは此處のことであります、富を目的とせる多くの人は、其根氣次第では、必ず富むことを得ませう、權威を目的とせる多くの人は、其忍耐と勉勵との結果、遂には權威を得ることでありませう、しかしながら此等の人は、其目的を達しても遂にはほろびないである事はありませぬ、御覧なさい、仁を忘れて富める人は、必ずほこり、ほこれば必ず放逸に流れ、放逸なれば必ず墮落し、墮落の次には身をほろぼし、家をほろぼすに至ります、

露國は富を目的として、仁を忘れ、徒らに人を酷めて領土をひろめやうとして、遂に破れ、日本は仁を目的として富を忘れず、人を救うて、領土を得ました、これ一途の目的のわかるゝところであります、此敎訓を忘れないで、仁と富とを得ることにつとめね

ばなりません、二者衝突する時には、むしろ富をおすてなさい、それでこそ聖者の教へにかなひます、

老女村岡（下）

橘　終　子

たゞいとよく覺え居るは、或日大びやうなる武士の伴人をも携へざるが、つとたゝずみて村岡や居たまふわれはしかいふ者ぞとて、大島吉之助と記せる名刺を出しければ、其よし村岡にきこえたれば、さてはきゝなれぬ人の姓名かな、誰ぞや、ともかくもこなたへと請じて、まづ打みれば西郷にてありけるを村岡いたく驚きて、さては御身まだ世にながらへおはしゝか、成就院どの（清水寺僧月照）と入水せし人のけしうもまゐりたまひしよな、といへば、西郷おもむろにされば、一旦成就院どのと死を約し候ひしが、法師は水心しられねば、いと脆う果て給ひぬ、おのれ其屍をひしと抱きて三日三夜海上に漂よひてまた世に歸り來りぬ、されど人目を避けん爲大島にありければ、今は大島吉之助と改めさふらひぬ、さてもよき處にのがれすみ給ふかな、いと羨やましくおぼゆとて懷紙とりいでゝ

長月の廿日に村岡矩子のいほりをたつねはべりて

此に來てきかまほしきは秋の夜の
　長尾の山のさをしかのこゑ

と記して、をかしき調べにてそとさし出したまひしなどは、側にて見居たりしかど、あとは酒肴の用意すとて得きかず、口をしきことしてけりと語りたまひぬ。西郷の此のかたへおとづれたまひしこと前後すべて三たびなりしとぞ。

先の直指庵おとろへて、寶物どもあまたいづれへか失せ盡きたるを、村岡この寺を再興すと傳へらるゝや、此かしこより還り來れるがあり。中にも重なるは、隱元の筆なる直指庵の扁額は尾州家より、又祥鳳山と記せる隱元の筆なるは伏見なるあるかたより

返され、什物蔵に満ち、老少男女此に集ひて、誠にふるき名跡をつぐべき榮を見るに至りぬ。妖雲空にたちまふこと十とせあまりにして、世は再ひ晴天の日を仰くべき幸ある運に向ひぬ、村岡今は心の憂なごりなく晴れて、閑に餘生を樂しむこと猶多年なりしが、願ふところは、力の限り人を憐み助くるにこそとて、ひたすら村民を賑はしいたはりたまひしかば、人皆親の如く敬ひ、今に至る迄其餘徳をしたはぬはなしとぞ、誠に稀世の名婦なりけり。其米字のよはひを重ね給ひし時の歌に、

天の下めぐみの露のかゝる身は
よろづ代かけて年をこそつめ

といへるがあり、のどやかに樂しげなる心あふれたるやうなり。歌のしらべはさすがにたしかなれど、年頃の心づかひいみじかりければや、此の二とせ三とせはさながら稚兒のやうにあどけなく、又物忘れしたまふことをかしきさまにて、病むとしもなくこもりがちにておはしけるを、みけしき例ならずと、人あまたつどひ來しに、只すや／＼と眠りて一言のいらへだになきを、近衛忠煕公心安からずおぼして懇にその仰きこえたまひし時のみは、たゆげなる身にて起きかへり、さしうつぶきて、畏こみて、其命を聽き終へたまひしといふ。さる心ありてこそ生涯を其君にさゝげて、賢き名を世にあげたまひしなれ、といとたふとくぞ覺えし。明治六年八月廿三日秋立ちて桐の一葉にあはれを知るころ、一もとの芝蘭もろく破れて、たゞその餘香のみ今にゆかしくもそのかをりをとゞむ。

庵後の丘にそひて行けば、さゝやかなる石ぶみありて、津島氏村岡矩子墓とあり、いとあはれなるまで見ばへなしといへば、壽仙尼の君、されは村岡存命の折より自らこをしつらへ、さて吾等を戒めていふやう、石碑を大きく立つるはいと要なき事なり、吾が亡きあとに人のとやかくといはんは心もとなければ、今よりはかく營みおくなるぞ、佛事供養も表だちたるは皆いはれなし、只つとむる人の心によるな

れ、ゆめ吾が爲に徒なることすな、とは返すぐゝもいひ置き給ひきと語らせたまふ。かゝることいと多く尼君よりきゝぬ。その有りがたき心ばせには、胸せまりて、まこと人を泣かしむる力ありけり。去る三十五年八月廿三日にはおのれら幸ありて其三十とせの忌を直指庵にむかへぬ、感慨大方ならず。いかなる道によりてか眞心を手向まゐらせんとて兄の君と一日百首の歌よみたり。其日の事ともまた別に書きつくへし。

歌人逸話

大川城山

一　細川幽齋

幽齋は、彼の古今傳授につきて、名高き歌人なり。朝鮮征伐の時、傳授の箱を烏丸光廣卿の許に預け、且つ一首の歌を添へて、

人の國ひくや八島も治りて
ふたゝび返せ和歌の浦なみ

もしほ草かき集めつゝ跡とめて
むかしに返せ和歌のうらなみ

光廣卿の返し

萬づ代とちかひし龜の鏡しれ
いかでかあけん浦島が箱

干戈治りて、幽齋凱旋の折、光廣卿、かの箱を返さんとて、

あけて見ぬ甲斐ぞありける玉手箱
ふたゝび返す浦島がなみ

幽齋喜びて

浦島や光りを添へて玉手箱
あけてだに見ず返す波かな

關ケ原の役、幽齋、東軍の爲に、其本國、丹波田邊城に立籠り、石田方に攻め寄せられ、既に危く見ける折、敕旨を奉じて、彼の箱を朝廷に返しまつり

古も今もかはらぬ世の中に
こゝろの種をのこす言の葉

と詠みたりしは、普く人の知れる所なり

二　望月長好

長好は、京の廣澤の池畔を喜び、一庵を作りて『さゝの屋』といふ

この秋もまた世に通ふ草の戸に
させてふ虫の聲ぞかなしき。

秀歌なりとて飛鳥井雅章卿、殊に感せしとぞ、又或時に

今日もまた垣根のうばらつたひきて
しも踏む鳥の跡はありけり。

故に其やどりを人また『霜踏む鳥の庵』とも呼びたりとなむ。嘗て、人の許へ、庭の栗を贈りて、

つらかりし寢覺の音もわすられて
あくれば拾ふ庭のさゝ栗

幽居のさま、思ひ遣らるゝ。

三　小澤蘆庵

蘆庵は平安和歌四天王の隨一なり。天明の火災にかゝりて後、太秦に假住居せし折、或夜、盜賊來りて遣戸をあけんとす。翁とく知りて、腹卷を着、長刀を拔き持ち、入らば討たん勢ひありければ、盜賊ども恐れ得入らで、歸りね。其次の夜も同じ樣なりければ、

ありそみの岩ほてゞしみ越えかねて、
よな／＼かへす沖つしらなみ。

或友の錢三つ借らまほしと云ふあり。折しも翁の許にあらざりければ、隣の家にて、借りてやるとて、

くやしくも難波のあしのみつをなみ、
こと浦かけてからしつるかも。

いはゆる應聲而成の妙を得たり。

四　熊谷直好

直好、京に出で　、景樹の門に入る、景樹其歌才を愛し、詠草の後に、

みにならむ秋を思へば小山田の、
いね難きまでうれしかりけり。

果して、桂門十哲の一人となりぬ、近江湖水の畔に遊びて、

吹くは笛うつは皷の音にして、
　はるの海邊は波風もなし。

其妻不貞の事あり、直好、余事を言はず、唯用向に托し、妻をして實家に赴かしむ。其父、書信を披き見れば、一首の歌あるのみ。

　蔦かづら己が住家にすみあきて、
　　となりの軒に色づきにけり。

五　野矢常方

常方、蓼園と號し、會津の藩士なり、尤も人口に膾炙せる歌は、

　櫻井驛楠公父子訣別
君がため散れと敎へて己れまづ
　わらしにむかふ櫻井のさと。

　月前逍遙
月きよみうかれて宿を出でしかど、
　おもへばさして行く方もなし。

六　石川依平

依平は、遠州佐野郡の人、幼にして奇童の譽れあり

六歲、和歌をよむ。掛川侯聞きて、城に召し、題を賜ふ。依平、直に、

　川千鳥
川波の音もさびしき夜もすがら、
　友よびかはし千鳥鳴くなり。

　野冬月
風さむみ野べの千草は枯れはてゝ、
　霜にきえゆく冬の夜のつき。

後、栗田土滿の門に入り、國典を修めて名あり。歌集を柳園集といふ。

七　穗井田忠友

一年、雅人の會ありけり。二三のもの、香川景樹を惡み、之を呼びて恥しめんとす。景樹病と稱して行かず、門人、忠友をつかはす。人々、本意を失ひけるが、よしさらば、其弟子なりともさいなまんとて忠友を席に呼び入れ、たゞ一ひら殘しおける松の下に蛇の居る畫を投げやりて、これが歌よめと云ひけり。忠友いたく困じたる體にて、わざと、いなみけ

るをひたぶるに責めければ、さらば試み侍らんとて俄に居直りて、さら〳〵と一首の歌を書き流しぬ。人々、いかなるたわ言をか、うめき出でけんと、讀み下せば、

　松が枝を千歳とたのむ山鳩の、

さてこそ、たわ言と、尚、次を見れば、

　　ねぐらの雛や思ひかけゝむ。

思はず、どつと賞めける聲に、我執の鬼も、行方知らずなりにけりとぞ。

八　伴林光平

光平、始め眞宗の僧侶なり。或時淀川を下りしに、船中、一士人あり。共に佛典及び儒道を論ず。忽ち士人に説き伏せられ、大に悟る所ありけん、其門に入りて、敎を受けんことを請ふ。士人曰く、船中匆々何を以て契を結ばんやと。光平しばらく呻吟して曰く、光の字は、本願寺の諱にして、眞宗僧侶の忌みて用ひざる所、拙者今より光平と名乘るべしと。士人其言を奇なりとし、共に因幡に連れ歸りぬ。後飯田秀雄、加納諸平に就きて國學を修む。これより頃に敬神の心を起し、文久二年、中山忠光卿の南山の義擧にくみす。軍敗れて捕はる。其時よみし歌とて、

　楫をなみ乘りて遁れむ世ならねば、

　　岩船山もかひなかりけり。

この岩船山は葛城生駒の同じ峯つゞきなり。さて、光平は久しく奈良の獄舍につながれ、つれ〴〵なるまゝ南山踏雲錄を著はして、思ひをはるけしに、元治元年、京都に移され、程なく身まかりき。

九　伴香竹

美作の人にて、和歌を善くし書に巧なり。初め長劔を横たへ、四方に周遊して常陸に至る、德川光圀之を召し、歌をよましむ。時、明月皎々なりしかば、直に筆とりて、

　さゞ浪の八重にたゝめる樓の

　　手にとるばかり見ゆる月影

光圀之を安藤爲實に示す。爲實一見稱嘆して曰く、

この歌體、凡人の詠じ得べきにあらずと、遂に水戸に仕ふ。晩年、中風を病みて歿す。

辭世

今までの武平は石に身をかへて、
歌もよまれず物もいはれず。

蓋し武平は其通稱なり。

一〇　野村尙房

尙房は岡山の人、一枝軒と號す。常に云ふ、源氏物語は擬し難し。それより後、上手といはるゝ人少し近頃の木下長嘯子一人のみと。因りて擧白集の和歌は取らず、其文のみを學べり。

歲暮

最上川うきていつまで稻舟の、
のぼらぬ瀨にもくるゝ年なみ。

述懷

稻舟のいなと答へむ最上川、
わが登りゆく道はありとも。

致仕、市に隱るゝ時

さわがしき市のとなりにかくれ家は、
ならぬ瓢のかせはいとはじ

一一　谷崎勾當

勾當は江戸本鄕の針醫にて和歌を善くす、儒者室鳩巢、多病にて屢勾當を招きて治せしむ。且つ其才を愛す。勾當死せし時鳩巢爲に悼詞を作りきとぞ。

辭世

今日までもわたり來にける世の中を、
思へばはかなき夢のうきはし。

怒といふこと

柳子仲

怒は人類の有する七情の一つであつて、其發動は槪して他より仕向けられたる害惡より直接に受くる處の感觸で、或は即時に之れが報いを發するも、或は之れ直後日に果すものがあります。

怒は七情の中最も方則のない情慾で、適宜に之れを

制御する事は、性情の修練に甚だ緊要なものであります、これ古今聖賢の務めて戒飾せられた所以であると思ひます、

で怒には自づから、其品別がありまして、一朝の怒故なきの怒、寛仁の怒、これ等であります。

これ等の怒に對して、直に言語動作を報ゆる事なく表面冷然として其發動を抑へ、永く其怒を蓄ふるものがありますが、これを即ち忿といひます。忿は多く、復讎、剛愎、陰險の情を含むもので、長時間にこれに報ゆるの道を講じ、遂に其酷薄の擧を敢爲して、さきに抑へたる痛苦を去らんとするに至るものである。

女學生の一日



（其の九）散歩

怒は吾人の有する喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲の七情中にあつて、吾人は喜ぶべきを喜ばず、哀しむべきを哀まず、懼るべきを懼れず、愛すべきを愛せず惡むべきを惡まず、欲すべきを欲せざるが如きことでは決して有情の人とは云へません、然らば有情の人なるが故に怒るべきに怒るに於て、何の不可かあらんといふ人がありましよう。

『アリストートル』氏曰く、

吾人は眞に怒るべき件に當つて、怒ること能はざるは無情の人なり、此の如き人は、正直なる憤激

の何たるを知らざる愚鈍の人なり、必要に望むで自衛防禦の義務を完うすること能はず、即ち勇ての感情を有せざる奴隷的卑屈の人であると。

誠に左樣である、乍然、無情、愚鈍、卑屈と忿怒、剛愎、復讎、との中庸を得る事は殆んどなし難き事であると思ひます。

『ホレース』氏のいへるが如く、

怒は一時の狂なり、善事にあらざるなり、怒は最も恐るべき惡鬼として之を斥くべし、此惡鬼一度心中に入りたらんには、遂に心中を永住の居となすべしと。

次に一朝の怒とは、忽ち生じて忽ち止まるものであつて、其感情の融和を得るや、眞に平心に復し、光風霽月、一點の介するものがないのである。これ即ち其の性情の良點といふべきものであると思ひます然らずして、一朝の怒の爲に毫も其怒を制馭する事の出來ない人があるが、これ所謂、一朝の怒の爲に其身を忘るゝもの即ち之である。

故なきの怒、怒の發動は、他人の我に對する行爲に基因すとしたならば、吾人數千の人と交る、其發動の時は、豫め知る事は出來ない、而してこれに對するに方則のない情慾を以てしたならば如何であらうか、これ平生の修養を要する所以である、即ち故なきの怒とは、怒るべからざる事を怒り堪忍し得べきものを怒るをいふのであります、而して他より仕向けられたる害惡中、其堪忍し得べからざるものは殆んど稀なものである。

寛仁の怒とは、怒らざれば無情となり、愚鈍となり屈辱となるべき事情に對する感觸をいふのであつて寛仁の怒について『ベルセル』氏は左の如くいつた。

怒る事をせざる一種の柔弱なる人あり、我此の如き人と、共に何事をもなすを欲せすと。

或は戰塲に於て婦女を辱しめ、傷者を虐待し貨財を奪略し、不辜を虐殺し、自國の名譽を毀損し、甚しきは、自國の秘密を敵に通ずるものあり、かゝる塲合に、誰れか怫然として公義の怒を發せさるものが

あるであらうか。或は官權を挾んで私利を營み、又は身上流にありて、卑汚、鄙陋の事をなして風紀を亂し、或は金力を賴んて、貧民を凌辱するが如きものあらば如何であらう。誰か忿然として怒り嚴然として之れが匡正を思はぬものがあるだらうか、人は怒らずして義を害せざれば、これを忍ぶを以て、大本とすれども、而し時としては、怒らざれば反つて公義を缺く事あるを忘れてはならぬ。

『ワシントン』の父某、果實を得んとして、數多の櫻樹の苗を植えたり、時に『ワシントン』は小兒の戯として、何心なく手斧を以て、之れを伐り倒したが、後父の某、之を發見して、大に怒つて曰く、誰れか此樹を伐りしやと『ワシントン』は父よ、兒が誤つて伐りたりとて、直に詫びしければ、父の哲は直に消散し且喜び謂ひけるは、一本の櫻樹よりも、かゝる兒こそ、眞の寶なれとて、首を抱いて接吻したといふことである。

貝原益軒先生は、偶々他出せしに、其塾生ども隣家の青年と角觝をなし、誤つて益軒先生最愛の牡丹の樹を折れり、塾生の狼狽一方ならず、漸く隣家の主人によりて罪を謝しげれば、先生笑ひて曰く余が牡丹を愛するは、樂しまんかためにして怒らんが爲にあらざるなりと。

これ眞に味ふべき雅量ではあるまいか、方今一家の主たる、朋友、故舊を招きて一夕の樂しみをなさんとするや、妻子を叱責し、僕夫を怒らせ、下婢をなかせ、朋友と共にたのしまんとして、家族をして悲ましむるの愚をなすもの甚だ少なくない。

周の代に、曾哲といふ人ありき。圃に瓜を植う、其子曾參は其圃を耘るに當りて、其根を切りければ、曾哲怒る事いと甚だしく、大杖をあげて、太く其脊をうち、以て曾參をして氣を失ひ地に仆れしめたり然れとも幸ひにして人の介抱する者ありて蘇するを得たりと、又某州の藩士某に、灰書の癖ある人あり其火鉢に向ふや、必ず火箸を以て灰上に文字を書くを常とせり、或人戯れに、某の坐せんとする火鉢の

箸を熱しおけり、某果して、其火箸を執るや熱甚し、然れとも、平然として毫も意に介せざるの装をなせりと、所謂、忿を懐きしものならんか、數日の後、薄暮人なきの時に、其人に逢ふや、卒然、刀を拔き之れを切り殺せりと。嗚呼、怒の情たる、誠に恐ろしくはなからふか。

以上述べし諸項の如く、各其性情を表はして餘りありと思ふ、故なきの忿怒は、『ホレース』氏のいへるが如く一種の狂病にかゝりしものにて、智力も、學藝も、自分を顧みる暇なく。怒り門前より入れば智識は後門より走り出づるの諺にたがはぬのであるか、何んと愼むへきは、實に斯の忿怒の情ではあるまいか。

石黑男の小說談

近日青年輩が讀耽する、其種類の本で世論がポツ〳〵やかましくなりかけた、加之牧野文部大臣の訓令によりて、一層世論を喚起した新聞によれば、社會主義の本は、賣れ口が少くなつた、併し戀愛物は益多くなる傾きだといふ事だ、余は元來普者で、家庭は所謂武家流であるから、小說なども近來の新物は門内に入れぬ、家人が消閑といふ場合には、傳記、紀行、地理、戰記といふやうな本のみで、夫で十分樂みを取て居るから、彼の戀愛小說といふやうなものゝ味は分らないのだ、近日大橋圖書館で明治廿七年七月から廿八年六月迄滿一ヶ年の閲覽表を調べて見たら、同館に於ける讀書人一ヶ年殆ど八萬人、其百人に付ていかなる割合でいかなる書類を讀むかといふに

第一門	辭書、叢書	二一、五二
第二門	隨筆、雜誌	二〇、八三
第三門	哲學、宗教	二、六五
第四門	法律、政事、兵事	七、九四
第五門	社會、經濟、教育	八、五二
第六門	文學	二六、〇〇
第七門	數學、理學、醫學	一二、二九
第八門	工業、農業、商業	二、三一
第九門	美術、遊戲	三、八一
第十門	歷史、傳記、地理、紀行	一四、一三

といふ割合である、第一門には雜誌がある、第六門には諸小說があるからだ、此數を見て、世人がいかなる心で書を讀む者の多くがあるかを卜するに足る、又昨夜涼に乘じて神樂坂の大道にひろげてある古本商をゆる〳〵巡りて、其ひやかし人を觀察した所、どうも戀愛小說がよく賣れる、甚だしいのは女學生らしき者が隨分いかゞなる表題の古本を購求するのもある、紀行や動植物や、理學などは一人も購者がない、其内一人三十四五歲の町人の女房らしい人が、古本の内から、高野長英傳とチルソン傳とを購求するを見た、此の婦人は少し風變りの人らしく感じられた、凡て新聞とか雜誌とか小說とかいふものは、頗る青年讀者の心を感起せしむることが多く、隨て讀者の一生を左右する力があるものだから、所謂、操觚者は篤く自ら信じ、一筆を下し、一句を行く毎に此に心を注がれて、我國の青年を順良雄大に導かれたいものだ、

茅屋の女詩人

山田枯柳

枯柳幼より不遇にして志を得ず、流離漂泊居住定めなし。或時は越路に月を看めて、徒に袖を濕し、或時は浪花津に遊びて、あしのかりねの一夜だに、安らかなる夢を結ばす、木曾の山路を通りては、人生行路の難きを嘆じ、直江津の船路親不知を航しては浮世の波の靜かならぬをうらみぬ。今年また北陸に遊び、名も清けき松任の里に杖を止め、しばし知己の方に宿りけるに、ある日導かれて、聖興寺てふ野寺に到り、千代尼の碑を見ぬ。刻して曰く、

月もみて我は此世をかしく哉

あゝ是れ千代尼が安らかなる一生涯を終る辭世なり短き一句の中におだやかなる、心をあらはし、頼みなき浮世をやすらかに暮らせし事さだかに見ゆ。然るを、已れの樣を見れば、浮世の艱苦に逐はれ、世を嘆き、人を恨み、迷ひの夢のさめがてなるは、何ぞ一巾幗婦人にも劣れるやと、靑苔露しげき古碑に天涯の孤客の心をよすること片時、感慨轉た懐切なりき。

千代は、加賀松任の福増屋六兵衛の女なり、彼の女の生涯は、其辭世の句に詠まるゝ如く、慕ふ可き生涯なりき。彼の女は、浮世の苦痛を悲みぬ。去れど一の別天地を作りて、箇の裏に樂みたるなり。彼の女は、其身地にありしも、心は天にあり、即目見る可らず、手觸る可からざる、無形の天にありしなり彼の女は、眞に『月も見て』此の世を終りし者なり此の點に於て、おのれは、彼の女を女詩人とするを憚からざる也。

聖興寺一片の古碑は、是れ女詩人千代尼の靈のさまよふ處なりと思へば、百有數年の昔慕はしく、其夜再び碑邊に徘徊して、舊を慕ひ新を思ふをりしも、二十日の月森より出でゝ、風悲しき墓邊をてらし、草葉に滿つる露落ちて玉をくだき、讀經の聲かすかに聞ゆ、斯る寂寥なる墓場にさまよふ折は、心すみ

渡りて、世の垢もとみにおちしやうなり。墓場すみなる石に腰うちかけ、心を潛めて千代尼の人となりを考ふるに、慕はしさいふべくもあらず。里鶯のひなびたる中にも、かゝる妙鳥の出でゝ、都に鄙に妙音を告げしこそうれしけれ。北陸の好景、茲に於て空しからず、山河の靈また喜ぶべし。

夫れ詩は、天才あるにあらざれば、學びて達する能はず、大江山の歌よみて定頼卿を驚かしゝは、よきためしぞかし、千代女は、天性風雅の心あるにや、未だ幼き振分髮の頃、俳句をものしけるに、父母聞きて、幼き者にはよく出來たり。斯る心ある者を學ばしめなば、如何に深く風雅の道に分入らむかと、いたくよろこびて、其頃行脚しける某俳人をおのが家に止めて、千代に此道を學ばせしとぞ、此ぞ千代が、後の世にまで雅名を擧ぐるはじめなりける。

余性拙百能する所無し。時々歌詩を作る亦童習。自ら含る能はざる所、苟も心に感ある、則ち雜然口を衝て發す。自ら其巧たり拙たる何如を知らず。惟人に取て名を爭ふに意なし。故に是を以て自ら苦ます而して以て自ら娛むなり、と是れ柴栗山が其の『寤歌軒記』に於て記する所なり、夫れ名利の爲に詩歌を詠ずる者は、已に其の詩歌たる資格を失ふ者なり眞の爲に眞を歌ひ、美の爲に美を歌ひ、義の爲に義を歌ふは、詩人の本領なり、然るに、世に詩人と云はるゝ人にして、此の技を以て衒を爭ふ者、物を引き、類を連ね、多に誇り、靡を鬪はし、以て悅を人に求め。其渉筆營度に渇りてや、腎肝を抉摘し、心髓を吐嚼し、務めて奇に出でゝ人を壓せんと欲す。媚を求るの心愈深くして、其氣愈昡み、勝を好む志愈熾にして、其理愈乖く、と言はるゝ者の多きは、嘆するにあまりある事なり。千代尼は、天性の美玉をみがき、今や光輝かくれなきに至れり。然れども彼の女は、俳諧を以て糊口の資とする者に非ず。只優しき心を以て、みやびなる『自然』に親みて、其の美の爲に美を歌ふなり。千代女は、芳紀十八に及びて、松任の里を去ること二里計りなる余

澤の福岡某に嫁したり。是れ女子が一生涯中にふむべき道をたどれるなり。夫につかへて貞節を守り、おのが才をつゝみて人に誇らず。春は庭の梅樹にうぐひすの來鳴くを愛で、秋くれば尾花初鴈に思を寄せて優しき心より珠玉の句を出だしぬ。

鶯やみなうぐひすの梅の花

秋風のいふまゝになる尾花哉

初鴈やひろ聞かんより夜もすがら

悲しき運命は、哀れなる千代女に下りぬ。彼の女が十八の花の齢ゆかしく、振り袖の風に翻るも心恥かしき頃、好縁を得たりしかども樂しき月日は夢中の夢と過ぎて、最愛の夫はかへらぬ旅路に上り、北邙一片の煙、空く千代の胸をこがしぬ。操ある千代女は、つまかさねするを好まで、おのれを愛し玉ひし亡夫の爲に、一生節を守りて、淸らかなる生涯を遂げんことを願ひ、身はなほ若く、花の姿の香ばしきにも拘はらず、夫の家を辭し去りて、再び松任の里には歸りぬ。

千代女は、其の觀念の美にして優しきが如く、其容姿も、美しく優しかりき、斯く心やさしく、すがたうるはしき少女なりければ、心よする者少なからざりしも、かたく拒みて再婚を許さず、是よりは、風雅の道に一入心をいれ、春雨の靜かなるを樂み、胡蝶のやさしきをめで、菫土筆のおもしろきを賞め、或は粟津野の物さびしきを思ひ、或は晴れたる空に農夫が田植するを看めて、其の雅腸をみたしぬ。

松ばかりもとめぬ色や春の雨

雨の日はあすの夢まで胡蝶哉

山影やはつれし頃の菫くさ

筆たてゝ何々待やつく〴〵し

粟津野や山から京のほとゝぎす

けふばかり男をつかふ田植かな

千代女は、廿三歲の時京に上り、勢州にいたり、麥林舍乙由の門に入りぬ。彼は『自然』の美を咏はんとせば、唯『自然』に親むのみにては足らず、自然に親しみて得たる所をあらはさんとには、必『こと

ば」を要し、人をして感せしめんとには、其『ことば』を優しく用ふる必要あるを知れば、既に俳諧を以て名を得しにも關らず、再び師につきぬ。其志の厚きこと、誠に感ずるに堪へたり。何事に論なく凡そ事に從へるものは、皆斯くあらまほしきことにこそ。

廿七歳の時、再び京に上りぬ。住みなれし松任の茅屋を後にして、風のふく非や鯖江の里、府中、脇下湯尾、椿坂も過ぎ、柳瀬の關を經、旅路もいとゞ長濱や、大津に出づる乘合舟に、十八里の夢を結び、波路つゝがなく大津の濱につき、夫より京に上り、宿に投じ、同好の士を訪ひ、鴨川の水清くして嵐山の花うるはしきを賞し、淸水の音羽の瀧、龍田川に流るゝ紅葉など、目にふるゝもの風流ならぬはなく悉く其の雅膓を滿足せしめ、うき世の塵の遠く身を離れし心地やしつらん又數多き名所古跡を看るにつけては、歷史的の觀念は、彼の女の心裡に發し、身は柳櫻をこぎませて、にしきなす都にあなれど心ははるかなる別天地にさまよひしならむ。」

其後髮をそりて素園と謂ひ、松の扉、茅の檐にすまひ靜けく、うしろ流るゝ小川の音は、自らなる糸竹のしらべをなし、軒ば漏る月影は、念珠の聲を尋ねてぞ入りぬる。彼の女が墨染の衣に身をやつしゝは、こし方行末を思ひ煩らひ、世の無常轉變常なくして、紅花散じ、明月かくれ、昨日の紅顏は今日の白髮となり、前の喜は變じて後の悲となる、浮世の波の泡沫の消えつ結びつ、ひまなきを悟りたればなり。去れど彼の女は、厭世主義に陷りしにはあらず、浮世の事を物憂く思ひて、三諦即是の月の光を、破窓の下に看め、一實圓頓の花の香を荒野の末に求めたりしも、人知らぬ別世界を作りて、此處に住まんことを願へばなり。別世界とは、無何有の郷に非ず。亦「ユートピヤ」に非ず。千代尼獨得の觀念――彼の女が自然をうつす鏡なり。千代尼は、斯く樂む可きを樂み、歌ふ可きを歌ひ、富貴に汲々たらず、貧賤に戚々たらず、或は一碗の澁茶に饑をみたして無量

の清涼を味ひ、誦詠諷嘯して『自然』と相親しみぬ。

安心

ともかくも風にまかせて枯尾花

三界唯心

百生や蔓一すぢの心より

千代尼は、安永四年九月八日に寂す。年七十四。今を去ること百十九年なり。抑も松任は、京へ上る要路に當れば、諸國の旅客のこゝを通る時、千代尼の許に立寄りて、書畫を求る者多し。千代尼又惜まずして與ふ、是を以て、海内に其名傳はれりとなん。總じて千代尼の句を論ずれば、富岳の天に聳ゆるが如き奇絶壯快の觀なしと雖、草間の小川涓々として流るゝが如き、妙麗優美の姿あり。視よ、爛熳たる櫻花の咲きてか『白妙もいつしかくれて花の山』晩鐘や何の花の聞よしの山』と詠じ又『朝夕にみね森からも櫻かな』『月影もよしや櫻の朝ぼらけ』『山彥やみすみられずに花戻り』とぞ歌ふ。いづれも優にやさしく、流石は女子の秀咏と知るべし。

凉しさや手は屆かねど松の聲

松風を植て聞たし雲の嶺

山のすそ野の裾むすぶ清水哉

釣竿の糸にさはるや夏の月

片われのいの字かく間や夏の月

琴の音の我にかよふや今朝の秋

蝶々の身の上しらぬ花野哉

秋の野や花となる草ならぬ草

千代女の句を詠むは、苦みて作るに非ず『自然』を樂みて自然に遊び、心安らかに其の自然を歌ふなり故に其句自ら妙味あり。例へば、春の晴れたる空に年若き女子の五六人籠を攜へて野邊行くを見ては、『行ばあるやうにいそくや若菜つみ』と詠じ、一樹の梅花土橋の邊に香ひ春風こゝろよく吹くに遭ひては『賣酒のもとりは橋の野梅哉』と詠じ、萍水面に漂ひ、翩々たる胡蝶の飛ぶを見ては、『うきくさや蝶のちからの押へても』と詠ず。能く其狀をうつす。奇ならずして妙なり。其他『浮草に我は根の付

涼みかな』『萍やとりおとしたる咲ところ』田植うたあしたも有に道すがら『涼風や押れ合たる草と草』『ものひとついはて胡蝶の春くれぬ』『畑も田も蛙の聲のあまりけり』『黄鳥のとなりまて來てゆふべ哉』『晩鐘のつり合もなき柳かな』『むさし野はかすみのうちの霞哉』『蝶々や幾野の道も遠からず』といへる皆婉麗妙美ならぬはなし。

桃咲やみやこはなれて都人
戸の開きあれど留守なり桃の花
朝貌やどちらの露の情やら
朝顔に釣瓶とられて貰ひ水
晩鐘にいくつか沈む尾花哉
行水におのが影追ふとんぼ哉
三日月の頃より待ちしけふの月
はつ雁や山へ配れは野に足らず
行秋やもて來た風は置なから、

よく此等の句を味へば、千代尼が如何に『自然』に親み、其秘密を捕へしかを知るに足らむ。千代が句にて最も有名なるは『柿のはつちぎり』『おきて見つ』『百なり』『とんぼつり』杯の句也。此等は人口に膾炙せる者なれば茲には掲げず。

加陽槐庵六世の大夢、甞て千代尼發句集を編輯し、巻首に序して曰く『芭蕉葉の蔭廣く、其蔭に寄こぞれるの徒繁きが中、千代尼てふなどは、眞砂の中の玉ならん哉。されば寶曆のむかし、蘭更先洗も彼が句集の序に其善をあらはせるはむべなり。美名四海に溢れ、筆跡世上に翫賞して、日々に輝けり……と蓋し過言に非ず。

要するに、千代尼は、其辭世の句にある如く『月も見て』此の世を終りたる優しき俳人なり。其句は流麗婉轉水のしたゝるが如く、其の女性たる特性を失はざる也。誰か彼の女が『自然』と親み『自然』を樂み、其優しき心を發して、幾多の句とせしを喜ばざらんや。枯栁また親しく其碑を見て、昔慕はしくこゝに一篇を草して、彼の女が優しき心を世人に知らしめむと欲する而已。

手内職が出世の端緒

近頃女子の新職業として博物教授用の標本とも見る可き、彼の果實製作方教授の看板を掲げたるもの本郷、神田は云ふに及ばず淺草本所等の一部分にまで、盛んに顯はれたる故、その本家本元はソモ奈何なる處なるかと、就いて精しく取調べたるに、其の製作方教授者は立派なる女教師にて、而も其の前身はと問はゞヨカ〳〵飴賣りの女房上りにて、是れに絆はる一條の物語こそあれ、本郷元町女子技藝學校主太田梅子は、豫て手藝の業に巧みにて、前記の果實に就いては、少からざる趣味を有てるものから、奈何にかして是れを女子の新職業として、一般の婦女子に教授し度くは思へど、奈何樣何人が何處にありて、是れを拵へるか、更に判然せざるより先づ其の本家本元を突き止めんと、果實を出品しある神田の勸工場東明館下谷廣小路、さては淺草六區の勸工場等につきて、其出所を尋ねたるに、啻だ本所とばかりにて、更に要領を得ざりしを、太田女史は種々苦辛の末、本所區長岡町三十八番地本多と云へる飴賣の家にて、盛んに是れを製造しつゝある由を確めたるにぞ、女史は直ちに同家を訪れたるに、同町附近は貧民の巣窟とも見る可く、僅に四疊半と三疊位の裡に、腰卷の上に絆纒をつけたる一老婆の出でゝ、女史を迎え、色々と話の末、女教師となりて女史の學校に出席されたしと申入れたるに、老婆は魂消んばかりに打驚き、且つ夢ではないかと驚きの中にも、怪しみの色を以て女史を迎え、頓て羽織から袴まで太田女史の心配りにて、打ち揃へ、兎に角に果實の女教師として、教壇に立つに至りたるは、ツイ此の四月中のことなりとぞ、此に一二ヶ月を過ごして、多くの生徒を教ゆる中、神田南神保町九番地大日本婦人正風會附屬の實業部にても、森本高子と云へる和洋裁縫學校卒業生主任となり果實の教授をなし盛んに生徒を收容し居るが、月俸二十圓にて、件の飴屋の女房を聘して其教授方を申し入れたるにぞ、此に太田女史との大衝突さへ起りて、女房は兎も角も月俸の高き方に覂みつくことゝなりヨカ〳〵飴の女房今はカシメヤの袴に瀟洒な態姿なる一廉の女教師とはなり了せたり、扨て此の女は、本名ひさ(四十六)とて夫德(六十)との仲に長男愛二郎(二十二)長女みね(八つ)との四人家族にて、長男は水兵となりて朝日艦に乘込中、夫は石が烟を吹くと云ふ炎天にも、チンチロリンの飴賣りを渡世に、おひさは素より、人形の張子を手内職となし、夫婦にて月に十圓乃至十五圓位の稼ぎをなし居たるが、此度端なく太田女史に見出されたるが原にて、扨てこそ一躍して月給二十圓の女教師とはなりたる次第なるが、おひさは何時ごろより此果實の製法を學びたるかと云ふに本人が尚ほ十三四歲のころ大阪なる親戚より、斯るものが到來せしとて、糸瓜、蜜柑桃、百合根、橙の五種の外國製果實の標本を輸り吳れたるにぞ、此方は代々が人形の張子製造人なりし故、それを見やう見まねにして拵へ、其の後裝飾用及び標本用として、捌口漸く多きを加へ、是れまで上野廣小路の杉山勸工場と京橋鎗屋町の大荒物商大島方とを得意として製造し居たりしなりと、

世渡りの二道

高橋五子

世人が圓滿和樂なる世渡りをなさんとするに當りて先づ其眼を注ぐ所は何れにあるか、多くは肉の快樂にあるなり、言を換へてこれを云へば、甘きを食ひ美しきを着、好き音を聞くにあるなり、人此世にありては、肉の快樂もなくてはえあらぬものなり、されどわれはこを以て、あながちに圓滿和樂なる世渡りの道を得たりとする能はざるなり、そは、此外に缺くべからざる高尙なる世渡りのあるが故なり、世渡りてふことは、人々に心の据えやうによりては易しくもなり、むづかしくもなるなり、われは世渡りに二道あるを認む、心の世渡りとは、人此の世にありて、一擧一動、或は思ふこと、或は言ふこと、或は行ふことを、凡て高尙なる點に向け、何事も道を先にし、善德を發達せしめ、地を離れて天に近きものとならんやう務むるを云ふなり、肉の世渡とは全く前者と反對にて、心靈道德上のことは、知らず顏にて、何事も身の爲とて、唯肉慾三昧に沈溺するを云ふなり、

謂ふ所の肉の快樂を得て、圓滿和樂なる世渡りの道を得たりと思へる人は、これ後者に屬する人なり、人間兎角に、肉の世渡りには陷り易し、己の靈は疲勞し、將た飢え、將た凍死せんとは知りつゝも、其靈に食はしむる事をなさず、其靈を温むることをなさず、其靈を活潑ならしむることをなさず、徒に營々として、肉の快樂を貪るに餘念なし、つら〳〵顧るに、世は一日々々と肉の世渡りに汲々せり、試に公共遊園の地將た人の群集せる地に到り見よ、如何に都人士女の服裝嬋娟たるか、われの目には、何れを見るも、紳士と貴女との群あるのみ、試に市街巷路に出でゝ見よ、昔は宏厦大閣にのみ聞くを得たりし彈琴の音も、今や殆んど軒並に聞くを得、それ美裝をなすは、惡しきにあらず、音曲を奏するは惡しきにあらず、美裝は人の姿容を作り、威儀を正し、

汚點を除き、美の觀念を養ふ効あり、音曲は人の心を和げ、高尚なる思想を養ひ、能く駘蕩ならしめ、能く爽快ならしめ、能く勇壯ならしめ、能く優美ならしむるを以てなり、然るに此に注意すべきは、音曲を奏するにも、美裝をなすにも能く其本心を失はず、これに耽らざらんことを要するなり。そは世人が美裝を好み、音曲の美妙を聞きて、樂しみを得らるゝやうになりしは、世の開化すると共に、世人の生活の程度が幾分か高められて、其氣品に於ても、其心に於てもいよ／＼高尚優美に進歩せしなれば、國家の爲には大に嘉すべきことなれども、遡りて既往の事に思ひ及びたらんには、轉た警醒せずんばあらざるなり。

むかし吾が帝都が、奈良平安にありし時代は、文學の全盛を極めし時なり、當時幾多の公卿百官は、詩歌管絃に通せざるものなく、これを知らざれば、人生の一大恥辱のやうにも思ひ、春の花を顧ては、詩歌を闘はせ、秋の月に對しては、管絃を弄し、優美てふ觀念は、彼等の腦裡に蝟集せり。今より遙かに彼等の心を評したらんには、其和らげること南風の如く、其のどやかなること春の日の如くなりしならん。吁彼等の世渡りは、實にうらやましきばかりの世渡りと云ふべし。然るに彼等の此優美なる、此快樂なる世渡りは、如何なる運命を胎みしか、これ決して好運を生み出し能はざりしなり。蓋は彼等は、此快樂を以て、心の世渡りをなす料となさずして、肉に屬する世渡りの料となしゝを以てなり、是を以て、彼等の心は、漸く文弱に流れ、彼等の爲す所は肉慾を恣にするにあらざるはなく、春の長き日冬の長き夜をゝしとも思はで、悠々として詩歌管絃にのみ意匠を凝らし、身は輔弼の任にありながら、國を治め民を濟ふ術を知らず、職國家の干城たるに、劍を拔くすべをも知らざるありて、堂々たる政廳はあはれみやび男等の集合して、歌舞管絃を奏する遊樂塲となれりき。それ人、文弱に流るれば、自然に淫逸の心生せざるを得ず、淫逸の心生じたらんに

は、身を淸淨に保護すること難し。人其身を淸淨に守ること能はざるときは、到底男女間の倫理を保つ能はざるなり、一たび男女間の倫理の亂れたらんには、小にしては一家破滅を招き、大にしては國家の顚覆を來すなり、聞く平安の朝に於ては、其文藻を以ては、古今に冠絶せる才子才媛の輩出せしとは雖其見識は尤墮落し、文學は人心の高尙なる綾なることを忘却し、漫りに其文藻を弄して、男女情を通ずる梯となし、音曲を鬪せて、相戯れ、無氣無力にして、己が常職の何たるをも忘れ、徒に奢侈を極め、榮華を盡し、男女間の倫理の潰亂に至りては、亦云ふに忍びざるものあるに至りしと云ふ、然るに天の判官は、此淫蕩の子をして、永く恣ならしむるを欲し給はず、忽ち保元平治の亂にて、彼等の淫靡放縱は罰せられたりしなり。それ人肉の世渡りのみ滿足を得んとすれば、何れの世に於ても此憂は免れず、獨り奈良平安の朝のみにあらざるなり。

今の世も亦、文學隆盛の期と云ひて可なり、音樂興隆の期と云ひて可なり而して人心の注ぐ所は、果して何れの點にあるか、これ亦彼の時と大なる差違なきなり、故に今の世は、若し此勢にて進歩したらんには、其極度は果して如何なるべき、彼の奈良平安の世に於ては、斯く遊蕩奢侈に溺れしものは、極めて多しとは云へ、特に甚だしきは廟堂内にありしなり、他には却りて、廟堂の墮落せしを切齒痛歎せし者少なからざりしと云ふ、然るに今の世は、大にこれと異れり、其奢侈遊蕩の風は、上より下に至るまで通じて行はれて、日に月に甚しき有樣なり、それ一般の人民が此奢侈に陷り、此腐敗に陷りたりとせば、之を矯正せんとするもの何れにあるか、こを清めんとするもの何れにあるか、それ保元平治の亂は、彼の時にあるにあらず、今も亦吾等の身邊に接近しつゝあるなり、それ民は國の本なり、本正しからずして、焉んぞ社會の正しきを得ん、世人は徒に開化々々と論へども、其本たる國民の腐敗したらんには、焉んぞ眞正の開化を見るを得ん、國の開

化と不開化とは、國民個々の心掛にあるなり、個々の心の準備せざるに、徒に其外部のみ開化するは、これを花に喩へんには、これ徒花にして到底好き實を結ぶ能はず、其散亂し易きこと風前の櫻花も啻ならざるなり、況んや腐敗墮落の國民をや、要するに、國民たるものは、常に己が國の本たることを忘るべからず、國の興亡は個人の責任たることを忘るべからず、以上の心を失はざらんやうせんには、務めて常識てふ心を養はざる可らず、人は何事にまれ、此素養ありたらんには、決して極度に達する憂なきなり、奈良平安の人々が奢侈淫蕩に陷りしも、此の心なきによるなり、今の人が奢侈遊蕩に陷るも亦、此心の乏しきによるなり、然るに今の世は、未だ奈良平安の如く極度に達せしと云ふにあらず、今に於て心したらんには、敢て望なきにあらざるなり、故に務めて常識てふ心を養はんことを要す、そは此の心ありたらんには、能く己が心を公平に判斷するを得るをもて、如何に其心の千々に馳すると雖、これに耽る等の憂なきなり、これに耽る等のことなくんば肉慾の快樂を恣にすることなし、肉慾の快樂を恣にせざれば、其世渡りも亦自然高尙なる方針に傾向するを得るなり、謂ゆる肉の世渡りを離れて、心の世渡りに轉ずるを得るなり、然るに高尙なる心の世渡てふことは、高德淸廉なる人の爲には無量の快樂にして、彼等を慰むること何物をもても、これに換ふること能はず、されば若しこの敗德淫蕩の者より云ひたらんには、これ却りて苦痛にして、彼等の爲には、これに勝る妨なきなり、然るに人の品位の軒輊するは、大にこれに關するあるなり、人はこれによりて、萬物の上位を占め、人はこれに依りて始めて人たるなり、人若し此世にありて肉の世渡りのみにて足るものならんには、誰か汲々として德を積まんと務むるものあらんや。されど彼の高德淸廉なる人は云ふべきにもあらず彼の敗德淫蕩の者までが己れこれを行ふことは忌みながらも、これを貴ぶ所以のものは、これ人生固有の性にして、到底戀慕せずん

ばえあらぬ行なり、然るに當時この愛慕すべき固有の性の全く遠けられて、心の世渡りをなすもの丶絶えてなき有様となれるは、これ肉の世渡りの盛にして、人心漸くこれに慣れ、曾て明瞭なりし良心迄が暗々たる幌帽を被りたるによるなり、世の心あるもの宜しく良心の幌帽を除去し、明々たる燈火を點せよ、これ心の世渡りを得らる丶なり、心の世渡りは肉の世渡りの如く區域の狹隘なるものにあらず、心の世渡りは肉の世渡りの如く現世幾十年の樂しみに止るにあらず、心の世渡りは、肉の世渡りの如く人を淫蕩に陷らしむるものにあらず、心の世渡りは肉の世渡りの如く人を卑弱ならしむるものにあらず即ちいよ／＼高尙ならしめ、いよ／＼活潑ならしめいよ／＼淸廉ならしめ、其快樂は、徒に今世のみに止るにあらずして、永劫無窮、其區域の廣大なること計り知るべからず、加之能く其心を温め、其愛の洪大にして、一家和ぎ、一社會和ぎ、一國和ぐを得これを得て、始めて眞正の開化を見るなり、斯く個人の心に、眞正の開化の基を築きたらんには、歌舞音曲を奏するも之に耽るといふことなく、如何に美裝をなすも、奢侈に流る丶ことなく、能く其位置と價値と、身分とに應じて用ふべき明を得、故に高尙美妙なる音曲はいよ／＼高尙美妙にせられて、能く人心を和げ、美の觀念を養はしむるに、缺ぐべからざるものとなるなり

支那人衣服の色合

一、本邦人の衣服が、其模樣及び色合に於て、千差萬別にして、十人十種の衣服を着用するに反して、支那人一般の衣服は、其時期と階級とに應じて、稍々共通せる性質を有するを見る、例へば成年以上の男女は、大概染出し模樣と、縞物の衣服を着用せずして、一般に無地及び織出し模樣の衣服を着す、而して染模樣の衣料は、少女小童及び稀に婦人の着用するものなり又上流婦人の晴衣には、絹糸及び金銀の刺繡を施す、又一般の衣料には、眞黃色の布を用ひず、（黃色は宮室の衣料なるが故に忌む）

右の如くなれば、支那固有の衣布には、染模樣物及び縞物甚だ少く綿布、夏布中、稀に米通布（横縦の細縞）及び柳布を見ることあれ

ども、此等は大抵外着衣に仕立ずして、脚絆等の下着とす、而して其外着衣に製すべき衣料は、大抵色無地か、織紋及び浮模様に外ならず

元來衣服の模様に重きを置かざる代りに、色に就きての嗜好は、上下一般に深くして、本邦人の想到せざる所にまで、其配合と調色の進歩せるを見るのみならず、上下に通じて、色の鑑別、其他色に關する智識の甚だ深きを見る、今左に支那人が夏時に嗜好する衣服の色合を掲げん、

▽蛋　青　又湖色とも謂ふ

蛋は家鴨の卵殻を謂ふものにして、其色淡青なり、又湖色とは湖水の滴澄にして淡蒼色を帶びたるを、共に清涼の色となして、夏時に愛すること甚し、

▽雲　青　淡紺色にて、淡青の底光を有す涼快の色なり、

▽黑　廣東製品にて暑涼綢と稱するは、一種の絹布の上に漆を塗りたるものにて、一部人士間に行はる、之は熱湯を以て、洗濯すること能はず、また洗濯の際、搾ること能はず、

▽荷花色　蓮の淡紅色に模したるものにて、桃紅色と並び行はる、女子の衣料に製す、

▽蜜　色　蜂蜜の色を採りたるもの、

△大　紫　本邦の紫と稍々異り、古代の紫に似たるもの、

▽寶　藍

▽天　藍　晴天の藍色を採りたるもの、

▽白　色

灰　色

▽米湯嬌色　淡紅と淡黑とを帶びたるもの、

▽出爐銀色　爐房にて銀を溶解鑄造する所より出でたるものにて、

銀を白色に溶解するときは、淡紅加味せる放光の白色を呈すと

其他種類猶多けれど、以上は普通に行はるゝものにて、凡て天然の物色に其起源を採りたるものとす衣色の其自然色に類するに要するは勿論、一着衣に一色を要し、縞及び染模様等の不自然なる配色を俗色と稱して排斥し、天然の美を素雅の色と稱して愛好する所以を知るべし、而して夏時の衣料に、殊に蛋青と雲青とを常用するは、其色の基源なる物體の甚だ涼快なるものあるを想起すればなり、此等自然色を愛好すると同時に、人工に得たる出爐銀色の如き、之を染色布の上に應用せんとする、工夫等に至りては、本邦人の想到せざる所にて、且つ色の研究と嗜好との甚だ深きものあるを知るべし



誌友倶樂部

◎三圓內外の內職　私は女鑑を愛讀いたし候ものに御座候が、學校へ通學いたし度候間、一ヶ月三圓位づゝ收入御座候職業御世話願ひたく候、教育家の御許か、或は篤志家のうちにて、相成るべくはこの秋の開校期より入學いたし度候間、それまでに御世話願ひたく候。（姓名在社）

◎毒虫にさゝれし時の手當　毒虫にさゝれ又は毒虫にかまれし時の、簡便なる應急手當があらば御教示を願ひます　（本郷森川町一番地榎本はつ子）

◎其の答　▽蜂にさゝれし時には、山椒の葉を採み其の汁をすり込むべし▽又味噌と酢を掌にて混合せて塗るへし▽百足に螫されし時は、蕣の葉を鹽にて揉み、其汁を擦込むへし▽蕣の葉は殺虫の効あり、故に蕣の葉には蟲つかず▽すべて毒虫にさゝれ痛みを感ずるは、其虫が有する一種の酸類の作用に由る故に亞爾加里性を以て中性とすれば治するの理なりこれには理科學上種々の方法あるべしと雖も、危險の場合もあるべきにつき醫師に托すの外なし▽蝮蛇などに咬まるゝ時あらば、其毒は實に恐るべきものなれば、決して等閑に附すへからず、第一に其毒の一局部に止まり、全身に及ばざるやうにすべし、從來俗間の經驗によれば、其咬まれたる部分を、煙管の火皿にて強く抑ふる時は、其部分凸起するなり、其時刄物にて凸起の所を刺し、惡血を去るなり、▽美濃地方にては、蝮を苅るに、其の蝮のある場所は多くは濕地にして、蝮蛇の生殖する處なれは、屢々之に咬まるゝことあり、故に蝮を苅る人は、竹の筒に干柿の碎きたるものを入れ、腰に帶ひ蝮蛇に咬まれたる時、直に此の干柿を患部に擦り込めば、忽ちに治し、後に害を殘さすといふ、蓋し干柿を以て蝮蛇の毒を中性とするに由るなるべし▽近來ハブ草といふ草の効用弘まりたり、これは琉球地方に產するものにして、同地方にて反鼻と稱する蛇にて、蝮蛇より一層激しき害をなすものなり、土人は此ハブ草の葉を採み、其の汁を擦り込み治すといふ、此ハブ

草の汁は、他の毒虫に螫されし時にも、少からぬ効能あり、（社内夕暮山人）

◎土田しづ子様に　私も、以前編物熱心でございました、本はいろ〳〵買うて見ましたが、どうしても當人でないとわかりにくうございます、一番よいのは神田鍛冶町大學館發兌『レース絹糸編と絹刺』と思ひます、（京橋區南傳馬町二岡田とみ子）

◎食物の咽につかへた時　まことに御面倒でございませうが、老人や小兒が咽に食物がつかへた時は、當惑いたすことでございますので何かよい應急の手段がございますなら、敎へていたゞきたいものでございます。（赤坂新町井上品子）

◎大谷愛子さんに　日本では、また音樂史は、見ろほどのものが出版されぬのではありませんか、日本人は音樂を一時的に樂むことを知つて、學問としてはまことに冷淡であるからと思ひます、生意氣などゝお笑ひ成さらぬやうに、（本郷好楽女史）

◎誌友會　庭の絲瓜はやう〳〵二寸ばかりに相成り朝夕其成長を樂み居り候處、きのふけふの冷氣にて、このまゝ物に成り候はぬ事か、まさかにさやうの事もあるまじく、却つて殘暑きびしう候はん、兎まれ不順の折から、記者樣がたには御かはりも在らせられず候や、今度は我等の爲に、貴誌上に誌友俱樂部を御開き下され嬉しく候、せめてもの事に、毎月なり、また隔日一回位、誌友會を催ふし貴誌愛讀者を會合なされ、色々有益なるお話をお聞かし下さるやう願はしきものに候、御聽とどけ下されば、何よりの幸に候、（八月十二日青山南町齋藤とみ子）

◎齒の痛みたる時　私は常に齒イタで困りますが、何かよい療治法はありませぬか、（相模横須賀飯田芳子）

◎其答　齒痛は虫齒にて痛むもあり、或は逆上のため齒齦の腫れ痛むもあり、原因種々なれば、専門の齒科醫に托するは勿論なれども非常に痛み甚しく、齒科醫に托するの時間にも堪へ忍ぶ能はざる場合には、韮をおろし、紙にのべ、痛む齒の頰に貼付くべし、仕方は一應白紙に水貼をなし、其上に紙に展べたる韮を貼るべし、もし直接に韮をはれば、其部分は火脹になるなり、（社内夕暮山人）

◎柴田英子の君に　女學校の確かなものをと御尋ねなるが、夫々目的によつて違ふのであります、先目的から伺ひたい、高等女學校希望の方か、職業學校や裁縫學校でも間に合はないでせうから、（編輯局の一人）

◎繪葉書交換　女鑑愛讀者諸孃と繪葉書の交換御聽屆下さる樣願上げ候、何か面白き趣向のものなれば尚々結構に候　（東京市京橋區南小田原町三ノ九　冬木　淺子）



德育と體育の關係

男爵　細川潤次郎

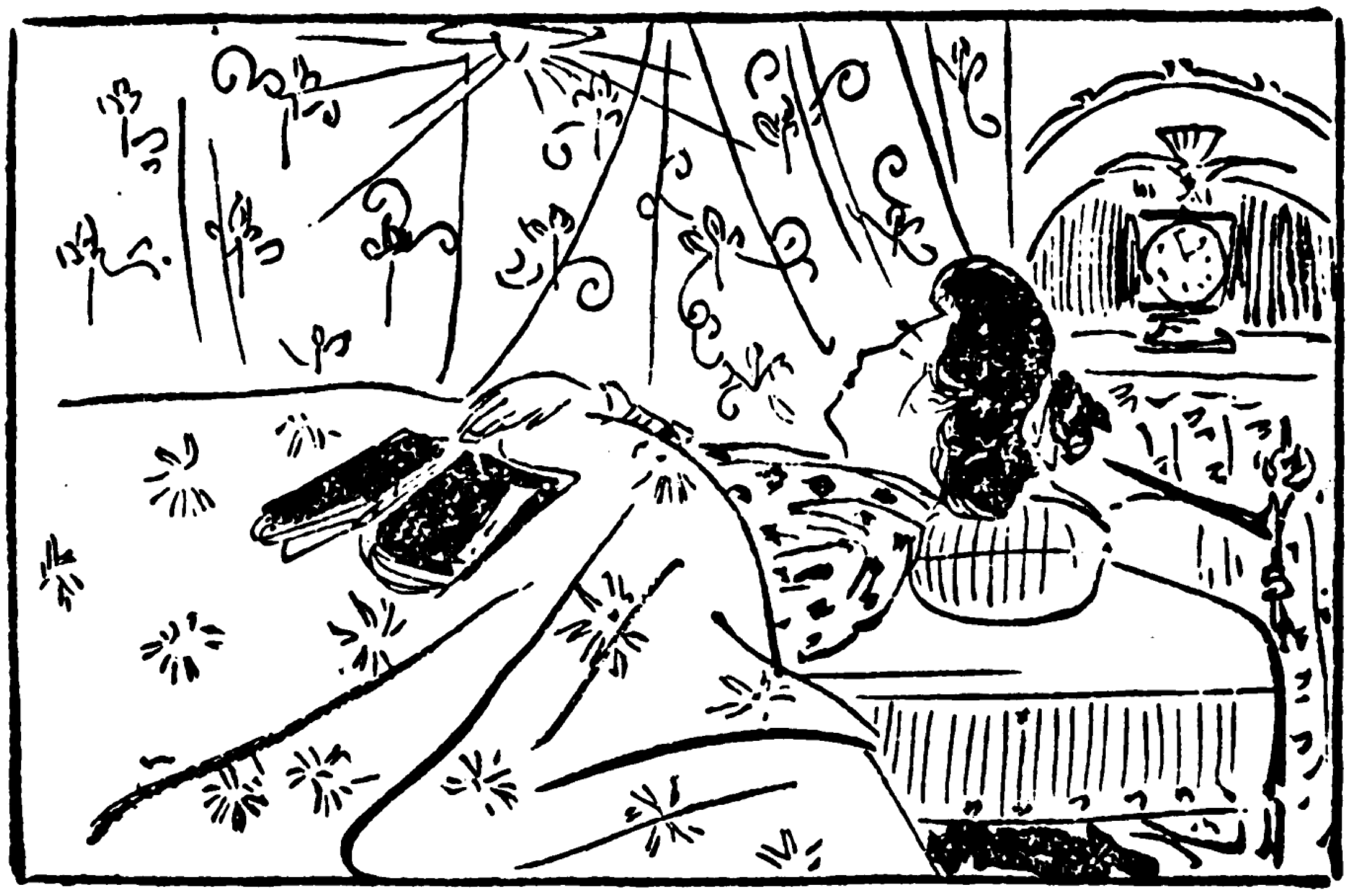
敎育家の套語として、智育、德育、體育と曰へる三大綱を設けたり、此の三者は互に相關連して分つべからざると、恰も鼎の三足の如し、其一を缺くときは必用をなさゞるべし、然るに學校敎育に於ては、動もすれば智育に偏する傾向ありて、修身の課目あれども、德育の效果顯はれ難く、智德の關係に付きては、世の識者論述する所少からず、而して德育と體育の關係に至りては、未だ多く人の論述せるを聞かず、余は玆に德育體育兩者の關係甚だ密にして、分離すべからざる所以を論せんとす、

人の始めて生るゝや、徒に運動すること、啼き笑ふことありて、言語を發すること能はず、此の如き時期に當りては、父母たる者は其子の身體の完全に發達することを望む外あるべからず、從ふて智育德育の施すべき樣もなければ、只體育の一點あるのみ、嬰兒稍成長して、分別ある時に至りては、智育德育を施すべき初期なれども、尙體育を重しとす、其の愈成長して自由の行爲をなすべき時期に至りては體育の方法として各種の遊戲各種の體操、及各種の運動等を採用せり、此等の事に由て、筋肉を發達せしめ、手足を敏捷ならしめ、消化機をして旺盛ならしめ、精神をして爽快ならしむることを得ることは固より疑なかるべしと雖も、此の如き健康の身體にして、一心の統御其宜を失ふときは、或は腕力に任せて他人と闘爭し、或は飮食男女の慾を始として、肉體の快樂に耽り、謹愼して節制を加ふること能はずして、遂には德と背馳するのみならず、併せて體育の目的を達すること能はず、身體の強壯は、適ま

其身を害する程度を高め、或は性命を亡ひ、品性を壞り、或は健康を損し、病弱に陷いること、其例甚だ夥し恐れざるべけんや、

勤儉と曰へることあり、此の二字は德育上に於て人の貴重する所なり、玆に此の勤儉を實行して怠らざる人あらん、其人果して勤ならば、早く起きて晏く眠り、晝間は其の執る所の業に從事して、或は坐して書を讀み、人に接し、帳簿を翻し、計算をなすが如きこともあるべけれども、凡百の人事に拮据鞅掌し、農家は農事に從事し、工人は工事に從事し、又官人は公務に從事し、社員は社務に從事して、其の勞働は十分なるべし、勞働果して十分なるときは、遊戲、體操、運動等の事

女學生の一日



(其の十一) 就眠

をなさずとも、此れと同一の効果を收むることを得べし、而して其人果して儉ならば、其人の生活自然に規則正しく飲食を節し、肉體の快樂に耽ることなくして、養生の道に合し、即ち體育の目的を達することを得て、大抵は無病長壽なることを得べし、知るべし德育十分なれば、體育を講ぜずとも、自ら體育の目的を達すべきことを、近日醫士某の養生法を論ぜる書を一見せしに、其中に言へることあり、曰く精神と肉體とは必ず親密の關係あるものにして強度の喜怒哀樂は、血行に作用する如く、恐くは第一に精神侵され、次に腦の血行に變じて、種々の病狀を

呈するに至るべし、即ち快樂は血行を盛にして、早老を防ぎ、沈鬱は之に反して、憂世の勞に堪へざらしむるに至るものなり、又曰く大なる悲哀失望は、人をして殆ど其業を執るに堪へざらしむるに至らしむるものあり、强大の不幸は精神衝激の作用をなし心臟の機能は微弱且不整となるのみならず、心臟漸次擴張して、遂に瓣膜の雜音を聽くに至り、胃及腸の機能は殆ど全く休止し、四肢及其他に水腫を呈するを見る、是れ精神の沈鬱は、腦の血行を妨ぐるものにして、其の結果は遂に右の如き不幸を呈するに至るものと知るべし、此等の言に付きても、精神と身體とは關係の親密なることを徵するに足れり、精神と身體との關係親密なる上は、德育と體育とも、亦別物に非ざることを知るべし、

之れを要するに、養生長壽の道は、平生諸の善事をなして、諸の惡事をなさず、因て以て精神の快樂を覺え、沈鬱憂苦の境遇に陷いらざるに在り、果して然りとするときは、德育を講せずして、徒に體育の效果を收めんと欲すとも得べからず、但幼稚の時に在りては、勢體育に重きを置かざることを得ざること、前に言ふ所の如くなるべし、

支那女學生教養談

實踐女學校副校長　青木文造

當校の支那女學生教育に就ては、過日來多くの新聞などに散見して、世間に紹介せられたれば、今日に至り、別に同樣の事柄を繰返しても、却て時間の損失に屬するのみと存じます故、今は是までの經驗に付きて感せし點と、また此度の卒業生が、好果を收むるに至りし次第とを、お話し致す事としませう、

當校の支那女學生を收容せしは、明治三十五年の初夏を始として、爾後出入したる女學生は、殆ど七拾餘名に及びたれば、比較上數に於ては少いとは云へねど、其内より卒業生を出したるは、明治三十七年に二人と、今回の十二人とで、合せて十四人に過ぎ

ませねば我々の側より申せば、まだ不滿足の極と思ふのですが、尙從前の生徒に付て、其の内容はと云へば、右殆ど七拾餘名中には、全く一時的修學の目的で入學したる者もあるかと思はれるのもあり、或は志望固からずして、中途轉學すと云ふむきも多かりしかの如く見えました事もあります、尤も是等女生の内には、日本に學問しに出たと云ふではなく、或は其の夫に從ひ、或は其の父兄に連れられて、笈を卸したるものも多かれば、其の關係者の異動に付ては、自然本人も居を轉ずと云ふことより、中途退學生の多きを見るも、亦止を得ない事かと思はれますされど、稀には、其の進退の甚だ明ならぬ者もありて、是等は其の本人の爲に、眞に遺憾の極と思はるゝ者もないではありませなんだ、扨此の如き女生の中には、或は知人等の爲に左右せらるゝ如き跡も全く見えないではありません、蓋し其知人等も女生の爲に惡しざまの道を示すと云ふでもあるまいと思へど、靑年の事とて一時的耳目の媒介より起る感動によりて、彼を學ぶべし、是は興味ありなど輕忽の評語を試みしもの丶爲、思想の定まらぬ、其の一例を擧ぐれば、飄然東京に來りし女生などは、下宿屋に於て、多くの先遊者の爲に誤らるゝ者もあつたとの事です、しかし此の點に付ては、學校の方でも考へねばならぬ事と思ひます、其れは何事かと云へば、全體生徒の心意の浮動し易きは、學校に向ひての信認が厚からぬ證據であれば、學校も其の原因の半を分たねばならぬ譯である、けれども其の事柄が獨り留學生に起り易きは、別にまた一の困難なる原因があるによるかと思はれます、

畢竟支那女學生は、數に於てまだ少ないのみならず一時に幾人づゝか揃ふて來ると云ふことが、從前は誠に稀なので、爲に學校では臨時入校を許さねばならぬ、尤も學校の敎養上より云へば、臨時の分は悉く入校を許さぬ方が便宜なのみならず、それが當り前なのですが、前にも申した如く、女生を漫然下宿屋に住ましむることが、極めて危險で、其の間には

意外な心得違ひなどがあるとの事故、學校の教授と云ふ上からは、誠に迷惑ながら、苟も善隣の情よりして、此の女生たちの失敗を少なからしめんと思ふ婆心より、餘義なく其の志望を容るゝとすれば、自然合級教授の體にならひ、一教場に數組を入れることゝなる、かゝる場合には、幾分進みたるもの、將た後れたるものゝ間に於て、時には各勝手の申立の出る事があるところへ、知人などよりして、種々の甘言を聞けば、教授の事情に通せぬ彼等は、時としては意思の變動を來すのも無理がない、しかし此の如き女生は、多く其終局に 厭 を來すのが多いので實に遺憾の次第と思ひます、

今一つは彼の國の學生の多くは、日本の私立學校は多く營利的に教授して居るかの如く思ふて居る、それ故學校に對する親愛の度が薄く見ゆる如き者もないでない、是は尤忌はしき現象なれば、此の妄想を彼等の腦裏より除去しなかつたなら、何程世話しても、國と國とに於ける滑澤劑とはなされぬ譯ゆゑ、當校にては、此の點には當初より頗る注意したのです、然る央一昨三十七年の冬に於て、彼の國の有志者は、支那の女學を進めんとのことにて、女子教員養成の目的を以て、一團の女生教養を依囑し來りたれば、學校は度々協商の上、凡そ左の如き條件の下に於て、之を承諾することゝなりました、

一、生徒の一組は二十人を下らぬ事

二、特別速成部は通譯を介して教授する事

三、生徒取扱に關しては、支那の人よりも特に生徒掛を校外に置く事

四、經濟は開放の主義を取り、主計の外支那人中よりも、一人の財務掛を置き、其跡を明にし經濟の許す限りに於て、支那女學生教養の擴張を計る事

五、通譯及び教案漢譯は、支那有志の人にて擔任の事、

右の外尚多少の條件の下に於て、今回卒業せし一組は、入學を許す事となりたるより、前に陳べし、彼

の國女生教養に於ける困難の幾分は、先づ大概除去せられしゆゑ、彼の國人は各省より有志者を選びて賛助せしむる事にまで進みました、

右の次第なれば、學校にても特に此の生徒に向ひては、精神の修養を先として、歸國の上教師たり得るの品性を養ふことに勉め、別に分教場を設け、教師中より二人を選抜して、朝夕の訓育と保護とに當らしめしに、生徒も存外に舍監の保護を喜び、次第に學校にも親しみ來りたれば、其の行動自然に本邦女徳の長所を慕ふに至り、且つ此の一組中には、年齢も長じ、品性も隨分衆を抽きたる生徒もありて、學校よりの仕向に付ても、一々能く了承して、之を一般へ傳へ、一學級は殆ど一家族の如き有様となりて我侭を云はず勉強せしゆゑ、毎期の試驗も、其成蹟頗る佳良にて、師弟共に其の業を樂しむ姿となり、剰さへ素養も亦可なり見る可きものありしより、幸ひに今日の好果を納めしむるに至りたるは、一同の喜ぶところではあれど、尚彼の女生等の歸國の上の成蹟を聞かざる間は、まだ大業に其の結果の終局如何は斷ずることが出來ません、

尚現今殘り居る女生徒十四名は、豫科或は普通科即ち中學科の教授を受けて居ますが、此の生徒の内には、今回卒業せし一組中の者にて、病氣缺席長かりし爲に、更に速成科を避けて、充分の教養を受けんとの意氣込より、此の學級に入り居るものもあり、又は一通り中等の教育を受け、本邦語の熟達を期し更に大學等に進まんことを期せしものもありますが稀には漢文の素養充分にて其れさまの思想深きもありて、是等十四名の生徒の前途は、素より一ならざる可けれど、今日の所にては一兩年前と違ひ、皆一心に勉學して居ますから、此の結果を豫想しますのは、恰も莟を蒔きたるの後、其の花の如何に咲き出づるであらうかを樂しむが如き思ひがあります、

小學女教師の收入

教育ある日本婦人に最も適當なる職業は何なるかと

間は、現代に於ける實狀に照して、先づ女敎師なりと返答するに躊躇せさる可きか、今東京市の小學敎師は、幾干の月俸に浴しつゝあるか、參考のため左に報せん

	女敎師數	平均一人當月俸額
麹町	四三	一九、一八六
神田	六九	一七、三六二
日本橋	七〇	一八、三一五
京橋	五三	一八、三二一
芝	五九	一七、三〇五
麻布	二七	一六、七〇四
赤坂	二一	一六、四二三
四谷	二四	一六、二〇八
牛込	四三	一六、六〇五
小石川	二五	一五、〇八〇
本鄕	二七	一六、七四一
下谷	四一	一七、一七一
淺草	六五	一七、六九二
本所	三六	一五、六九四
深川	四〇	一七、一五〇

以上六百四十三名の女敎師中には正敎員四百七十五名、准敎員十六名、專科敎員九十四名、代用敎員五十八名を含み居れり、而して最も多く女敎師を採用し居る區は、日本橋の七十に、神田の六十九、最も少きは赤坂の二十一に、四谷の二十四なり、扨て又最も多く月俸を與へ居るは麹町の十九圓餘に、京橋の十八圓餘なると、右の表によりて判然す可し以上を平均すれば六百四十三名の女敎師は、一人一ケ月に十七圓三十錢九厘づゝの月給を取りつゝあるなり

全國の女敎師(小學)員數を見るに、二萬百四十七人にて同男敎師の數は八萬五千百五十四人ありて、男女の計十萬五千三百〇一人あり、小學(尋常科のみ)の學級數は全國にて七萬六千七あるを、是れを悉く女敎師即ち前記の二萬百四十七人に受持たしめんとすれは、旋て非常なる不足を生ずるを見る可し、蓋し尋常小學の敎師を、悉く婦人に引き直しなばとの一說、當局者間に行はれつゝある折柄にもあれば、今後女子の職業として、女敎師は最も恰當して且つ歡迎さる可く、將來ます〳〵有望として見る可きものなり、因に東京市の男敎師は、代用をも入れて一

千二百三十二名、麻布の廿五圓三十五錢三厘が最多の平均一人月俸なり

子守學校の必要

子守と云ふ者は、實に大切なもので大切な可愛子供の守をさせ、所謂親の代理をさせるのである、然るに世人は左程意を注がず、如何にも等閑に附して、只だ親の手數が省かるれば、是で子守を雇つた目的を達したものと思つて居るのは、實に大間違である子守を雇ふにも、兎に角相當の年齢に達した婦人を雇ふなら格別、多くは經濟の上から、下女としては相當の給料を取れない十二三の少女を雇ふのである是等は實に危險の話て、十二三の少女と云へば、子供を世話する處では無い、自分が遊びたい年頃で、主人の子を放任して置いて、子守仲間が遊んで居る事は、決して珍しくないのてあるから、子供が往々怪我をする事もあるのである、元來子守にでも出やうと云ふのは、何れ貧民で敎育もない者であるから種々の點に付て害が起るのである、私が診察した患者の中で、此不注意の爲に、其子が病氣を起し、又は痼疾となつた者もある、現に此程診察した十七歲の女は癲癇であつたが、其病を起した原因はと云ふと二歲の折に子守が不注意であつた爲に、頭部に負傷したのが癲癇と爲つたのである、又某の家にて兄弟の子供二人とも腸窒扶斯に罹つたといふ事で迎ひが來たから、直に行つて見ると、腸出血を起して居る、看護婦も付いて居るから、命令以外の食物を與へないし、何うも子供に腸出血を起す筈はないのに如何にも不思議と研究して見たけれど、其原因が解らなかつた處が其子供は一時危篤であつたが、手を盡した甲斐あつて、全快したのである、其後一年程經て、右の子供に附いて居た看護婦に、或る病家で逢つたから段々當時の話を聞いて、始めて腸出血を起した原因が解つた、夫は子供には牛乳の外決して與へてはならぬと看護婦に命して置いたから、看護婦は此命令を遵守して居つたのですが、或日看護婦

が一寸病室を明けた時、下女が蓬萊豆を持つて來て牛乳ばかりではお可愛想だからと云ふので、喰べさせたから、子供は嬉しがつて喰べたのが、此腸出血を起した原因となつたことが解つた、此下女は子供思ひから與へたのであるが、是が却て仇と爲つたのは、畢竟下女に衞生思想がないからである、又子供が少しく泣けば適當の方法を以て、機嫌を直させる事もせず、濫りに食物を與へて、泣き止まらせるから、胃腸を害する事が少なくない、實に此子守の不注意が原因となつた病氣は中々多いのである、處が子守は主人に叱られるのが怖いから、斯ういふ不注意をと自白しない、前にも申した蓬萊豆は其例である、要するに子守の不注意から、消化機病、腦脊髓病杯を起すのが珍しくないのであるから、子守にする者は、第一に衞生思想其他保育上必要なる事柄を敎へる必要がある、是は第二段として、差當り現に子守に雇はれて居る者に、保育上必要なる觀念を吹込むのが急務である、獨逸では貴婦人の設立して居る慈善學校の中に、子守を養成する學校が出來て居る、夫は大抵巳に子守と成つて居る者が、夜分のみ通學するので、月謝を取らないのである、日本には未だ斯ういふ學校がないが、餘程前に福島縣の幼稚園で、始めた事があつた、是れも獨逸に倣つたのであつたが、生徒が少なかつたといふ事である、今日の如く事々物々進歩して行く此日本の首府たる東京に此必要の學校がないと云ふのは如何にも物足らぬ感じがする、元來此學校を設けるには、別に多額の費用は入らないから、貴婦人達が少し奮發すれば、容易に出來るので、出來さへすれば子守を置く家では、喜んで通學させるだらうと思ふ、斯して今一歩進めると、今の看護婦の樣な組織にして、十七八歳以上の女で子守志望の者を養成し、而して雇主あれば夫に向け、相當の給料を取る事としたら、親の方でも安心が出來るし、一方には婦人の職業が一つ増加する譯である、呉々も目下子守と爲て居る者丈にても、夜分訓養したいと思ふ

三宅省軒博士談

女學生の思想

大坂府淸水谷高等女學校にては、先頃生徒全體を一堂に集めて、大凡三十分の間次の質問を試みたり、

第一 女子に最も必要なる德義
第二 女子に在りて最も不德と思ふ事
第三 女子の最も大なる性質の長所
第四 女子の最も大なる性質の缺點
第五 女子の第一に勉む可き事
第六 女子に最も適當なる仕事
第七 女子に最も幸福なる境遇
第八 女子に最も不幸なる境遇
第九 世間にて最も賞讃す可き事
第十 世間にて最も擯斥す可き事

右十問を發し說明を與へて各自の所思を自由に記述せしめたるものを百分率として第二問及び其他の割合を示せば左の如し

▲女子が最も不德と思ふ事

種別			各學年の平均
嫉妬	一九、八	傲慢	一五、一
不節操	一三、六	多辯	一二、〇
不誠實	一〇、七	粗野	一〇、五
雜(依賴心虛弱等)	一二、〇	不明	六、二

▲女子に最も幸福なる境遇

圓滿なる家庭生活	五〇、七		
身體の健康	一〇、二	父母の長命	九、五
學藝に長ず	六、三	良性質	四、四
良緣	三、七	良子女	三、五
他の愛敬	三、五		
雜(富裕美貌學生等)	二、五	不明	五、七

▲女子に最も不幸なる境遇

一家の不和	三四、五	兩親の早失	一七、五
配遇の早失	一二、六	虛弱	七、八
獨身生活	七、二	無教育	五、二
世人の擯斥	三、〇	雜(貧窮等)	五、六
不明	六、七		

▲最も擯斥す可き事

不誠實	二九、二	不忠孝	八、八
盜賊其の他の犯罪	一九、六		
不品行	八、三	貪慾	六、九
邪慳	五、九	非愛國の行爲	三、九
惡口	二、八	不明	三、二
雜(嫉妬、傲慢、卑屈、奢侈)	一一、四		

女子武藝教訓唱歌

好武山人

仰ぐも高き千代田城
わが大君はかしこくも
廣き世界にためしなき
天つ日嗣の御子にして
至仁至愛にましませる
大みこゝろの尊くも
五倫の道を示しつゝ
文武の範を垂れ玉ふ。
かく有難き御世に逢ふ
われら臣民たるものは、
朝な夕なに忠孝の
二字を心にきざみつゝ
文武の道にわけ入りて
いそしみ學び束の間も
大みこゝろの尊さを
心にしめて忘るゝな。
かく安らけく身を置くも
我が大君のみめぐみぞ
かくて此世に我あるも
我が父母のみめぐみぞ
されば踏むべき人の道
忠孝二字は人として
たとひ身分は賤しきも
貴きものとなりにけれ。
君に仕へて忠となり
親に仕へて孝となる
人の文武に秀でなば
いかなる富貴威武とても
これを屈するものあらじ
はげめよ勵めもろ人よ
目を文學にそゝぎつゝ
心を武術にきたえかし。
模範に人をもとめなば

小楠公はそれならん
二度の詠歌の千歳に
傳ふは文の德にして
數度のいくさに荒くれし
敵のこゝろも打ひじき
時には敵をも救ひたる
心ぞまことの武なるらん。
七生國に報せんと
誓ひし人の子としても
耻かしからぬ忠義をば
たてたる君ぞ孝道も
あはせ行ひ末の世の
人の鑑となりしなり。
今や文運日に進み
山の奥にも咿唔の聲
聞かぬ隈なく開けゆく
事をし見れば開明の
實は擧ると見るゆれども

文は花なり武は實なり
花咲くにのみ目にとめで
實を結ぶにも心せよ。
武に起りたる我國は
常に武勇に輝きて
花の心と敷しまの
ほまれは高くなりにけり
されば武術に意をそゝぎ
身體を鍛ふもこの業に
精神を練るもこの業に
よりて勵めよたゆみなく。
武術は女子も心得て
緩急あれば應ずべく
護身の具ともなしぬべし
世の輕薄に誘はれて
やゝすれども薙刀や
鐵扇あるは手裡劍と
此上なき武術ありと知り
女子も學べよ身の爲に。



文學士 男爵 千秋季隆君選

松虫

天

月もよし夜よしと人をまつ虫の
鳴く音いよ〳〵すみ渡りつゝ
東京 吉田敏子

地

訪はるをわびて住むとは知らざらん
人まつむしのよもすがら鳴く
静岡 古谷みつ子

人

月をめで秋のあはれをひく琴に
しらべあはするまつむしのこゑ
東京 原三幸子

秀逸

◎
聲絶えずなけや松むしまれにだに
とひこぬ人のたちもよるべく
静岡 竹内光子

○○
虫の音のいづれはあれど秋の野に
人まつこゑをまづやたづねん
清國 富成梓子

○○
とはれぬになれたる宿も松虫の
こゑするよひはえこそねられね
埼玉 小川政子

○○
思ひわびいねがてにする秋の夜は
夢かうつゝかまつむしのこゑ
備後 杉原衣子

ゝゝゝ
姿こそみえねとゆかしまつむしの月にうたへるこゑのすゞしさ
愛知 榊原きく子

○
百草の花野を見よとひたすらに人まつむしのなくにやあるらむ
松山 上原のぶ子

○
秋風の身にしむころはかなしきをなとまつ虫のまちて鳴らむ
山口 村上操子

ゝ○
をすゝきの招く秋野をとひて見よひとまつ虫のきゝところなる
松山 田村多豆子

○　能登　粟倉菫子

夏草のしげりしながにこよひしも秋を知らするまつむしのこゑ

○　新潟　岩本芳子

松かせの音しつまりて更くる夜の月にすみゆくまつむしのこゑ

○　下野　井上尙子

つゆ毎に月をやとせるやれにはにわがよはこゝと松むしのなく

○　東京　永井さき子

しらつゆのこぼれてにほふ秋の野にやどらん月をまつ虫ぞなく

○　宮城　大槻初音子

さびしさはあきも末野の夕くれにとふひとあれとまつ虫のなく

、、、　東京　土田八重子

人きかぬ深山はるけきまつばらに聲を惜しまですだくまつむし

、、、　京都　足利八重子

住みすてゝ年ふるさとのかや原に誰まつむしのなきしきるらん

○　東京　爾津梅子

秋の野の千草の露にやとりしてたれをまつむし鳴きあかすらむ

、、、　栃木　井上瑞枝子

月すみて露は滿ちぬるむさしのになく松むしのこゑしきるなり

○　神奈川　中島茂子

われのみとおもひふけゆく山のはにいさよふ月をまつむしの聲

、○　和歌山　高内さゝら子

女郎花なまめきたてる秋の野にたれをまつむしこゝらなくらん

○　長野　北澤千枝子

夕立のはれてつゆけき草むらに我が世といでゝまつむしのなく

○　群馬　南澤しづ子

夕されば秋風いとゞ身にしみて聞くもかなしきまつむしのこゑ

、○　山梨　風間千代子

月よりもすみこそ渡れ庭の面にたれをまつむしよたゝなくらん

○　甲府　名取正代子

まつむしの聲すゞしげにうたふなり月すみのぼる松の木のもと

、、、　大阪　木村春江子

月きよみわきてあはれをさそふかな今日籠にこめし松虫のこゑ

○　熊本　田代喜和子

あきかぜにすてし扇の芝生にはひとまつむしのこゑあはれなり

○　佐賀　尾方綾子

誰をまつ虫のねあはれあきかせのふくかまに〳〵聞えけるかな

、、、　肥後　友永常子

分行てこゝかとゝへはなきやみぬはなれてきかむまつ虫のこゑ

○　豐後　松永しげ子

あたらしき姉のみはかをおとなへば小みちの草に松むしのなく

、、、　東京　古谷花子

ちとせふる松てふ虫は名のみにて霜かれにけりこのころのこゑ

、、、　大阪　福原菫子

武士のこてさしはらをわがゆけは人まつ虫のこゑしきるなり

○　常陸　岡田鷹子

琴の音の絶えにし後にきこゆなり嵯峨野の奥のまつむしのこゑ

○　陸前　平間あさ子

玉琴のしらべもうみてはしぬせば月すむにはにまつむしのこゑ

○　常陸　兒玉こう子

もろともに千歲の秋やちぎるらん菊のまがきにまつむしのなく

○　東京　靑木たま子

琴のねにかよひていとゞあはれなり月すむよはのまつむしの聲

○　東京　林　艶子

露しげき月すむ野邊によもすからなきもよわらぬまつ虫のこゑ

○　東京　林　環子

秋もなほ淺茅かはらにまつむしのこゑも聞えて夜はふけにけり

○　愛知　永井さい子

あはれにもゆかしかりけり玉たれをこすの大野のまつむしの聲

○　名古屋　不破きみ子
月すみて人まつむしの鳴く音こそよを宇治山のいほにきかなむ
、、、　長野　岡田千穂子
まつ虫の聲き〻しより古さとのいよ〻こひしくなりにけるかな
、、、　東京　服部彌惠子
穐にいつろすゝきがもとを宿としてたれを松虫よたゞなくなる
、、、　秋田　長田せつ子
よの塵をおもひはなれし草のとに誰をやまたんまつむしのこゑ
○　秋田　細矢はる子
我せこのかへり遅しとおもふみにこゝろをそふる庭のまつむし
、、、　東京　碓井のぶ子
わがせこがころもつくろふ夕まぐれこゝろに通ふ松むしのなく
、、、　東京　伊藤竹子
いく秋もなれて住よき庭くさにちよまつむしのいはひてそなく
、○　東京　伊藤ふく子
もゝ竹の花のにしきをしたのべにあやおるこゑや誰をまつむし
○　東京　伊藤英子
誰か爲にきそひ鳴らむあさちふのつゆよりしけくまつ虫のなく
○　東京　伊藤とし子
あつまやのあまりほどふる雨そゝぎよすがらぬれて松虫のなく
○　薩摩　松原岑子
秋たちてゆふべさびしき草の庵に人まつむしの音にたてゝ鳴く
○　岐阜　山田ふさ子
あきはきのさかりとさける我庭をたれにみよとてまつ虫のなく
、、、　岐阜　豐田冬子
入ちたれのあきのにしきの花むしろ見にこむ人をまつ虫のなく
○　小樽　牧　淑子
行くれて野守がやどに路とへばしるべせんとやまつむしのなく
○　東京　吉岡龜子

よもすがら雨そゝきする軒はにてぬれつゝ誰をまつむしのなく
、、○　東京　松本まつ子
夕まくれこさめそほふる竹のやに誰とちぎりてまつむしのなく
○　東京　高野元子
よもすがら月すみわたるあさちふの露にみだれて松むしのなく
○　東京　西村直子
たまくらののへのよ露にぬれながらこゑのかぎりに松虫のなく
、、○　東京　河合泉子
のべとほくかりあつめたる松虫のわか花そのになくゆふべかな
○　名古屋　林田糸子
露ふかき秋の野面によもすからたれをまつむしなきあかすらむ
○　岡山　黒瀬まさの子
山さとの秋はみやこにまさるらん千種さへ野にまつむしのこゑ
○　宮城　鈴木菊史子
文を讀むまる窓ちかくおとつれてなく松むしのこゑあはれなり
○　備後　石井妙子
さらでだにさびしき秋の夕暮にあはれをそふるまつむしのこゑ
、○　備後　石井千鶴子
訪ふ人もなきあはらやの垣の外に誰まつむしの夜たゞ鳴くらん
○　群馬　飯田かつの子
露しげき淺ちが庭にこゑたてゝなにをまつむしなきあかすらん
、○　埼玉　横田やな子
まつむしの聲きゝがてらしらつゆの野守が庵にくさまくらせん
、、、　埼玉　横田秋子
むさし野や千代をあまたに鳴つらんつゆもはれなき松むしの聲
○　埼玉　横田政子
よひ〳〵に友まつむしのこゑきゝて野守がいほに住む人やたれ
○　東京　永井ふさ子
ちぎりおきし人まつ虫の聲すなりまだ夜をのこす穐がきのもと

、、
ふる雨にちゝとまつむし集くなりぬれしはゝその座をたのみて　秋田 古瀬惟子

○
きく人もあらのゝ庵のさむしろにたれまつ虫の聲しきるらん　秋田 古瀬りく子

、、、
月いてぬ松むしなきぬ君よいまいつこのさとにそをしのぶらむ　群馬 大澤華子

○
つま琴をしらふる窓の夕まぐれのき端てゝしくまつむしのなく　東京 瀬藤千代子

○
道のへの草にまつ虫なきさしてひとゝひかほのゆふくれのそら　東京 山口琴子

○
夢ならぬまくらにたえすきこゆなり誰を松むしなきあかすらん　伊豫 廣田政美子

○
契りおきし友まだみえすまつ虫の聲はいよ〳〵さへわたりけり　同 廣田せき子

、、、
いろ〳〵になくむしの音はしけゝれとわきてかなしき松虫の聲　大和 栗山多加子

○
松むしの聲もさやかになりにけり小夜ふけわたるかとの竹むら　大和 栗山俊子

、、、
物思ふれやのつま戸のさびしきをとふ人あれとまつむしのなく　宮城 大槻やす子

、、、
たか宿ぞ糸くるおともかすかにて人まつむしのこゑしきるなり　千葉 木村きよ子

、、○
破戸もる月を友なるわがいほにおとづれそめしまつむしのこゑ　伊豫 樋口孝子

、、、
はしちかく月をなかむる足もとにこゑもあはれに松むしのなく　大阪 池田英子

、、、
蚊やり火のゝぼる門邊に松虫のうたふこわれのすみにけるかな　長野 關谷己子

、、、
山寺のこゑも身にしむたそがれを聲もあはれにまつむしのなく　香川 松永茂子

○
おくまりし深山かくれのわがやどは人まつむしの聲ばかりして　群馬 石井寛子

、、
くちはてしわら家がかげに日ざかりを侘ながきりと松蟲のなく　東京 田中千賀子

○
ふけぬれは聞く人もなきさ夜中に誰をまつむしひとりなくらん　相州 岩谷淺子

、、、
旅ころもかへり來つれはふる里のわが家の軒にまつむしのなく　東京 敷島うた子

女郎花

天

露にふし風になびけどをみなへしかはらぬいろや操なるらん　丹波 山口敏子

地

おく露にいろめづらしき女郎花なびくかたより秋かぜぞ吹く　東京 照内せい子

人

姿こそ風になびけど女郎花幾世かはらぬ花の色かな　千葉 木村きよ子

秀逸

◎ 山川の岸べに咲ける女郎花誘ふ水にもなびかざりけり　　備後　石井妙子

○○ 露ふかき嵯峨野の奥のをみなへし誰にこゝろをよせて咲くらん　　東京　敷島うた子

○○ 秋のゝによそほひたてるをみなへし澤べの水やかゞみなるらむ　　東京　西村直子

ゝゝ○ なゝ草もち草もにほふませのみちにひとりめに立つ女郎花かな　　東京　高野元子

ゝ○ をみなへし花のさかりはひとゝきのかなりと見にとあかぬ色哉　　東京　吉岡亀子

ゝ○ をみなへしにほへるのへに宿らまし露のぬれ衣よしやきるとも　　靜岡　竹内光子

○ むかし偲ふむさしが原に咲き出てゝ露におき伏すをみなへしか哉　　小樽　牧淑子

○ かへるさをいそくゆふへの道のへに心ひかるゝおみなへしかな　　岐阜　豊田冬子

○ あき風にふかれてにほふをみなへしたれか心になひきそめけむ　　岐阜　山田ふさ子

ゝ○ 露をさへ重げに見ゆるをみなへし秋かぜいかにつれなかるらむ　　薩摩　松原孝子

ゝ○ うき世には遠さと小野のをみなへし風には靡くものとしらずや　　東京　廣瀬健子

○ 夕されはきりのまかきのかいまみにおもかけあかぬ女郎花かな　　清國　宮成梓子

○ 月きよき小川のきしに露をおひてよそほひたてるおみなへし哉　　東京　伊藤ふく子

○ 白露の玉のかさしをよそほひてゑみさかえたるをみなへしかな　　東京　伊藤竹子

○ 百草の數あるなかにたわやきていろなつかしきをみなへしかな　　東京　伊藤とし子

ゝゝゝ なにしおふ優しき花のをみなへしたてる姿のみさをいかにや　　東京　碓井のぶ子

ゝゝゝ 家つとに折られしのちのをみなめしを瓶の水をかゞみとやみん　　秋田　細矢はる子

ゝゝゝ た折られていかに恨みんをみなめしそれとはいはぬ口なしの色　　秋田　長田せつ子

ゝ○ をとめ子か姿にも似てをみなへしかさしの玉とおけるしらつゆ　　東京　服部[?]惠子

○ 七草のうちにもいとゞ色にてゝなまめきたてりをみなへしの花　　長野　岡田千[?]子

ゝゝ○ 人ことのさが野にたてる女郎花たれにこゝろをよせてさくらん　　宮城　大槻やす子

○ 薄きりの中に咲きけるおみなへしなまめく色そやさしかるらん　　大和　栗山たか子

○ なまめきし名にはあれとも女郎花いはぬ色なるはなのあはれさ　　宮城　大槻初音子

○ 　　東京　永井るき子

風はさそひ月はやどれど女郎花すくきすかたの程そゆかしき
○　下野　井上尙子
しなれふす露をなみたのをみなへしその口なしの色にいはせて
ヽヽヽ　新潟　岩本芳子
おく露に月をむすひてをみなへしひともとにほふ庭のしはかき
ヽヽヽ　能登　栗倉萱子
故さとを離るゝ五里の野山路をまはらに咲けるをみなへしかな
○　松山　上原のぶ子
いはぬ色に咲てなとかはをみなへし思ひありけの露にふすらむ
ヽヽヽ　山口　村上操子
女郎花ひとかましくもいはれてそなか〳〵つらき秋にあふらむ
ヽヽヽ　松山　田村多豆子
さそふ水あらはいなむのこゝろさへみえてなまめく女郎花かな
○　愛知　永井さい子
くちなしのいはぬ色ゆゑ女郎花すかたさへこそゆかしかりけれ
○　東京　土田八重子
荻むらのかけに立ちたる女郎花うしろめたけにゆらくなりけり
○　東京　林　環子
八千草のおほかる野邊の目移しもすかたやさしきをみなへし哉
○　東京　林　艶子
うすきりのあなたにたちて白露をかさしとなせるをみなへし哉
○　東京　青木たま子
咲きしよりすかたの池の水かゝみ清くもにほふをみなへしかな
ヽヽヽ　常陸　兒玉こう子
しらつゆの玉をかさして薄霧にほのかにゝほふをみなへしかな
ヽ○　常陸　岡田萬子
人ことのさかのゝおくの女郎花なとくちなしの色にさくらむ
○　東京　河合象子
まなひ草しけれるなかのをみなへしをしへの庭に咲いでにけり
ヽ○　東京　松本まつ子
やちくさのにしき敷のゝをみなへしならふ色なき花さかりかな
ヽ○　東京　原三幸子
よの人のくちもさかのゝをみなへしうへこそいはぬ色に咲らめ
○　大和　栗山俊子
秋風のふくがまに〳〵おみなへし野邊のゆふへに打靡きつゝ
○　伊豫　廣田政美子
あたし人に手折られしとか女郎花愛つるほとなくしほみける哉
○　伊豫　廣田せき子
きり深き野邊わけくれは女郎花おもはゆけにも咲きにほふなり
○　東京　山口琴子
ふく風に露もこほれてをみなへしうしろめたくも打なひきつゝ
ヽヽヽ　東京　瀬藤千代子
しけりあふよもきか中の女郎花いた〳〵しくもおもほゆるかな
○　群馬　大澤華子
をみなへし吹くあきかせになひくなり歌よむ人のこゝろ動かん
ヽヽヽ　秋田　古瀬りく子
たまくらのゝへにひくれて女郎花やとらは露のぬれきぬやきん
○　秋田　古瀬惟子
をみなへしなひく姿にくちなしのいふにいはれぬ色もみえけり
○　東京　永井ふさ子
女郎花なまめくすかたあき風にやつるゝさまそあはれなりける
○　埼玉　横田政子
露ふかき身は仇しのゝをみなへし花のゑまひのにくからぬかな
ヽヽヽ　埼玉　横田秋子
片岡のあしたの原のをみなへしつゆにふしてやかせにくれりて
○　埼玉　横田やな子
をみなへしおほかるのへをきてみれは花の色香に秋かせそふく
◎　群馬　飯田かつの子

をみなへし咲みたれたる秋ののゝわか庭ならはいかにうれしき
ゝゝ〇 備後 石井千鶴子

露にたに堪へてしをろゝをみなへし靡くとはかり人の見ろらん
ゝゝ〇 備後 杉原衣子

垣の外にひともとたてろをみなへし心をおきてつゆやとろらん
〇 宮城 鈴木菊史子

すきしとしともにあそひし秋のゝに友に手向のをみなへしかな
ゝゝゝ 岡山 黒瀬政乃子

風そよく片田のあたりゆふまくれ小川のきしにさくをみなへし
ゝゝゝ 長野 關谷巳子

をみなへし露と名殘をゝしみつゝ今日も市場にうられてそゆく
〇 三重 黒田代音子

しほらしきさまにあつさも忘れくさたちよろ袖に露はこほれて
〇 東京 古谷花子

手まくらに花さくのへの女郎花たかあきかせにしほれふすらむ
〇 越後 松永しけ子

山の邊へ行く道すから手折りつゝ君とめてぬろをみなへしかな
〇 肥後 友永常子

をみなへしかせになひきて白露の玉かさりするひまもなけなる
ゝゝゝ 佐賀 尾方綾子

夕つく日かたふくのへの女郎花つゆをおもけにかさしてそさく
〇 熊本 田代喜和子

人まれくをはなかなかになまめきてたつもやさしき女郎花かな
〇 大坂 木村春江子

置く露を玉とみたしてをみなへし秋野のかせになひくやさしさ
〇 甲府 名取正代子

女郎花すかたも妙にくちなしのつゝましけなるいろのゆかしさ
〇 伊豆 美矢竹照子

凉風にやさしきこゝろなひかせてさくやをみなの花もありける
ゝゝゝ 群馬 南澤しつ子

吹く風に靡ひきつ野路のをみなへしなと女の如くうつくしき哉
〇 山梨 風間千代子

八千草のしけるなかにもとりわきてあたに匂へる女郎花かな
ゝゝゝ 長野 北澤千秋子

秋風のたつをもまたてをみなへし夏野にひとり咲き初めにけり
〇 伊勢 藤堂しげ子

露おきてこかれ色増すをみなへし手折るもをしき花のすかたよ
ゝゝゝ 東京 田中千賀子

咲いてぬあゝうつくしや女郎花手折りてきみかまへにさゝけん
ゝゝゝ 東京 田中睦子

花うりか手折らんことのかなしくてうつしかへたる野の女郎花
ゝゝゝ 大阪 池田英子

みろからにすかたやさしき女郎花ひとえた手をり床にいけはや
ゝゝ 和歌山 植木撫子

白露をかさしになせろをみなへしあたになひくな玉もみたれん
ゝゝ 福井 岩橋花子

かけ見れはたへぬはかりの白露を秋のかさしにさくをみなへし
〇 東京 關津樺子

秋の野をわけつゝゆけは女郎花なつかしくこそ咲きにほひけれ
ゝゝゝ 栃木 井上瑞枝子

里道の倶梨迦羅たほろ薮のうちに今をさかりにをみなへしさく
〇 神奈川 中島茂子

おくつゆにひもやときけむ女郎花つまとふしかを萩にまかせて
ゝゝ〇 和歌山 高内さくら子

秋の野になまめきたちて墨染のそてにもなひくをみなへしかな
〇 相州 岩谷淺子

女郎花さけろあたりは八千草のはなもはへあるいろなかろらん
ゝゝゝ 群馬 石井寛子

露しげき秋の野のへのをみなへし見てもあかなき花のいろかな

◎一字一句も違はぬ歌　今回の投稿中、左の如く同じき歌あり、偶然暗合なるべけれど、調の古めかしきと、あまりにめづらしきことなれば、いさゝかそのよしかいつく。

○　　　　名古屋　林田糸子

もの云はゞこと問はましを女郎花など口なしの色に咲きけむ

○　　　　大坂　福原菫子

物いはゞ事とはましをゝみなへしなどくちなしの色にさきけん

短文

天賞

起臥　　近江　金子繁子

坐せば心も澄みにけり、静けき秋の雨の音、起ては心ものどかなり、おぼろにかすむ春の月、造化ともうたゝねの、夢こたのしきほとゝぎす、不言不説のさよ中に、いとり微笑す雪の窓、

評　心からにてぞ世はおもしろし、おもしろき世をいつの頃よりか、情け物のわれから捨てけん。

地賞

鐘樓守　　埼玉　野川芳子

伊吹の山麓に甍破れ、扉落ち庭は幾星霜の草生ふるまゝに任せ、寂寞の苔にむされたる敗寺あり、主僧去年他界してより後住の鐘も響かず、不斷の香も絶え、常明の燈も消ゆる中に、殘るは六十に餘る鐘樓守のみ、あはれこゝも憂世の外にあらざりしが、

評　その撞かれたる手より撞く鐘の、いかに哀れにひゞくらん

人賞

蟋蟀　　東京　永井ふさ子

或秋の夕方庭の紅葉の木の下で、蟋蟀が哀な聲で歌巻を讀んで居た、其聲が如何にも悲いので、紅葉は一葉二葉と漸々散つた。蟋蟀は夜もすがら歌つた、紅葉は夜もすがら散つた。其翌朝起きて見ると、蟋蟀は紅葉の錦に包まれて死んでゐた。

評　幽絶凄絶

選外秀逸

○○初秋　　東京　神田けい子

目にはさやかに見えねども、葛の葉返す風の音にそれと驚かれつゝ。天朗にして月には既に秋の光あり。鳴く虫には秋の聲あり。紐解き初めし千草の花には秋の色あり

桐の葉誘ふ風颯々として、折しも鳴き渡る初雁は先秋の音信にやあらむ

評　秋來ぬと目にはやかに見えれども の歌を細叙し得たり、

○○夏の夜　　千葉　木村きよ子

地にも草にもしつとりと露が下りて、月は向ふの松が枝を潜り、庭の竹の葉越しに射込んで、椽に淡き〳〵墨繪を畫いて居る、それが折節の風にゆらぐと、軒端の風鈴が忙しそうに鳴る垣のほとりには、もう名の知れぬ虫が鳴き出した。

評　松の枝を潜り、竹の葉をこせる、この月は一しほ涼しかるべし、

○○あらし　　下野　井上侚子

警鐘亂打、二十分餘で大谷川の橋が落ちる、水瀬が變つてみるまに四十戸も流れる、水死者がある日光間の鐵道が不通まるで夢の様な、嵐のたえまに聞ゆる半鐘、隣家の繼母の子を叱る聲、あいたーと叫ぶこゑの物すごき。

評　終の大あらしこそ物すごきものなりしか、

○○七夕　　松山　田村多豆子

久方のそらごとゝは承れと、ゆかしくをかしきは天の川浪なみ〳〵ならぬ、棚機つめの逢瀬になむ、鵲の橋の萬代にかけ渡して、變らぬおほむ契のみは、世のうき秋のならひにもれて、いかばかりか嬉しうおほすらむかし、下界にても、笹竹を立ならべて、五色のたにざくに歌かきて捧け、あるは時にあへる西瓜茄子など、三方にもり供へ、あるは衣ぬふ針に糸さへそへて奉れる、女の童の心づくしのほども、思ひやられていとをかし、されと一夜にして歸りますといふなる、彥星のつれなき御心はかへす〳〵もうらめしうなむ、

評　すら〳〵としたる筆づかひ、天の川の流れもかゝるべしとおもほゆ、『規定の百字を超過したれど、文のすてがたきまゝに』

、、○雨後月　　三重　梁田代音子

雨後の凉しさに露けき汀を彷よへば、閑かに夢結びし水鳥の、さと音立てゝ今し夕立の洗ひし岩蔭に、殘る波紋のきえゆく方を見送る折しも、一輪の明月湖心に泛びぬ、泛けき影を亂さじとや、梢を渡る風はあれど、水はさながら鏡の如し、

、〇夏の朝夕　　東京　土田八重子

殘月淡く池水に、そよふく風は蓮の浮葉の露をまろばす、時しも開く赤白の花、夏の朝ぞ心地よし。倒れ臥したる草木打水に驚きて顔をあげ、行水に夕月の影を碎き、地上には松影さやかに、凉棚の上笑聲涌きぬ、夏の夕べ亦實に樂し、

〇夏山の曙　　東京　永井さき子

早く起き出て、山高く登行けば、草茂りて路も幽になれり。靄渡る露最深く、千草の白玉結けたる、辿行く己、裳裾の打濕たるに朝風の颯々と吹渡る、昨夕の暑さも夢とこそ。明殘る星の如く點々たる白ゆりに、漂う赫く朝日の影、下界は未だ夢さめずして。

〇涼しきもの　　能登　栗倉菫子

縫目正しき廣庭に、隅なく水を打ちたる　棚のこわい帷子を着た時　夕立の濟むだ後の景色　氷屋の店に氷を刻むを見たるそれに洗ひ髮の束髮に白きリボンを懸けたると　お隣りの露子さんの御眼。

〇螢舟　　相摸　山本久代子

境川の夜船に晏をさけました時、川上から龍燈とも云ふ様なものが二つ三つ、流れの儘に明滅と。怪みながら舟を漕ぎ寄せて見ると、葦舟三艘へ螢一疋づゝ舳手に。詩人の仕業でしようか、惡戯兒の仕業でしようか。

、、、朝顔　　群馬　南澤靜子

「この朝顔の花の咲く頃には、僕も勇ましく卒業證書を提つて歸つて來るから………」

夏は來た
朝顔は幾度か咲いては凋み、凋んでは咲き、今朝最後の蕾が咲いたけれど…………あゝ兄上は…………今に何の音信もないのである…………

〇撫子　　肥後　友永常子

土は裂け草葉はよろゝと云ふ、此日盛にも凋れず、ひとり咲匂ひて居るのは撫子の花である、そうして花の色は唐紅に、心は敷島の大和錦に匂ふて居る、されば此花を見る毎に、我子もかゝれと思はぬ日はない、

〇夕立後の虹　　群馬　吉田露子

雷遠くわたり、墨を流せし如き空漸く紫金を色彩り、草木人心皆我にかへりし時夕陽の餘光雨氣に映して、中天高く架かりし七色の橋、早や東山の松の根かたに消えんとす、あはれ月姫渡る風情を見んと、山姫も出てゝ眺むるものを、

〇養蠶の樂　　長野　岡田千穗子

炎天に汗を流し、雨降れば蓑笠にて桑を摘み、長き日に食も忘れ短き夜寢るを欲せず、それを却て樂しみて苦とせず、三四十日間、其甲斐有りて、雪の如き光澤、筆も及ばぬ形、石の如く堅き繭の黄金色なる藁の中に、チラ〳〵と作り揚りし其心地こそ。

〇夢？現？　　香川　松永茂子

十六夜の月皎々として照らす折、日頃焦れに焦れたる、やさしき君の聲して、折戸を叩く音するたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

繙き初めし詩集打ちすてゝ、とゞろく胸を押ししづめつゝ、戸を明けて外を眺むれば、庭のやり水音高し。

、、、ひくらし　　群馬　大澤筆子

せゝらきゆるきいさら川邊、夏の朝夕の、おもしろや、涼風に靈

の暑を忘るゝ頃、なくのみと思ひし蝉、あら思ひもよらすや、けさとく起出てゝみれば、朝風ゆるう若葉涼しきさゆらきに、可憐の聲ふりたてゝ、をちこちなくれきかんとは、

、、、親しき友　岡山　黒瀬政野子

残暑の障りにてや、ふと床に打臥す、五六日食も進まれば、余程衰へしと母の宣ふ、折しも聞馴し聲の耳に入りければ、我を忘れて刎起き、見れば親しき友のそれとは知らで、訪はせ給ふ最懐しさ、あなたはまーと、妾のやつれし態を見て、ホロリ一滴厚き涙を以て慰められ、日一日と、もとに復せり、嗚呼痛める時には親しき友程の薬はあるまじ、

○人も斯くこそ　長野　關谷己子

四季の花、いづれも眺めうれしきが、その中にも秋の草花程やさしき風情あるはあらじ、露にみだるゝ萩、月にうつろふ女郎花、桔梗の色のいとやさしく、刈萱すゝきの飾らぬけはひなどいとゆかし、女人もこの七草の如くあらまほしく思はるゝなり、

○清げなるもの　和歌山　高内さくら子

雲のあした　天井にすめる月　ちごの口もと、色白くむく／＼とこえたるがほゝえみたるこそまして、はりなどの器に雪高かうもり白銀の匙つけて出したる、

、、、茶臼山　長重　柳澤政子

葵の幕に風輕く、莞爾と戰を望む家康、息も忙しき一士、突と幕外に平伏し『木村長門守の首を持參仕り候』『何、木村の首どれ近う』三寶ッ上、鍬形の兜堂と生るが如き傍に、流石の老狸聲曇り、『オゝ長門』血汐に赤き緒を解けば、名香馨し茶臼山。

新體詩

天賞

草の庵　東京　山田喜久子

假にむすびし草のいほ
かり寢の夢もはや三とせ
しげる葎に露ふかく
柴の折戸に鶉ぞ逼ふ。
細きけむりに一すぢの
まことをこめて立のぼる
心をしらで世の人は
世捨人よと笑ふめり
○○○○○○○○
うき世の人も山川も
眠にしづむ眞夜中に
よもぎの窓に影すみて
月ぞ庵をてらすなる。

地賞

西行法師　東京　山本康子

鴫たつ澤のゆふまぐれ

物のあはれを卿ちけん
むかしの人の跡とへば
いまも身にしむ秋の風

人賞

秋野

常陸　岡田萬子

秋風吹きし夕より　野邊の千草を來て見れは
尾花もいつか穂に出て、招く姿のをかしきに
靡くもあはれ女郎花　思ひ亂るゝ苅萱や
何を眞葛の恨み顔　人待つ虫もあはれなり
よその涙はしら露の　惠みも深き撫子は
優しの姿愛らしく　瑠璃の杯手にとりて
笑める桔梗も哀れなり　きり／＼と鳴く管卷に
綻び初めし糸秋の　織りし錦も美しや
斯くて夜寒に成り行けば　千草は枯て虫も死し
榮華は同し野邊の土　只天地のとことはに
我も幾度逢はむ秋かは

選外秀逸

◎白河の秋

清國　富成梓子

潯陽江のそのかみを　思へばこゝも唐國や
岸のやなぎの糸のあや　亂れて月も影亂す
白河に秋の風すみぬ　むかしを今に思ひ出て
あはれを知るや泊舟　吾もなみだを添ばやと
四の緒琴のしのび音に　空にも渡るかさゝぎの
まつ夜は更て曉つきの
聲よりおつる露さむし。

○靈祭り

大阪　木村春江

文月の今日十五夜の盆踊　囃太鼓や節音頭
浮かれ浮かるゝ村人の　月の圓居を他にして
のぼる畑のなかりせば　ありとも見えぬ草の屋に
一人して見る盆の月
父は千里の波の外　母の慈愛もしらぬ身は
只兄君を賴みてそ　吾は乙女となりにしか
父と賴みし兄君は　母と慕ひし兄上は
國の爲とて先つ年　異郷の空にはてましぬ
斯あるべしと豫てより　さとし給ひし言の葉を
努忘れしにあらねとも　ともすれは又しのばれて
窓の戸もるゝ秋風に　幾度袖をしほりけむ
吊ふ人も荒野原　いつか秋風立ち初めて

露冷かに虫なきて　「君かむくろもくちやせむ
むくろは土に歸るとも　いかでかくちん君のたま
君の御爲國のため　つくし結ひし君が靈
いざ歸りませわか傍に
靈むかふべくをり立て　もやす松明うち烟り
わりし情の俤を　せめて朧にうつれかし
又も思にかきくれて　いつかしめりし袖の露
しほるゝ心はげまして　涙に汲みし手向水
うつす閼伽桶底淸く　なかむるからに澄み映る
月や想のすがたかも」

〻○あかつき　大和　栗山傚子

眞野の萩原分け行けは　花に結べる露の玉
袖にくだけてちりかゝ　にはの千草のはなの上
垣根に又も身をよせて　長き夜すがらきり〳〵す
冬のあはれを鳴あかす　かなしの聲の身にしみて
聲さへさむくおほゆなれ

〻○讀書　越後　松永繁子

ゆふべ机に打向ひつゝ
繙く文の興淺からず

窓を洩る風火影ゆすりて
軒に虫の音ジジと鳴くかな

○さゝやき　東京　廣瀬韮子

天地に何の精あれば、　氣高きかほり森のおく、
靜けき夏をしろ〴〵と、　咲ける姿かゆりの花。

○

るりにも似ける碧空を、　星は飛ぶなり靈光の如、
そのみ光りを吸はんとて、　石はいざりぬ此處彼處。

○

散り行く花を木下陰、　哀れと泣きて掌に、
いたはる情淡じなば、　如何に嬉しき世ならんに。

○

思はじとすれど漂泊の、　かよわきものゝ運命とて
夕の雲の色々に、　戀れたき影のうかぶかな。

○

治亂を知らぬ若うどの、　眸は天つ星のこと、
輝きとはにうるはしう、　讃しまるゝ瞬きや。

○世の人　下野　井上倚子

置そふ露もかにみてる　うばらの色をなつかしみ
手折とすれば花かげに　鋭きとげのひそめるを
情こもりて涼しけの　人のまなこの底よりは
あやしき光人をゐる　矢をたゝへて愛らしき
花の唇をたまのごと　ころびて出る言のはは
僞おほき世のならひ　舌は人さす刄なり
錦のころもあやの袖　美美にきかざるよの人の
心のおくに鬼はすめり。

○蚊遣火　肥後　友永常子

かやりの烟たえまなく
蚊帳もあらぬ賤か家の
ひくき軒端に下たれて
夏の夜中こそあはれなれ

○露の玉　讃岐　松永茂子

我たゞ一人とく起きて
野邊のそこ此處逍遙ひぬ
八千草の上に置く露の
思ふばかりにきらめきて
あゝ心なの吹く風や
散らさじ踏まじとせし物を。
朝の清き氣吸はむと
肩うす寒く吹く風に
眞珠の玉のそれかとも
ほろりと散りて亂れけり
暫しさまよう我さへも

○秋草　長野　關谷已子

咲いた〳〵と童云ふ、
露にみだるゝ萩の花、
乙女の籠の主となり、
秋の七草未だ早し、
桔梗漸く花三つ
あはれ市へと賣られゆく

短歌

天賞

海邊秋夕　千葉　藤田詮子

今よりは衣うつらんあしのやの
浦風さむし秋の夕くれ

地賞

夕萩　東京　吉田敏子

夕まぐれ涼しき風をやどしつゝ
露にはうとき萩の一むら

人賞

擣衣　東京　碓井のぶ子

ころもうつ音のみたかくきこえつゝ
いよゝさびしき秋の夜半哉

選外秀逸

◎海邊夕　神田　西村直子

汐あみし人はかへりて月きよみ
なつしらなみのよるぞすゞしき

○○夜虫　肥後　友永常子

庭の面の千草のはなをよな〳〵に
もりわかしてや虫のなくらむ

○○栗の花　埼玉　横田やな子

賤の女か爪木にかけてめせといふ
くりの花ちる大原のさと

○○初秋露　備後　石井妙子

この朝けあさちか原におく露の
ふかきを見れは秋や立つらん

、〇夕立晴　東京　敷島うた子
はら／＼と露はこほれてゆふたちのなこりすゝしき庭のさゝ原

、〇秋　東京　神田けい子
あさ風の吹かは散りなむ秋はきのうつろふ花もむすふ夜つゆも

、〇折にふれて　越後　松永しげ子
四年ふりむかし馴染の友にあひてかたるおはしま月はそうさす

、、〇夏浦風　東京　古谷花子
花ならは袖につゝして家つとにもてゆかましを夏のうらかせ

〇折にふれて　愛知　榊原きく子
ゆふぐれの野路を友とたゞふたりたもとつられて語るうれしさ

〇城跡月　下野　井上尙子
城めぐる御ほりのみづにすむ月はむかしながらの松かせの聲

〇籬朝顔　松山　上原のふ子
あさかほは裏おもてなき中かきにとなりへたてす吹いてにけり

〇故郷を思ふ　能登　栗倉益子
故郷におくるふみをば書きすてゝふるさと戀ふるこのゆふへ哉

〇雁　備後　石井千鶴子
小夜ふけて月影きよくすみわたる空を鳴き行くかりかねのむれ

〇月下萩　東京　永井さき子
めてまとひ袖をなふれそ秋萩のつゆにやとれる月やこほれん

、、〇月夜擣衣　駿河　島根初子
うつおともさやけかりけり久方の月のかつらのさとのきぬたは

〇雨後虫　宮城　大槻初音子
むらさめの窓うつ音はしつまりてふりのこりたるすゝむしの聲

、、〇立秋　東京　土田八重子
くれぬ間は秋來にけりと覺えねとふけゆく夜半の風身にしみぬ

、、、折にふれて　群馬　大澤峯子
幾そたびくちすさみけりあゝされは君にさゝけむおん歌もかな

〇秋夜　東京　永井ふさ子
をきの葉に月はやとりてすゝむしのなく音すゝしき秋の夜半か

、〇草花秋近　東京　牧野きぬ子
秋ちかくなりにけらしなうなゐ子が刈ゆく草にはなもましれは

、、、鈴虫　相模　山本久代子
しらつゆの玉の宮居のしつけきにまた一しきり鈴むしのこゑ

、〇初秋露　東京　小池まつ子
松風は音かはられとにはくさにつゆおきそめてあきは來にけり

、、、避暑　伊豆　美矢竹照子
たへかたき暑さをさけてかまくらに汐あむ人のおほきころかな

、、、虫　群馬　南澤靜子
草ふかく露しけき野をむし鳴いてたそかれて行く落武者のかけ

〇他郷月　大坂　木村春江子
いづかたも同じひかりときゝつれとなほしのはるゝ西の空かな

、〇名所鹿　常陸　岡田まん子
たかさごの松のあらしに霧はれて尾のへの鹿もつきになくなり

、〇旅中月　三重　黒田代音子
旅やかた月をまくらのおはしまにみやこのそらをしはし忘れぬ

〇瀧邊螢　肥後　友永常子
岩かねにかゝれる瀧のしらいとも螢には見えすおとはかりして

〇鈴虫　群馬　竹のふし子
あいらしき聲をしるへにたちよれはくさむらことに鈴虫のこゑ

〇蓮　備後　杉原衣子
水底にしつみたるらしはちす葉をこほれておつる露のしらたま

、〇薄　東京　關澤梅子
風ふかはいかに亂れん露たにもおもけにみゆる野邊のかるかや

〇秋夕　群馬　石井寛子
荻の葉のうへこす風の音なくてさひしかりけり秋のゆふくれ

〇撫子　京都　旭のり子
たとふれは片山里のたをやめがこゝろもあかきなでしこのはな

ゝゝ〇夕立　和歌山　高内さくら子

ふく風もすゞしくなりぬをちかたにむれたつくもやゆふ立の雨

〇百合　東京　美矢竹光子

夏草のしげみが中のひめゆりはしげきおもひのおりがほにさく

〇朝顔　群馬　吉田露子

露のひぬ色のふかさを縫ふで染め友におくらんかきのあさがほ

ゝゝ七夕　東京　服部彌惠子

戀すてふ身は憂ふしのたなはたやとしに一度の逢ふよしもがな

ゝゝゝ牧畜　東京　伊藤英子

みめぐみの廣野に住てよの人のくすりとなるらうしやよのなか

ゝゝ〇母上への文の奥に　薩摩　松原峯子

ちゝはゝのなさけもあつき玉章にいよゝこひしきふる里のそら

〇初秋露　岐阜　山田ふさ子

なく虫のはつ聲きゝてのへみれはつゆ知りそむる秋はきにけり

〇川のきり　岐阜　豐田ふゆ子

川なみの上にたなびくうす霧は風になかれてゆくにそありける

〇撫子　小樽　牧淑子

垣つゞき咲くなつくさに交はりてひとりやさしき大和なでしこ

〇秋虫　名古屋　林田糸子

賤の女が糸くる小屋に月ふけてものさびしくもはたをりの鳴く

ゝゝ殘暑　大阪　福原菫子

賤が家の蚊やりのけふり打なびき猶いやましのあつさなりけり

ゝゝゝ初秋　長野　北澤千枝子

秋桐のはやちりそめしきのふ今日すだく虫の音いと哀れなれ

ゝゝゝ更級の月　長野　關谷巳子

そのむかしすみにし跡もしのばるゝ姥捨やまのつきのさびしき

ゝゝゝ納涼　岡山　黑瀨政の子

風そよく木のしたかげにきてみれは我よりさきに人のみえけり

ゝゝ〇母の墓に詣でゝ　磐城　鈴木菊史子

詣でなへていなむとすれは御墓への萩につゆけきゆふぐれの袖

〇初秋露　備後　石井千鶴子

三日月のさやかにやどる野邊見れは秋立つかせの露むすふらん

〇初秋風　長野　岡田千穗子

なし〱となくせみの音に夏くれて尾花がそでにあき風そふく

ゝゝゝ湖　埼玉　横田政子

異浦はゝなれ小島のこゝちしてつゞくなみ路はすへてわがくに

ゝゝゝ柳　東京　瀨藤千代子

夕立はあとなく晴れてすゞかせにうちなびくなりあをやきの糸

〇折にふれて　香川　松永茂子

山かけを流るゝ淸水いつか消れて住みし隱士の見えずなりたる

〇野螢　宮城　大槻やす子

夜もすから消きえやらてとびゝのゝなもおもしろくとぶ螢かな

ゝゝゝ名所井　埼玉　横田秋子

たび人のまつたちよりてくみつらんあふさか山のはしりゐの水

ゝゝ〇朝顔　宮崎　藤井清子

はかなしや露のいのちと知らてやは色香きそへる庭のあさがほ

俳句

天賞

砧　東京　小田初枝子

風の音やめばまたうつ砧かな

地賞

螢　常陸　江馬つる子

眠る子の手よりこほれて飛ほたる

人賞

立秋　常陸　岡田萬子

座敷にもまた秋たつや破障子

選外逸秀

○○清水　栃木　井上瑞枝子

手に掬ふ清水に落す扇かな

○○蚊　東京　江田延代

蚊一つに寝られぬ旅の泊りかな

○○花野五句　松山　首藤さと子

武夫の跡偲はるゝ花野かな

花野來て花野に戻る女觀

草を摘む花野に白き鳥が立つ

よき人とそゞろ歩きの花野かな

我君の足の早さよ花野道

○夏菊や木陰へまはす客の下駄　香川　松永茂子

ヽヽヽ派手にして且糊こわき浴衣哉

○秋の野や千草に露の置きかげん　大阪　木村春江

ヽ○眞清水にラムネひやして夏の月　肥後　友永常子

○竹の葉に微風も見えぬ暑さ哉

○御社の木末に高し蟬の聲　越後　松永しげ子

○氷賣る峠の茶屋に蟬の聲　東京　伊藤学子

○濁なき朝の心地や蓮の花　常陸　岡田爲子

ヽヽヽ炎貌や河原に焼くる石地藏

ヽヽヽ朝顔や睡が伏家に咲きながら

ヽヽヽ朝顔や暑中休暇も半過ぎ

○花咲いて小猫がくろゝ糸瓜哉

ヽヽ○流石勇士の妻の泣く夜かな

○朝顔や朝々花の珍らしき

ヽヽ○苫舟にさしかゝりけり雁の棹

ヽヽヽ新月と樂しむ夜や雲多し

○涼しさや竹の影入る月の窓　岡山　黒瀬政の子

○ものすべて淋しき夕の時雨かな　磐城　鈴木菊史子

○釣直す燈籠ら月もへだて哉　信濃　中山貞子

ヽヽヽ納涼者のやりとり忙し夏休　東京　永井ふさ子

○星一つ落ち行く方は我古郷

○秋風や郡に登る人の親　東京　靜園園子

○虫の音や鎌倉山の星月夜

○野分して女ばかりの留主居哉

ヽヽ○旅心の衣手寒し今朝の秋

ヽヽ○明月に我は歎なき恨かな

ヽ○夜毎通ふ露の深草何朝臣

○秋風や奈古にふりたる渡し守　東京　谷口貞子

ヽヽヽ吹き散らす鵲の扱羽や初嵐

○人と馬とつゞくや瀬田の秋日和

ヽヽヽ霧かあらす花野につゞく淺間山

○松茸の秋や詩人を宿しけり　松山　岩崎きよ子

○野分にて鬼灯ちりし妹が庭

ヽ○打水やみやびづくりの京美人　東京　堀田たけ子

ヽヽ〇今様の四田ちゞみや夏の月
ヽ〇山寺や若き尼泣く岩清水
ヽ〇走馬燈いくさ繪はゝや古びけり
ヽヽヽ武蔵野に草茫々と風かをる
ヽヽヽ雨晴れて一きは高し蟬の聲
美濃　佐藤みよ子
〇風鈴のおと耳にたつ秋の風
松山　上原のぶ子
〇蚊も蠅も力のぬけし秋のかせ
〇一日を團扇に暮らす暑さ哉
能登　栗倉蓋子
〇涼しさや肌すき通るうすごろも
ヽヽヽ我門に人聲多し俄雨
ヽヽヽ蚊やりして烟をふせぐ團扇かな
ヽヽ〇涼しさや清水くむ手に月の影
ヽヽヽ走る帆に心の通ふ暑さかな
常陸　中山すゑ子
〇灯のともる渡しの舟やほとゝぎす
下野　井上貞子
〇歩みてゝ又戻りけり岩清水
〇青すだれ琴柱をくばる姫若き
ヽ〇蟬なくやお寺のかべに西日さす
ヽ〇木下闇いでゝ川あり螢とぶ
〇虫干にいでたる書よむすゞみだい
〇涼しさや枕に響く波の音
東京　江田延代子
ヽヽ〇炎天に痩犬の舌の長き哉
ヽヽ〇鷭のなくや三里が芦つゞき
ヽヽヽ夕立や新田に蛙鳴かざりき
栃木　井上瑞枝子
〇紫陽や雫したゝる庭の隅
ヽヽ洪水や一村廿日水びたし
群馬　竹のふし子
ヽ〇涼しさをつなぎとめたり瀧の糸
東京　伊藤春子
ヽヽヽ味噌汁に七味のからき今朝の秋
東京　淺野よし子
ヽヽヽおとなへば柚味噌の里と申しけり
〇不器用の巨燵つくろう夜長かな
東京　山本ひさ子

〇雀蛤となつて蜃氣を吐く日かな
〇戸をたゝく漢聲が門や後の月
ヽヽヽ緑葉の露に涼しき夕邊哉
新潟　牧はぎ子
〇水打ちしあとへ螢の来りけり
〇炎天や原の地蔵の砂けぶり
〇貸橋の番人小屋や夏やなぎ
ヽヽヽ青簾洩るゝ蘭奢の香り哉
横須賀　高橋つれ子
ヽヽヽ若竹のかけ戦きけり青嵐
〇竹を吹く風のあまりや蚊㡡の波
〇河骨や馬洗ふにも足らぬ水
ヽヽヽ今朝の秋奈良の小川の水の音
相州　中御園杉枝子
ヽヽヽ朝寒や經三巻の文机
ヽヽヽ島に居て海の廣さや天の川
ヽヽヽ凹凸の駱駝の背に秋暑し
ヽ〇うたゝねの夢にもすゝし富士登山
群馬　石井寛子
ヽヽ初秋は目いつはいの絲哉
東京　豊田とよ子
ヽヽヽ指穴の障子たつれて秋の風
ヽヽ〇三井の鐘堅田にきえて秋の暮
〇朝の蚊や欠伸の口に二つ三つ
近江　大江よし子
ヽ〇足袋はたく手拭白し雲の峰
群馬　江崎さく子
ヽヽヽ秋立つや聲も哀れになく驢馬
越後　大橋つる子
ヽ〇朝顔の蕾かぞふる乙女かな
千葉　江藤しな子
〇松風は夏をいつしか吹いて行く
上野　吉田うの子

◎和歌兼題

十月　秋月　紅葉
十一月　山家菊　時雨
十二月　雪　千鳥

投書家に希望

本誌詞藻欄に投稿せらるゝ方は、左の書式によりて選者に便利を與へられんことを望む

> 兼題和歌（もしくは短文、新體詩等）
>
> 題　　府縣名　　姓　名
>
> 歌ならば二行に、短文新體詩等も天地をあけて、字のあまりつまらぬやうに願ひたし
>
> 區郡町村名

右は兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〳〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはその以上の名を並べることなきやうに願ひたし、用紙は葉書にても差支なけれど、相成べくは半紙に認めて、開き封（第四種郵便物として）にておくらるれば殊によし、

投書はすべて女子に限り、以上の希望も、要するに女子らしき投書の仕方は所謂書生流にあらざるを、其の人柄とゝもに採りたきなり、

定價　全國無遞送料

一冊	前金　貳拾錢
三冊	前金　五拾七錢
六冊	前金　壹圓拾錢
拾貳冊	前金　貳圓拾錢

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に郵錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年八月廿八日印刷
明治三十九年九月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社　國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社　國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

- 島田佳矣・野口駿尾 共著 ◉女子技藝 編物模様圖案 全五冊 定價（松ノ巻四十錢 竹ノ巻五十錢 蘭ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢）郵税各二錢
- 棚橋絢子 著 ◉女道叢話 全 定價金三十錢 郵税金四錢
- 三輪田眞佐子 著 ◉女子之本分 全 定價金二十五錢 郵税金六錢
- 三輪田眞佐子 著 ◉女子處世論 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 磯部武者五郎 著 ◉家計簿記法 全 定價金十五錢 郵税金二錢
- 藤野天城 著 ◉女子小觀 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 堀内新泉 著 ◉女樂師 全 定價金卅五錢 郵税金六錢
- 松川霓州 著 ◉結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵税金四錢
- 堀内新泉 著 ◉家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵税金四錢
- 女鑑編輯局 編 ◉新編 ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

- 梅澤清一著　◉清少納言と紫式部　全　定價金卅五錢　郵稅金六錢
- 澁谷愛著　◉萬國女子風俗　全　定價金二十五錢　郵稅金四錢
- 堀內新泉著　◉少女讀本　全三冊　定價各金十八錢　郵稅各金四錢
- 大町桂月著　◉常盤御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 小林雨搭著　◉勾當の內侍　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 濱田廉著　◉袈裟御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 國府犀東著　◉靜御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 長田偶得著　◉顏世御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 杉谷正隆著　◉家庭訓歌修身百首　全　定價金二十錢　郵稅金四錢
- 高瀨眞卿著　◉學校家庭修身一夕話　全　定價特六十錢 並三十八錢　郵稅八錢 六錢
- 指原乙子著　◉女子文章軌範　全　定價金三十錢　郵稅金四錢

文部省體操遊戲取調委員
井口あくり　可兒徳　川瀨元九郎
高島平三郎　坪井玄道　諸先生共著

體育の理論及實際

總クロース
菊版五百餘頁
正價金壹圓參拾錢
郵稅拾錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學の大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは現今本邦中本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戲收調委員として調査研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き教育上並に生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操教室等には石版摺着色畵を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親しく教授を受くるが如し目下暑中休暇に際し新式體操講習に志す人は勿論學校其他苟も體育に志ある人は必一本を備へざる可らず

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八八二六九三　株式會社　國光社

大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社

女鑑

明治三十九年九月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾六年第十號　第三種郵便物認可



東京築地株式合社[illegible]社印刷